

川前2遺跡

第5次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第244集



2022

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター



か わ ま え
川前 2 遺跡

第 5 次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 244 集

令和 4 年

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター



序

本書は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、川前2遺跡の調査成果をまとめたものです。

川前2遺跡は、山形市と中山町の境界に展開する遺跡です。この付近一帯は、山形盆地にあたり、最上川が盆地の北部を、南部を須川がつくりだしています。山形盆地には、国指定史跡の山形市嶋遺跡、天童市西沼田遺跡をはじめ、多くの古墳時代から平安時代の遺跡が存在することが知られており、周辺では発掘調査がなされてきました。古くから人々がこの地を開拓し、米どころ山形の基礎を築いていたことを示す歴史的に重要な地区といえるでしょう。

この度、須川河川改修事業に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される、川前2遺跡の第5次となる発掘調査を実施しました。調査の結果、古墳時代前期の竪穴建物や土坑を検出し、多数の遺物を得ることができました。これらは当時の社会を考える上で、大きな成果です。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

令和4年3月

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 齋藤直樹

凡 例

- 1 本書は、須川河川改修事業に係る「川前2遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 本書の執筆は、天本昌希・高桑弘美が担当し、齋藤稔、伊藤邦弘、須賀井新人が監修した。本書の執筆分担は、以下のとおりである。

第Ⅰ章 第1節 高桑弘美

第2節 高桑弘美

第3節 天本昌希

第Ⅱ章 天本昌希

第Ⅲ章 天本昌希

第Ⅳ章 天本昌希

第Ⅴ章 第1節 株式会社加速器分析研究所

第2節 パリノ・サーヴェイ株式会社

第3節 天本昌希

第Ⅵ章 天本昌希

- 5 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（世界測地系）により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を表す。
- 6 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ST…竪穴建物 SB…建物 SK…土坑 SD…溝状遺構 SP…ピット

- 7 遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示しているが、基本は以下の通り。

遺構 = 1/60（竪穴建物） 1/40（土坑など） 1/20（ピット）

遺物 = 1/3（土器類） 1/2（弥生土器）

- 8 遺物実測図の断面黒塗りは須恵器を表す。また、拓影断面図及び平面を図化したものの配置は左から内面・断面・外面の順に掲載した。なお、外面のみを図化したものは断面の左に配置している。

- 9 基本層序および遺構覆土の色調記載については、2018年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版票標準土色帖」によった。

- 10 遺物の法量について、単位は基本的にミリとグラムである。口径、底径の残存率が1/2をこえないものの値は（ ）で復元値として示す。欠損のための残存値は< >で示す。

- 11 発掘調査、整理作業および本書を作成するにあたり、下記の方々からご指導とご助言をいただいた。（敬称略）

平成30年度 阿子島功 小野本敦 中山俊之 野中仁 福田聖（五十音順）

令和2年度 青山博樹 菊地芳朗 能登谷宣康 柳沼賢治（五十音順）

調査要項

遺跡名	かわまえ 川前2遺跡
遺跡番号	201 - 244
所在地	山形県山形市大字中野目字赤坂ほか
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調査受託者	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
受託期間	平成30年4月1日～令和4年3月31日
現地調査	平成30年6月6日～11月2日
調査担当者	平成30年度 業務課長 伊藤邦弘 課長補佐 須賀井新人 主任調査研究員 齊藤主税（調査主任） 調査員 白戸このみ・加藤津奈樹 令和元年度 業務課長 伊藤邦弘 課長補佐 須賀井新人 調査員 白戸このみ（整理主任） 令和2年度 業務課長 伊藤邦弘 課長補佐 須賀井新人 主任調査研究員 天本昌希（整理主任） 令和3年度 業務課長 須賀井新人 課長補佐兼専門調査研究員 高桑弘美（整理主任）
調査指導	山形県教育庁文化財・生涯学習課（平成30～令和元年度） 山形県観光文化スポーツ部文化振興・文化財課（令和2年度） 山形県観光文化スポーツ部文化振興・文化財活用課（令和3年度）
調査協力	山形市教育委員会 中山町教育委員会 山形県教育庁村山教育事務所
業務委託	基準点測量業務 共栄測量設計株式会社 遺構測量図化業務 株式会社ワクニ 理化学分析業務 株式会社加速器分析研究所 パリノ・サーヴェイ株式会社
発掘作業員	相澤秋夫 安孫子稔 大内智郎 岡崎四郎 奥山芳夫 小野かほり 小野耕司 柿崎次男 片倉富代 加藤道子 栗田弘一 黒田利馬 小沼末子 斎藤榮子 鈴木 明 高橋克栄 高橋敏昭 竹田重夫 武田正博 松田文男 松本 栄

宮川剛一（五十音順）
整理作業員 荒木恵理子 板垣牧子 木村由紀子 志鎌久悦 清水佳子 鈴木 薫
武田 啓 千歳浩幸 土屋真一 中村史子 半田 清 山口裕美子
吉田由美（五十音順）

目 次

I	調査の経緯と経過	
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過	2
3	発掘調査と整理作業の方法	3
II	遺跡の位置と環境	
1	地理的環境	11
2	歴史的環境	12
III	検出した遺構	
1	遺構の概要	19
2	検出した遺構	19
IV	出土した遺物	
1	出土遺物の概要	35
2	遺構ごとの出土遺物について	35
3	遺構外出土遺物	39
V	理化学分析	
1	2018年度	51
2	2019年度	54
3	小括	59
VI	まとめ	
1	古墳時代の川前2遺跡について	63
2	SB3建物の判断について	70
	報告書抄録	巻末

表

表1	山形盆地における古墳時代～古代の遺跡	18	表6	2018年度放射性炭素年代測定結果2	54
表2	出土遺物観察表1	49	表7	2019年度分析試料一覧	57
表3	出土遺物観察表2	50	表8	2019年度放射性炭素年代測定結果	57
表4	2018年度分析試料一覧 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	53	表9	植物珪酸体含有量と珪化組織片の産状	58
表5	2018年度放射性炭素年代測定結果1	53	表10	遺構別組成表	69

図 版

第 1 図	調査区位置図	5	第 18 図	出土遺物 1 (SB3)	41
第 2 図	大・中グリッド配置図	6	第 19 図	出土遺物 2 (ST4)	42
第 3 図	遺構配置図 1	7	第 20 図	出土遺物 3 (ST4、ST5)	43
第 4 図	遺構配置図 2	8	第 21 図	出土遺物 4 (ST7、ST10、ST11、ST12)	44
第 5 図	遺構配置図 3	9	第 22 図	出土遺物 5 (ST17、SK36、SK45)	45
第 6 図	遺構配置図 4	10	第 23 図	出土遺物 6 (SK45、SK49、SP32・33、SP42)	46
第 7 図	山形盆地の地形分類と古墳時代前期の遺跡分布	16	第 24 図	出土遺物 7 (遺構外出土遺物 1)	47
第 8 図	川前 2 遺跡周辺の遺跡分布図	17	第 25 図	出土遺物 8 (遺構外出土遺物 2)	48
第 9 図	検出遺構 1 (SB3)	26	第 26 図	植物珪酸体含有量	58
第 10 図	検出遺構 2 (SB3、ST4)	27	第 27 図	第 3 グループの較正年代	60
第 11 図	検出遺構 3 (ST5、ST6・7)	28	第 28 図	第 1 グループの較正年代	61
第 12 図	検出遺構 4 (ST5、ST6・7、ST17)	29	第 29 図	第 2 グループの較正年代	61
第 13 図	検出遺構 5 (ST10、ST11、ST12)	30	第 30 図	2018・2019 年度分析試料較正年代一覧	62
第 14 図	検出遺構 6 (SK36、SK37、SK44、SK47)	31	第 31 図	川前 2 遺跡出土遺物器種分類 1 (S=1/6)	65
第 15 図	検出遺構 7 (SK45、SK49、SD9)	32	第 32 図	川前 2 遺跡出土遺物器種分類 2 (S=1/6)	66
第 16 図	検出遺構 8 (SP18～SP31)	33	第 33 図	川前 2 遺跡編年図 (S=1/8)	69
第 17 図	検出遺構 9 (SP32～SP48)	34	第 34 図	周溝をもつ建物計測図	71

写真図版

写真図版 1	調査区全景	写真図版 16	発掘調査
写真図版 2	調査区全景	写真図版 17	整理作業・調査区周辺現況
写真図版 3	SB3 建物	写真図版 18	SB3 建物出土遺物
写真図版 4	SB3 建物	写真図版 19	SB3 建物出土遺物
写真図版 5	ST4 竪穴建物	写真図版 20	ST4 竪穴建物出土遺物
写真図版 6	ST5 竪穴建物	写真図版 21	ST4 竪穴建物出土遺物
写真図版 7	ST6・ST7・ST8 竪穴建物	写真図版 22	ST4・ST5 竪穴建物出土遺物
写真図版 8	ST12 竪穴建物	写真図版 23	ST7・ST10・ST11・ST17 竪穴建物出土遺物
写真図版 9	ST17 竪穴建物、SK36・SK37 土坑	写真図版 24	ST12 竪穴建物出土遺物
写真図版 10	SK44・SK45・SK47・SK49 土坑	写真図版 25	SK36・SK45 土坑出土遺物
写真図版 11	SP32・SP34・SP38・SP39・SP40・SP41・ SP42・SP43 ピット	写真図版 26	SK45 土坑出土遺物
写真図版 12	SP48・SP18・SP19・SP21 ピット、ST10・ ST11 竪穴建物、SD9 溝	写真図版 27	SK49 土坑、SP32・SP33・SP42 ピット、 遺構外出土遺物
写真図版 13	ST4 周辺ピット群、SB3 建物	写真図版 28	遺構外出土遺物
写真図版 14	基本層序	写真図版 29	遺構外出土遺物
写真図版 15	打合せ・発掘調査	写真図版 30	植物珪酸体

I 調査の経緯と経過

1 調査に至る経緯

国土交通省では、洪水による浸水被害を軽減するために、直轄管理区間の支川を含めた堤防や河道掘削の整備といった河川改修事業を推進している。多様な価値を有した地域の財産である川を次世代に引き継ぐため、継続的に調査・点検を実施することで、適正な川の維持管理が図られている。

最上川支流のひとつ須川は、県都山形市を流域に抱えた最上川上流部の支川の中で、最も大きな流域を持つ河川である。昭和 56（1981）年 8 月洪水では沿川の家屋浸水による被害が発生しており、また近年では沿川の都市化が進んでいることから、洪水による浸水被害を軽減するため平成 11（1999）年度より河川改修が行われてきた。川前 2 遺跡が立地する山形市中野目付近では遺跡の約 100 m 下流部で馬見ヶ崎川と、さらにその約 500 m 先では立谷川と合流している。このため、中野目地区周辺は洪水時においては冠水の頻発地域となっており、治水対策が喫緊の課題となっていた。改修事業は蛇行によって狭く浅くなっている河道を直線的に改修して流下能力を向上させるほか、堤防の拡幅や嵩上げ及び河川敷内の土取り掘削といった河川環境整備を目的としている。

山形県教育委員会では須川河川改修の事業計画を受けて、事業用地に係る遺跡詳細分布調査を平成 13（2001）年度より実施してきた。馬見ヶ崎川との合流部付近に発達した河岸段丘上における試掘調査の結果、奈良・平安時代の遺構と遺物、古墳時代の遺物が発見されたことから、「川前 2 遺跡」として新規に登録されるに至った（山形県教育委員会 2003）。遺跡範囲は山形市と中山町に広がるが、山形県遺跡地図では市町村名コード山形市 201-244 で登録されている。遺跡の取扱いについて事業主体の国土交通省東北地方整備局山形工事事務所（当時）と協議が行われ、事業により削平を受ける 8,500 m²の範囲を対象に、当財団が委託を受けて平成 14 年（第 1 次）と同 15 年（第 2 次）の 2 カ年に亘る発掘調査を実施している。第 2 次調査の過程において、古代の遺構

検出面の下層に古墳時代の生活面が存在することが判明した。このため、調査終了後に埋め戻しを行って現状を保持し、下層の発掘調査に備えた。

当財団では下層面の発掘調査に先立ち、検出面までの深さや遺構・遺物の遺存状況を把握するための確認調査を平成 17（2005）年に 600 m²を対象に実施した（山形埋文 2006）。その結果、古代遺構検出面の 20～30cm 下より竪穴建物跡や溝跡の一部が検出され、古墳時代前期の土師器など 3 箱の遺物が出土した。遺構・遺物は第 1 次・2 次調査範囲同様、全面への広がりが見られた。確認調査の結果を踏まえて山形県教育委員会は国土交通省と協議し、平成 19 年（第 3 次）と同 20 年（第 4 次）の 2 カ年に分けて、当財団が発掘調査を受託する運びとなった。なお、これらの調査成果は第 1・2 次（山形埋文 2011）及び第 3・4 次発掘調査報告書（山形埋文 2012）として刊行されている。

これまでも随時改修が進められてきたところであったが、近年の豪雨災害発生を踏まえた重要インフラの緊急点検に基づき、蛇行部のさらなる河道掘削により洪水氾濫時の水位を低減させて、安全性の向上を図ることが期待された。当該遺跡が立地する須川左岸部においても、河道をより直線的に改修すべきとの判断から、再度の掘削が計画された。これを受けた山形県教育委員会では、平成 29（2017）年に対象地区の試掘調査を行い、今回の事業予定地全体が発掘調査対象になることが確認された（山形県教育委員会 2019）。また、立谷川との合流地点に近い周知の「中野目 II 遺跡」も事業範囲に含まれた。遺跡の取扱いの協議中、掘削範囲の設計変更なども加えられたが、発掘調査は国土交通省山形河川国道事務所からの委託を受けて、翌平成 30 年度に実施することで調整が図られた。

平成 30（2018）年 3 月に中野目 II 遺跡と合わせ、報告書刊行までに要する年度毎の積算依頼に対する回答を行った。同年 4 月 1 日付けで発掘調査委託契約を締結し、現地調査開始に備えての諸準備に着手した。4 月 13 日、国土交通省山形河川国道事務所工務第一課及び

国土交通省山形河川国道事務所寒河江出張所担当者と現地で打ち合わせを行い、事業範囲や排土置き場、車両進入路等を確認した。山形県教育庁文化財・生涯学習課あて法 92 条に基づく「埋蔵文化財発掘調査の届出」を行い、4 月 26 日付けで届出に対する通知を受理した。5 月 15 日、山形市明治コミュニティセンターにおいて、国土交通省山形河川国道事務所工務第一課及び国土交通省山形河川国道事務所寒河江出張所、山形県教育庁文化財・生涯学習課、山形市教育委員会、中山町教育委員会の関係機関と、調査期間や方法等の実施計画と現状での課題や問題点等について打ち合わせを行った。その後、場所を調査現場に移し、現地確認を実施した。

4 月 27 日と 5 月 8 日に、中山町中央公民館で川前 2 遺跡と中野目Ⅱ遺跡の発掘作業員募集説明会を開催し、川前 2 遺跡では、22 名の発掘作業員を雇用了。

2 調査の経過

発掘調査の経過

現地調査期間は、平成 30 年 6 月 6 日から 11 月 2 日で、調査員 3 名体制で進めた。調査事務所は、お達磨桜公園の駐車場を中山町から借用し設営した。

6 月 6 日に器材搬入し、調査を開始した。6 月 7 日・8 日にトレンチ調査を行い、6 月 12 日から 6 月 25 日まで重機による表土除去と残土成形を実施した。並行して 6 月 20 日より、調査区南側から遺構検出を進め、6 月 28 日から遺構精査を開始した。写真撮影、記録作業は必要の際に随時行った。SB3（現地調査では SD1・2）は、7 月初めに幅 50～70 cm の溝が方形に巡ることが確認され、溝内から高坏等が出土し、方形周溝状遺構として精査が進められた。

8 月 20 日より上層で検出した竪穴建物などの精査を継続しつつ、これらの区域を除いて、下層面確認のためのトレンチ調査を行った。その結果を踏まえ、8 月 23 日から重機による 2 回目の掘削を実施した。掘削後の 8 月 27 日、国土交通省山形河川国道事務所工務第一課、山形県教育庁文化財・生涯学習課と現地で調査状況の確認を行った。

9 月以降も、遺構の精査とトレンチ調査を継続した。9 月 14 日・18 日に 3 回目の重機による表土除去と残土運搬を行った。

10 月 6 日に、国土交通省の同事業に係り発掘調査が行われていた隣接する中野目Ⅱ遺跡と共に現地説明会を開催し、40 名の参加があった。

10 月 9・10 日、基準点測量業務を委託した共栄測量設計株式会社が現地で業務を行った。河川距離標高杭須川地区 NO.11・NO.12 を与点として、13 点の基準杭を打設した。

10 月 12 日・23 日、遺構測量図化業務を委託した株式会社ワクニが、ラジコンヘリによる空中写真撮影を実施し、図化用の撮影、調査区全景の俯瞰撮影を行った。

現地調査最終週は、記録作業を中心にを行い、10 月 25 日に器材を撤収した。器材搬入から器材搬出までの期間は、延べ 142 日間に及んだ。なお、10 月 26 日から 11 月 2 日にかけて調査区の埋め戻しを行った。

川前 2 遺跡と中野目Ⅱ遺跡の立地地形や河川跡などの堆積環境について、山形大学名誉教授阿子島功氏から現地で指導をいただいた。

整理作業の経過

発掘調査の結果、古墳時代や奈良・平安時代の土器を主として、整理用コンテナ 10 箱の遺物が出土した。報告書刊行までの整理期間は、委託者との調整で、4 ヵ年を要することになった。

初年度は発掘調査終了後、図面や写真等記録類の整理を実施した。遺物は現地調査終了を待たず、10 月から洗浄と注記を開始し、11 月下旬より接合に着手した。現地調査後に、放射性炭素年代測定を株式会社加速器分析研究所に委託した。2 月には宮城県東松島市で開催された第 45 回古代城柵官衙検討会において川前 2 遺跡の調査成果と各地の遺跡との比較調査を行った。3 月には、埼玉県立博物館・公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団・公益財団法人印旛郡市文化財センター・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団において、方形周溝状遺構や装飾器台等の古墳時代の遺物に関する比較調査を行った。

令和元年度は 4 月当初より土器の接合と図面整理を継続したうえ、接合土器の復元も開始した。図面は遺構毎に平面図と土層断面図の補整を行った後、全体図の作成と土層注記の入力作業を行った。6 月中旬からは遺物の実測に随時移行し、10 月より報告書の原稿となる遺跡位置図等の図版作成に取り掛かった。翌年 1 月下旬より

遺物実測図のトレースを行った。

令和元年度は放射性炭素年代測定と植物珪酸体分析を委託した。その成果については、第V章に収録した。

令和2年度は遺構図の修正を経てトレースに入り、空撮図面と合成を図った。7月中頃からは、一部の遺物に写真測量を用いた実測を付加している。その後、遺構図版のレイアウトを行って報告書の編集を手掛けると共に、本文の原稿執筆にも着手した。12月に、福島大学と公益財団法人福島県文化振興財団で遺物の比較調査を行った。

令和3年度には、報告書掲載遺物の写真撮影を実施し、遺構図版とともに、写真図版の編集を行った。その後、全体的な編集作業を行った。これら諸作業と並行して本文執筆を進めた。報告書の印刷は、1月に田宮印刷株式会社に発注した。2、3月に報告書の校正作業を行い、3月末日をもって報告書を刊行した。出土遺物と記録類は、収納作業を行い3月に県に移管した。

報告書作成においては、川前2遺跡第1次～第4次調査の成果を考察し進めることに務めた。その中で、第1・2次調査報告書（山形埋文2011）と第3・4次調査報告書（山形埋文2012）の第1図調査概要図において、調査区の位置に誤りがあることが判明した。なお、第1・2次調査報告書と第3・4次調査報告書の第4図座標配置図と第5図グリッド配置図に記される調査区が、正しい位置を示していることを確認した。

3 発掘調査と整理作業の方法

グリッドと調査区

調査区を設定するグリッドは、山形県域全体を囲むように、南西端を原点に、南北をX軸、東西をY軸として、40km四方の大グリッドを設定した。原点は国土地理院の定める平面直角座標系の第X系： $X = -26000000$ 、 $Y = -12000000$ となり、X軸をA～E、Y軸をA～Cと15区画に分割している。この大グリッドの中を更に400m単位のグリッドで10000分割したものを中グリッド、これを更に4m単位で10000分割したものを小グリッドとする。中・小グリッドは、共に4桁の数字で表記し、南から北に00～99、西から東へ00～99で表記する（第1・2図）。

(例) B B 8 6 8 4 - 3 0 7 0
① ② ③ ④ ⑤ ⑥

- ①…大グリッド南北（40km 単位）
- ②…大グリッド東西（40km 単位）
- ③…中グリッド南北（400m 単位）
- ④…中グリッド東西（400m 単位）
- ⑤…小グリッド南北（4m 単位）
- ⑥…小グリッド東西（4m 単位）

本調査区をグリッドで覆うと、40km 単位の大グリッドでは「BB」に、400m 単位の中グリッドでも「8684」の中にすべて収まる。よってグリッド名を表記する際、大・中グリッドは省略し、小グリッド名のみを記す。

調査区へのグリッドの設置は、水準測量のなされた基準杭を測量業者に委託して打設したものを基準に、航空測量で測点した点を代替えしている。

遺 構

重機での表土除去後、遺構の種別にかかわらず、確認した順に、通し番号をつけていった。当センターでは遺構の種別を2文字のアルファベットで表しており、今回の調査で主に用いられるものは、SD（溝状遺構）、ST（竪穴建物）、SK（土坑）、SP（ピット）などである。この種別の後に遺構番号がつき、種別にかかわらず、通し番号でつけている。遺構番号は、調査の進展により攪乱と判断されたり、別遺構と同一のものと判断されたりするなど、欠番が出ているが、混乱を避けるため、そのまま利用している。

遺構の掘り下げは、半截やベルト状に残すなど、埋没過程を確認しながら掘り進め、断面図の記録を取った後に完掘している。

記録は測量図面と写真を主体としている。測量図面は、個別の遺構ごとに平面図、断面図をとったものと、業務委託による航空測量で平面図を作成したものとがある。前者は任意の基準点を設定し、そこからの遣り方測量によって作成している。主たる写真はフルサイズのデジタル一眼レフで、調査状況など補助的な記録にはコンパクトデジカメを用いている。

出土遺物は、グリッドごと、遺構ごとに取り上げ、出土位置情報を記録する必要のあるものには、登録番号（RP）を付し、位置情報を遣り方で平面図に記録している。

整 理 作 業

遺物の洗浄はブラシを用いて表面の泥土を落とし、乾

燥させた後、1点1点の遺物に白のポスターカラーで遺跡名や出土地点を注記した。遺跡名は「カワマエ 2-5」と記し、出土位置を記録したものには登録番号を記す。なお、本書に掲載した遺物には、これらに加えて図番号と掲載番号を記している。

遺物の接合は溶剤系接着剤を用い、接合面が不安定な場所にはエポキシ樹脂系の接着剤を部分的に用いている。欠損面の充填にはセメント系の充填剤を用いた。石製品で表面の風化が激しいものは補強剤（ナチュラルコート）を塗布した。

接合後、遺物の種類や残存状況、出土地点を勘案して実測遺物を抽出した。復元図化しているものは、基本的に口径ないし底径が1/4以上残存するもので行なった。口径や底径の残存が満たないものでも頸部や胴部の残存が同等かそれ以上あるものについては、そこから中心点を出して復元している。計測値について残存率が3/8以下のものは、推定測定値とし、（ ）で記し、1/2以上残存するものは、そのまま記している。ただし、1/2以上の残存率であっても、歪みなどで計測可能な部分が3/8以下になる場合は、（ ）を付けている。欠損資料の器高などの残存値は、< >で記す。

底部の糸切り痕や胴部片の調整痕などは拓本を打ったものをスキャンして配置している。一部の遺物の図化に

おいて、SfM（Structure from Motion）の技術を用いて作成した画像を下図としている。

古墳時代前期の編年観については、山形県内の資料をⅠ～Ⅲ期に大別した植松氏のものを用い（植松 2005）、文章中では前葉、中葉、後葉に対応させている。古代（奈良・平安時代）のものについては、阿部、水戸両氏の編年案によった（阿部・水戸 1999）。

炭素年代測定と植物珪酸体分析は、加速器分析研究所とパリノ・サーヴェイに委託して行った。

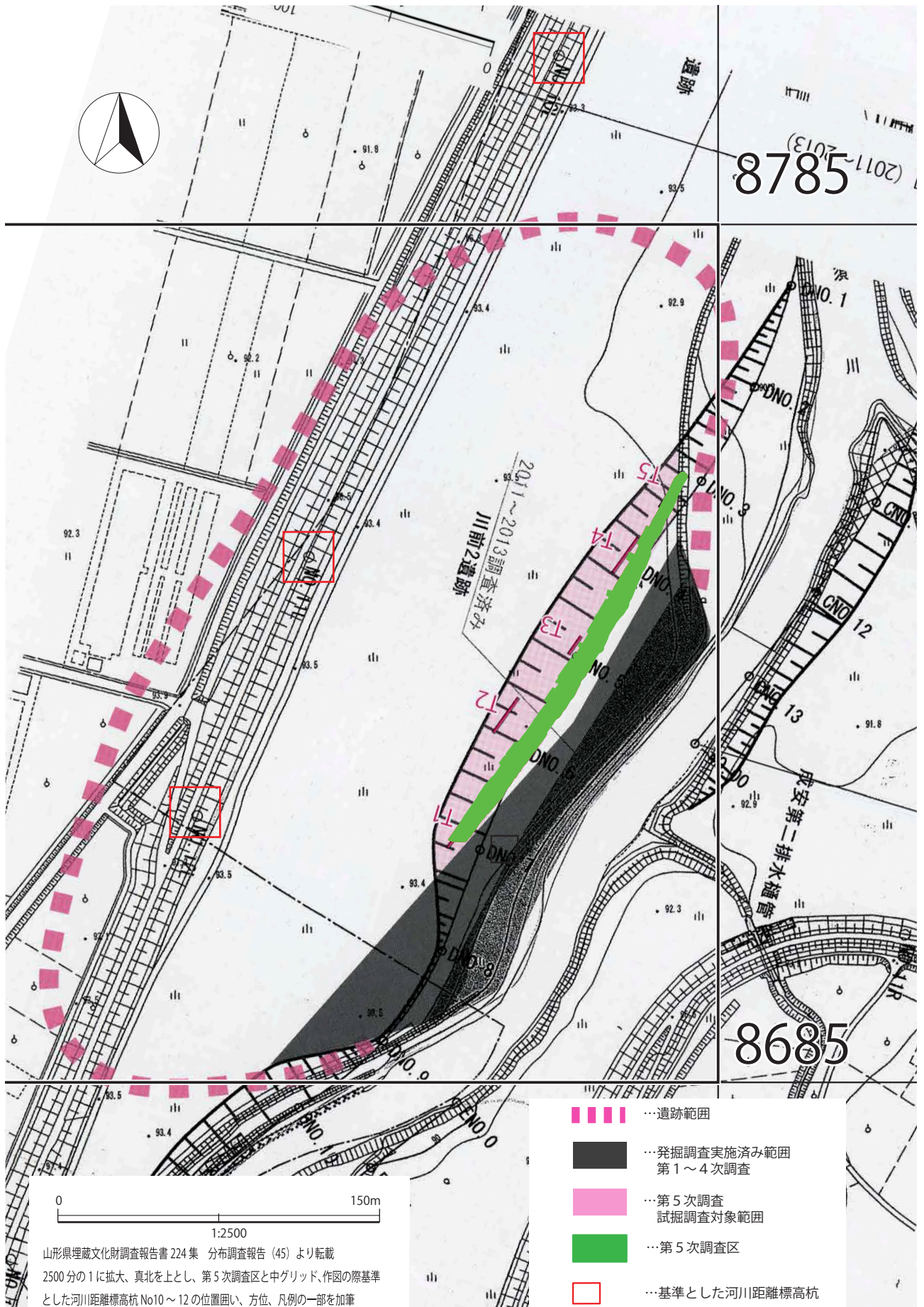
撮影したデジタル写真は、RAW データで記録し、グレーカード等を用いてホワイトバランスを調整したものを TIFF データに現像している。明るさや色味の調整、遺物写真においては背景の除去などを行っているが、それ以上の加工、部分的な除去や追加、根本的な色の変更等はしていない。調査風景など一部の写真はコンパクトデジタルカメラで撮った JPEG 画像を利用している。

図化した遺構や遺物は Illustrator 上でトレースし、拓本などのデータをあわせて版下を作っている。これに調査状況の写真を選別し、遺物写真を編集、原稿を加えたものを InDesign 上に配置したものを印刷データとして田宮印刷株式会社に渡している。

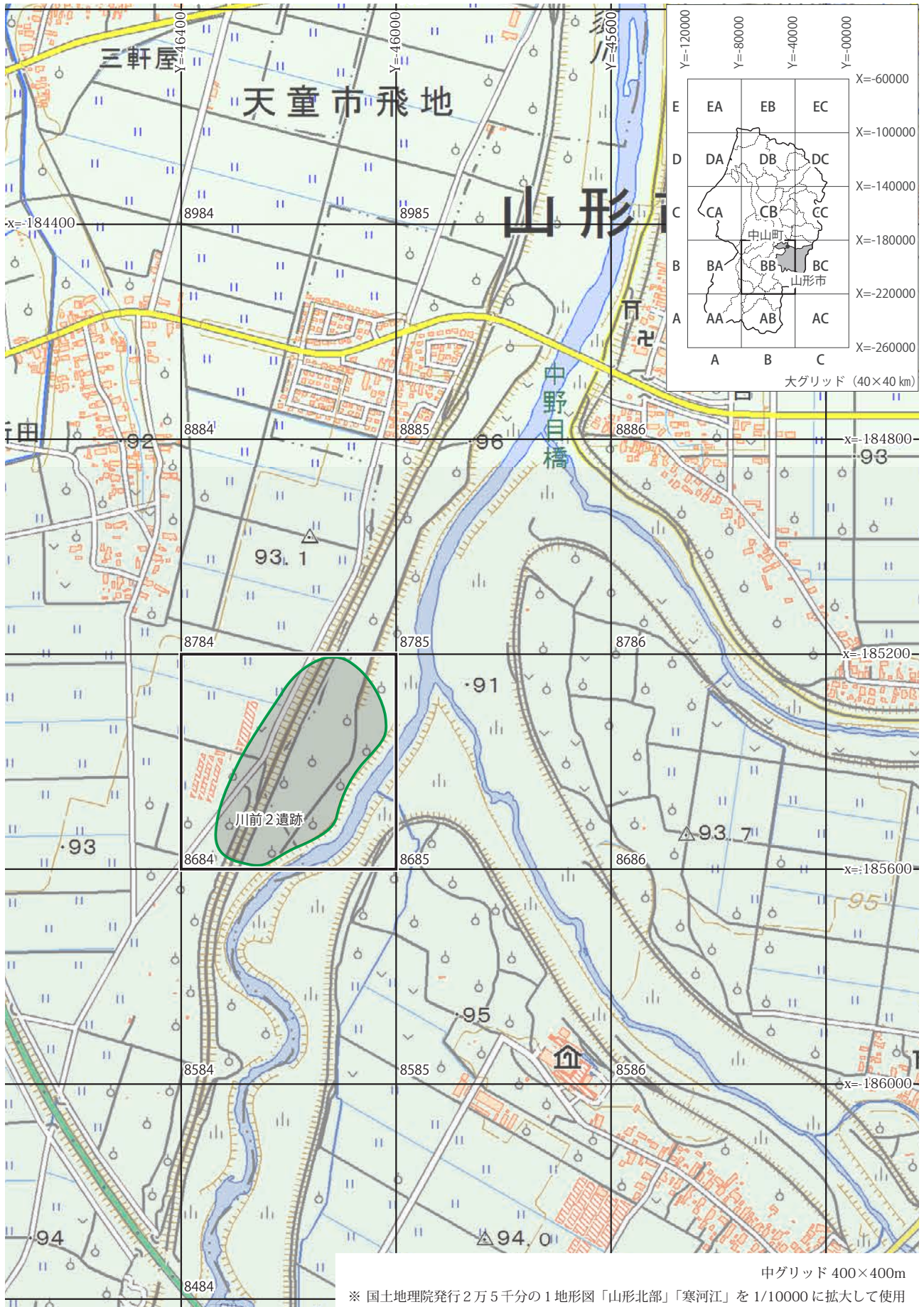
本報告刊行後、出土した遺物や記録類は、当センターの規定に則りコンテナに収納し、県に移管される。

引用文献

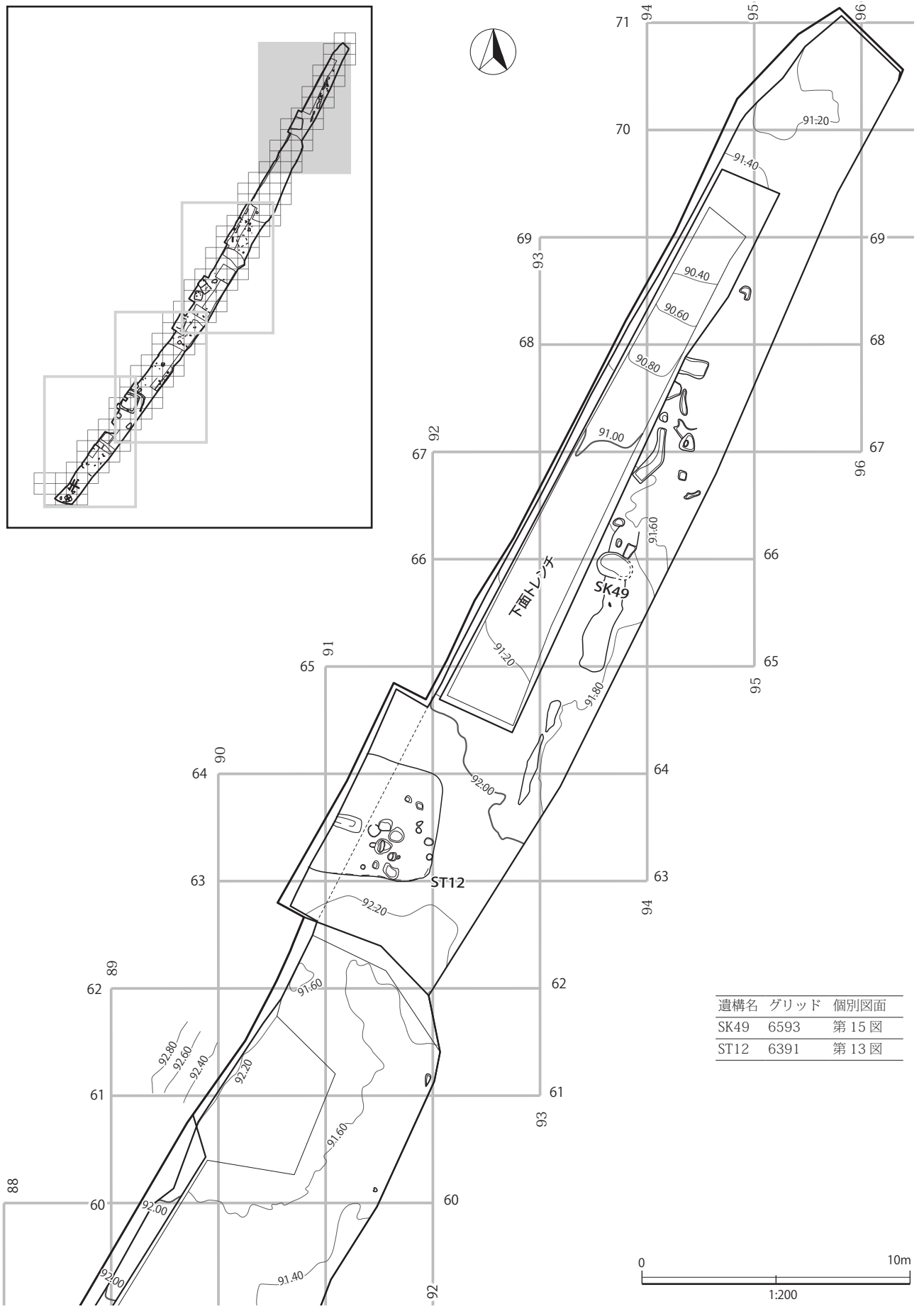
- 阿部明彦・水戸弘美 1999 「山形県の古代土器編年」『第 25 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』城柵官衙遺跡検討会
山形県教育委員会 2003 『分布調査報告書 (29)』山形県埋蔵文化財調査報告書第 203 集
植松暁彦 2005 「山形県の弥生後期～古墳時代前期の様相」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
財団法人山形県埋蔵文化財センター 2006 『年報』平成 17 年度
財団法人山形県埋蔵文化財センター 2011 『川前 2 遺跡 第 1・2 次調査』山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 193 集
財団法人山形県埋蔵文化財センター 2012 『川前 2 遺跡 第 3・4 次調査』山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 204 集
山形県教育委員会 2019 『分布調査報告書 (45)』山形県埋蔵文化財調査報告書第 224 集



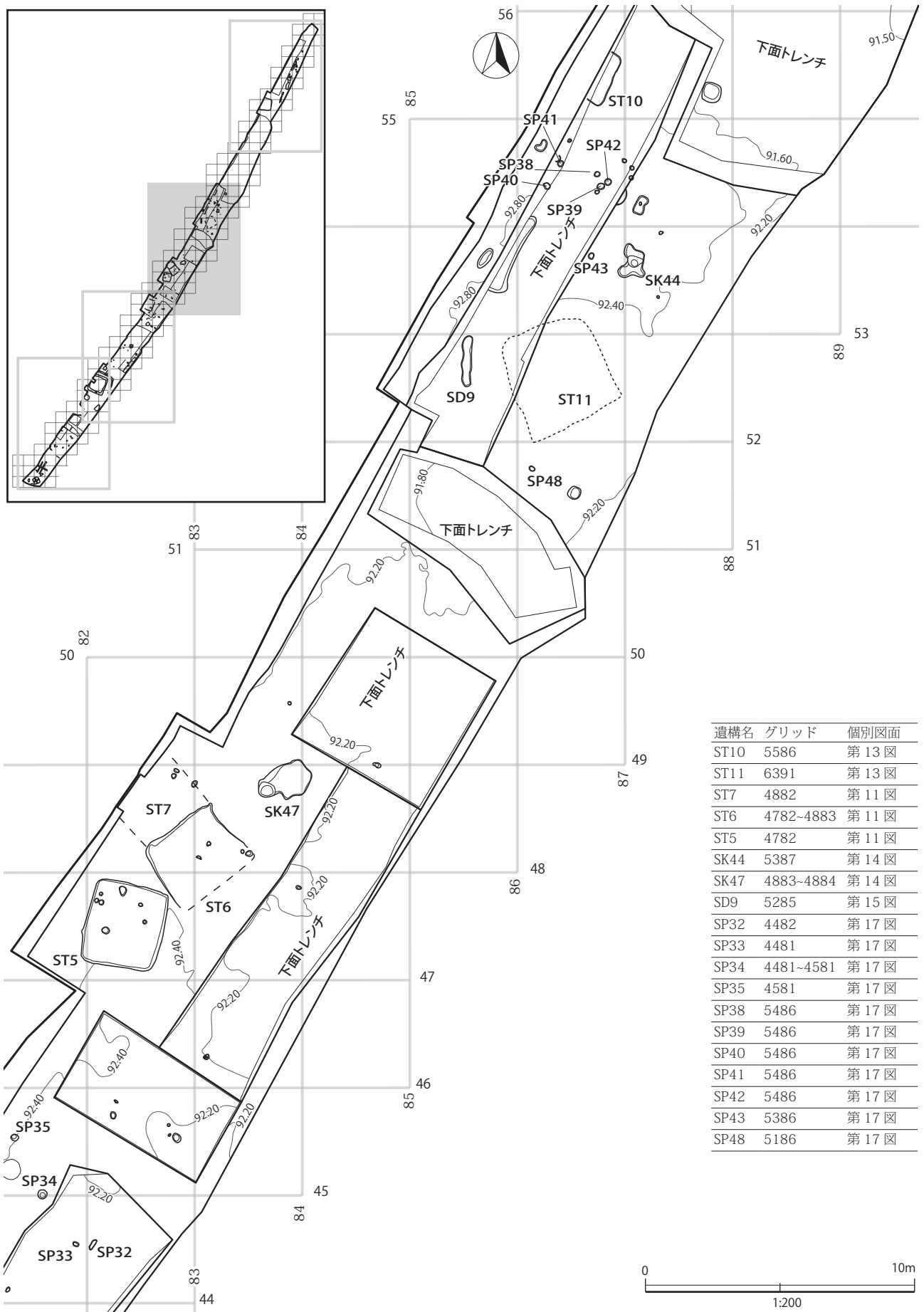
第1図 調査区位置図



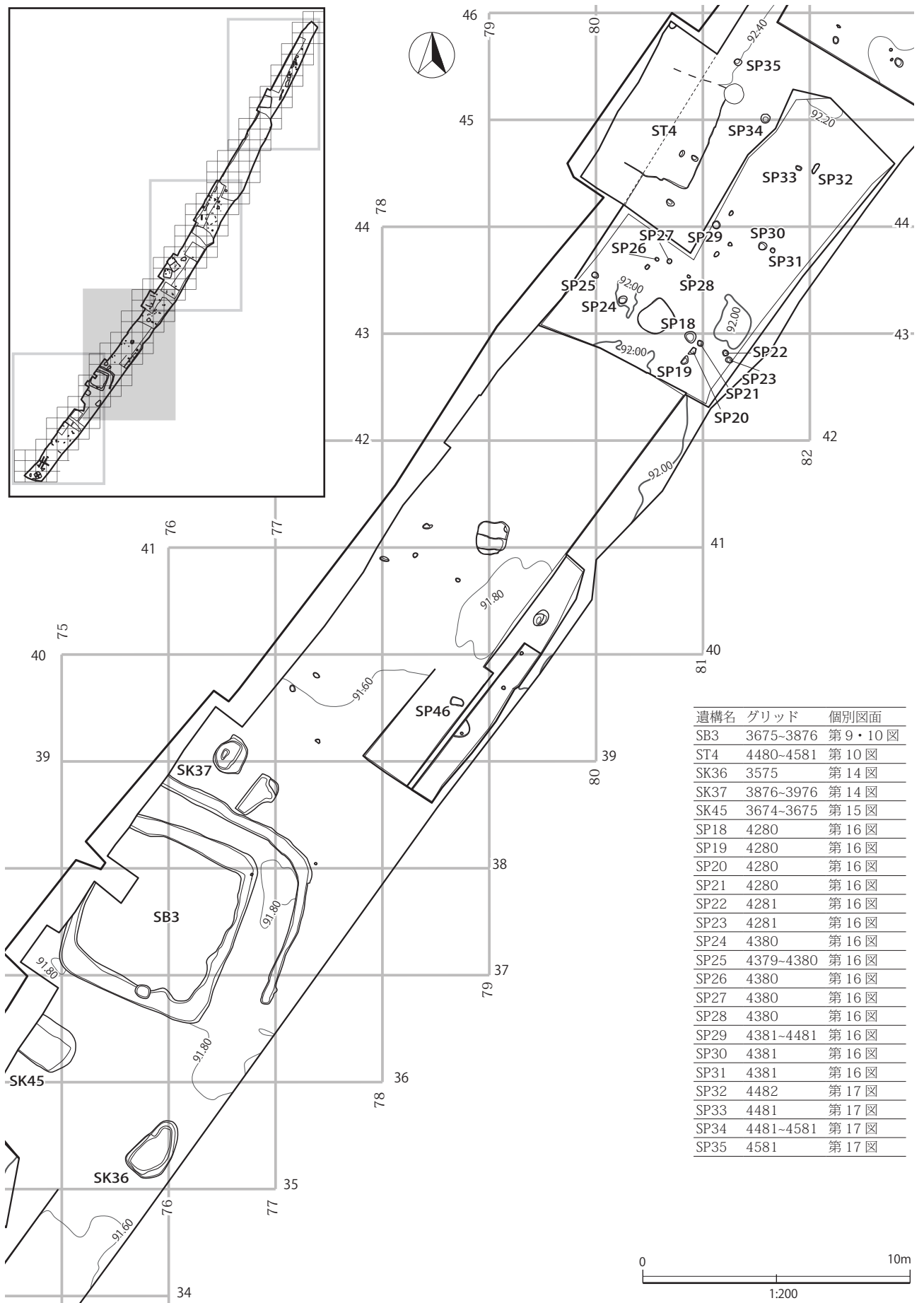
第2図 大・中グリッド配置図



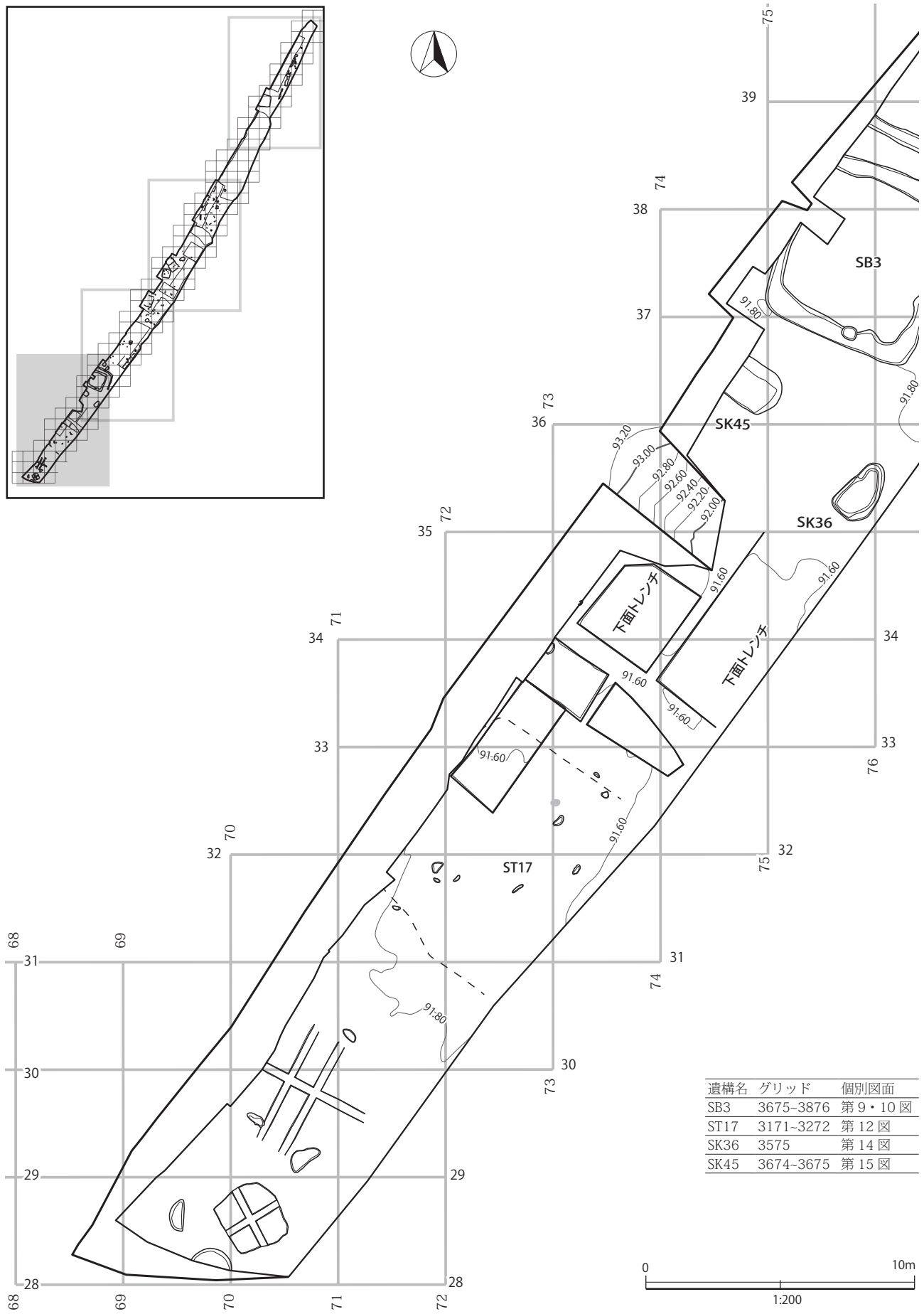
第3図 遺構配置図1



第4図 遺構配置図2



第5図 遺構配置図3



第6図 遺構配置図4

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

川前2遺跡は、山形盆地南部の盆地床を形成する須川の自然堤防上に沿って展開する遺跡である。現在の行政区では、山形市北西部の明治地区にあり、一部が中山町長崎地区の東端部にまで伸びている。所在地としては山形市大字中野目字赤坂地内と東村山郡中山町大字長崎長崎文新田地内にあたり、天童市との市境にも隣接する場所である。

遺跡の所在する山形盆地は、東を蔵王連峰などを有する奥羽山脈、西は出羽三山を含む朝日連峰に囲まれ、南北40km、東西20kmの船底型を呈する盆地である。盆地内は扇状地の発達がよく、第7図中には馬見ヶ崎川、立谷川、乱川、寒河江川などがつくる扇状地がみられる。盆地床となる須川や最上川は、これらの河川を集めて北流し、周辺に氾濫原を形成している。山形盆地の基盤は、先第三系の花崗岩類であり、その上位に緑色凝灰岩、流紋岩などの火山岩、頁岩などの堆積岩などが重なっている。盆地の埋積は、上述の河川らによってはじまる。盆地内部の第四紀以降の堆積物は、深いところで350m以上に及び、最上部10mは10,000年前以降の堆積であることがわかっている（松岡ほか1984）。さらに現地表の自然堤防など、比高差2m前後の微起伏は、2,000年前以降の形成とされる（阿子島2004）。第7図内にみえる山形盆地の地形的な特徴について、南側から順に概説しておく。

山形盆地南部は、盆地床の須川が西側に偏り、東西で非対称となっている。これは盆地の基盤層が東側の奥羽山脈から西に向かって徐々に低下し、最深部西側で急激に高度を上げるためと考えられている。こうした最深部での急変は、南北に直線的に連続し、盆地西縁部を形成する断層地帯をつくっている。須川は地図外の蔵王山を水源とし、上流で蔵王川、酢川などと合流するが、これらの河川はいずれも硫黄や銅などを含む毒水河川であり、最上川に合流するまで水質は酸性のままである。よって近代以前には魚はなく、灌漑用水にも用いられない。

なお、この須川の河床には、始良丹沢火山灰を含む最終氷期の埋没林がいくつかの地点で確認されている。盆地の構造が西側に偏って深いため、その西縁部には、扇状地が東側ほど発達していない。本沢川や富神川でつくられる小規模な扇状地がみられ、現在の集落や果樹畑が広がっている。

盆地南部の東縁部は、馬見ヶ崎川がつくりだし、その扇状地に現在の山形市の市街地が形成されている。馬見ヶ崎川扇状地は、馬見ヶ崎川1本によって形成され、盆地内は他の扇状地のように段丘地形が発達していない。標高は東側の扇頂部で200mほど、西側の扇端部で130m前後となる。他の扇状地に比べると急傾斜といえる。扇状地の外側は、西側の外縁部へとゆっくり下り、標高100～110mほどで盆地床の須川に達する。馬見ヶ崎川は北西に向かって流を進め、高瀬川と合流後は白川と呼ばれ、本遺跡付近で須川に合流する。馬見ヶ崎川は、17世紀に山形城の整備に伴い人工的に北側へ河道を移されているが、それ以前においても幾度となく河道は変化していたと考えられる。扇状地端部から外縁部にみられる自然堤防は、かつての旧河道がつくりだしたものであり、これらの痕跡は、発掘調査によって検出されている。特に山形市北西部においては、発掘調査の成果をもって、5条の旧河道が復元され、河道の幅10m前後、深さ2m、兩岸の自然堤防を含めた幅が200mであることが共通する要素として提示されている（阿子島前掲）。

第7図中央部を流れる立谷川は、奥羽山脈二口峠から西へ直線的に流れ、本遺跡付近で須川に合流する。現在の山形市と天童市の市境は、おおむねこの立谷川で南北に分かれている。この立谷川がつくりだす扇状地には、山形市の漆山地区や天童市の長岡、清池、荒谷地区などの集落が営まれてきた。現在は工業団地化も進んでいる。扇頂部は標高220mほど、扇端部で110mほどを測る。扇状地外縁部には、^{たかだま}高楯集落が展開している。中世に築かれた平城を基にした集落であるが、その周辺により古い時代の遺跡の分布も密に確認されている。よって、河

間低地であってもこの一帯は、微高地であったことが予想される。また、立谷川の中流域でも須川と同様の埋没林が発見されており、山形盆地には広く最終氷期の埋没林が残っている可能性がある。

立谷川と合流した須川は、1.6kmほど北流し、最上川につながる。この間の須川には、旧河道を明瞭に伝える三日月湖がのこされている。本遺跡の周辺を含め、現在の市境が現在の河川と一致せず、複雑な飛び地をのこすのは、こういった旧河川の状況を示すものであろう。須川と合流した最上川は、寒河江川とも合流し、蛇行しながら山形盆地北部の床面をなす。最上川の両岸には蛇行の結果の旧河道が残されている。第7図中央部の最上川西岸は、盆地西縁の断層がつくる丘陵帯が長岡山まで直線的に伸びている。この付近の最上川と寒河江川に挟まれた丘陵に、現在の寒河江市街地が展開している。その北側、寒河江川の北岸を中心に寒河江川扇状地がつくられている。規模としては馬見ヶ崎川扇状地とほぼ同程度であるが、傾斜が緩く、前縁部との境界は不明瞭である。この扇状地の端部に現在の河北町の市街地が広がっている。

図面上北東に広がる乱川扇状地は、乱川をはじめとした複数の河川の開析を受け、段丘化の進んだ広大な開析扇状地である。扇頂部と端部で150mの高度差をもつが、立谷川や馬見ヶ崎川の扇状地の倍近くの面積をもつため、傾斜は同程度のものである。段丘低位面に現在の東根市街地が展開している。

本遺跡を含む須川の自然堤防上の土壌は、細粒質普通褐色低地土（小原ほか2011）に属する。沖積低地の微高地に分布するもので、畑地や集落として利用されることが多い。その後ろに広がる後背湿地は細粒質普通低地水田土、細粒質斑鉄型グライ低地土などの土壌に分類されている。

本遺跡の大部分が所在する山形市は、山形県の東南部に位置する山形県の県都である。面積約382km²を測り、うち都市計画区域となるのは約160km²で、残りの行政区画は丘陵、山地帯である。遺跡の所在地となる大字中野目は、かつて東村山郡に属する中野目村として存立していたが、1889年に近隣の灰塚村、渋江村と合併し、明治村となった。さらに1954年には山形市と合併し、現在の姿になっている。

2 歴史的環境

川前2遺跡の展開する山形盆地には、旧石器時代から近世まで数多くの遺跡が存在していることが知られている。近隣遺跡の発掘調査報告書は、すでに多くが刊行されており、本遺跡の報告書だけでも3冊目となる。よって通時的な周辺遺跡の状況については、それらを参照していただきたい。ここでは今回の調査の中心をなす古墳時代前期の遺跡を中心に、遺跡の立地状況と、これまでの発掘調査成果について概観する。記述上、古墳時代前期を前葉・中葉・後葉の3つに分けている。大まかなものではあるが、植松氏による山形盆地編年に準拠し（植松2005）、それぞれ新潟シンポ7・8期、8・9期、9・10期に相当するものである。

A 山形盆地における遺跡の立地

山形盆地においては、特に山形市北部から天童市にかけての低地域に数多くの古墳時代の集落遺跡が知られている。そのなかでも山形市の嶋遺跡、天童市の西沼田遺跡は、大量の木製品の出土から国史跡に指定されている。全国で大規模開発が進み、発掘事例が爆発的に増える1970年代まで、山形盆地は北限の古墳文化の様相を示すものとして、古墳時代研究にとって重要な成果を挙げてきた地域である。

第7図には、本書の中心となる古墳時代前期の遺跡を、地形分類図上に赤丸で落としている。概観すると、河北町南部から天童市を北限とし、以北には発見されていないことから、この付近が現在のところの古墳時代前期の北限域と考えられる。現在までに発見、調査されてきた遺跡をみると、いくつかの集中地点が確認できる。第7図で北から、河北町南部の寒河江川扇状地端部の水田地帯に展開するもの（2、3）。天童市北部の乱川扇状地の南西前縁部、押切川と倉津川に挟まれた地域に展開するもの（5、6）。本遺跡を含む、天童市南部から山形市北部の立谷川と馬見ヶ崎川の下流域（9～20）。馬見ヶ崎川扇状地の端部（26、27）。山形市南部の須川中流の西岸域（28～32）などである。無論、未発見の遺跡も多数眠っているものと考えられ、注意が必要ではあるが、遺跡の多くは低地域に展開し、その中に入り組んだ自然堤防や扇状地の端部などの微高地を利用して集落を築い

ていることがうかがえる。

これらの遺跡の調査は、1950～1970年代には山形大学を中心として、1990～2000年代には東北中央道などの高速道路の整備に伴い調査成果が蓄積されてきた。

B 発掘調査された古墳時代前期の集落遺跡

2の下楨遺跡は、古くから西里遺跡の名で知られ、明治初期に耕作中に出土したという須恵器の甕や土師器などが注目されてきた。本格的な調査は1980年の圃場整備に伴うもので、竪穴建物9棟を検出している。土師器の年代は前期前葉と後葉のものがあり、ST5・7などでまとまった資料が得られている。注目すべき遺物として琴柱形石製品が2点竪穴建物覆土より出土している。

3の熊野台遺跡は、1978～1979年にかけての圃場整備に伴い調査された。古墳時代の竪穴建物は8棟検出しており、出土遺物から前期前葉と後葉のものがある。

4の高瀬山遺跡は、古くからその存在が知られ、いくつかの調査も行われてきた。1994～2001年にわたって東北横断道の建設に伴う大規模な調査が実施されると、旧石器から中世まで膨大な資料が得られることとなった。古墳時代の竪穴建物は、遺跡内の他の時期に比べると少ないが、前期のものが11棟検出している。土師器の年代は前期中葉と後葉に分けられ、4区ST15でまとまった資料が得られている。

5の板橋2遺跡は、1998～1999年にかけて東北中央道の建設に伴い調査された。古墳時代前～中期にかけての集落で、32棟の竪穴建物を検出している。古墳時代前期のものではST20・21などが出土遺物に恵まれ、前期後半の様相を示すものである。また、土坑から緑色凝灰岩製の石釧が出土しているのが特筆される。

6の蔵増押切遺跡は、1997～2000年にかけて東北中央道の建設に伴い調査された。古墳時代代ものは前期から後期にかけて通時代的に39棟の竪穴建物や河川跡が検出されている。

7の塚野目A遺跡は、3回の調査が行われており、暗渠工事に伴い土器片が採取されたのをきっかけに1972年に実施されたものと、1995年に西沼田遺跡の関連遺跡の調査としての確認調査、1998年の市道建設に伴うものである。特に初回の調査では、弥生末から古墳前期前葉の資料を得ている。

8の三軒屋物見台遺跡は、東北横断道の建設に伴い、1983～1984年にかけて調査された。古墳時代の竪穴建物は22棟検出し、河川跡からも大量の遺物が出土している。これらの出土遺物は、後期のものが大部分を占めるが、前期、中期のものも含まれる。

9の菖蒲江1遺跡は、2001～2002年にかけて現在の総合交通安全センターと県道の建設に伴い調査された。14棟の竪穴建物を検出し、うち6棟が焼失している。ST4や捨場とされるSX18で多くの資料が得られており、土師器の年代観は前期前葉のものである。

10の高揃南遺跡は、2001～2002年にかけて現在の総合交通安全センターの建設に伴い調査された。24棟の古墳時代前期に属する竪穴建物が検出しており、隣接する菖蒲江1遺跡と同様に、多数が焼失しているのが特徴的である。出土遺物では、一か所の遺構からまとまらないものの、管玉やその未成品、作成途上の剥片、研磨痕を残す砥石などが出土しており、集落内での玉生産がうかがえる。また、河川跡から木製品も多数得られており、鍬や鋤、竪杵などが出土している。土師器も全体的に遺物量が多く、前期前～後葉まで、各時期でまとまった出土遺物が得られており、かつ、包含層からは弥生後期の天王山式に後続する時期のものも得られているため、土器編年を追う上では重要な遺跡である。

11の一ノ坪遺跡は、1999年の県道建設と2000年の市道建設に伴う調査が行われている。古墳時代の遺構の検出は、2000年の調査に限られ、前期と後期の2時期のものがみられる。前期のものでは、竪穴建物3棟が検出し、中～後葉のものである。

12の渋江遺跡は、県道と東北中央道の建設に伴い1999～2001年まで4次に渡る調査が行われている。古墳時代代ものでは、前期から中期にかけて100棟を超える竪穴建物が検出されており村山盆地内での同時代の集落規模としては最大級のものとなる。中心となるのは中期であり、前期のものは客体的である。出土土師器からは前期前葉のものと同後葉のものがみられる。

13の七浦遺跡は、耕地整理に伴い遺物が発見されたため、1961年に発掘調査された。3点の石包丁とともに、当時としては、まとまった弥生時代中期後葉の資料を得ることができたため、標式資料とされ「七浦式」が与えられた。ここからは古墳時代前期前葉の器台なども

得られており、古墳時代の遺跡としても展開していることが予想される。

14の漆山長表遺跡は、1997年の県道建設に伴い調査された。遺構の多くは古代を中心とするものの、古墳時代前期の竪穴建物も1棟検出している。遺物は多くはないが、前期後葉のものであろう。

15の中野遺跡は、1970年代以前の暗渠工事の際に発見されたものが知られており、後に述べる宮町遺跡などとともに前期の資料として各種集成資料に掲載されてきた。出土品のみであり、基本的な組成を欠くが、前期後葉のものである。

16の馬洗場B遺跡は、東北中央道の建設に伴い1999年に調査された。19棟の竪穴建物と河川跡から古墳時代前期の遺物が大量に得られている。注目すべき遺物として、破鏡とみられる内行花文鏡片や四方転びの箱といった祭祀遺物が特筆される。遺物量の割に時期は限定的であり、前期中～後葉に収まるものが多い。

17の藤治屋敷遺跡、18の服部遺跡は、北側に近接する馬洗場B遺跡と同様に東北中央道の建設に伴い1999年に調査された。古墳時代の遺構としては、河川跡のみであり、居住空間は別にあったことがうかがえる。この河川跡からは大量の古墳時代前期中～後葉の遺物が出土しており、北側に向かって流れているため、居住空間は馬洗場B遺跡とは反対の南側に求められよう。とはいえこの両遺跡の遺物には類似点が多い。時期的に共通するだけでなく、四方転びの箱なども出土している。また、遺存状況の良い木製品が多く、農具や容器、祭祀具など320点を得ている。

19の長表遺跡は、県道の建設に伴い2000年に調査された。古墳時代前期の竪穴建物41棟に加え、倉庫や豪族居館、祭祀施設などが想定される棟持柱建物跡が2棟検出したことが注目される。検出した建物数に比して遺物量は少ないため遺構ごとの時期判断は困難なものが多いものの、前葉から後葉までの時間幅がみられる。

20の今塚遺跡は、宅地造成に伴い1993年に調査された。古墳時代前期の中～後葉にかけての竪穴建物30棟を検出し、遺構ごとの遺物の出土量も多いことから編年基準として用いられる事が多い。

21の梅野木前1遺跡は、2003～2004年に県道の建設、2005年の市道の建設、2006年の店舗の建設に

伴い調査されてきた。古墳時代のものは2003～2004年の調査に限られ、前期の竪穴建物16棟が検出されている。うち4棟には竪穴の外側に周溝を伴うことが注目される。また、同時期の水田跡も検出しており、長軸70mにわたって大小複数の区画が多数の足跡とともに観察できる。遺構に帰属する土師器は多くはないものの、遺跡全体で前期中葉に属するものである。

22の志戸田縄遺跡は、1999～2000年の東北中央道の建設に伴い調査された。古墳時代の竪穴建物は検出していないが、河川跡から前期後葉の土器群が得られている。

23の大塚遺跡は、1960年に山形大学によって調査され、下層から古墳時代前期の資料を得ている。この調査報告者である赤塚氏によって、以前から知られていた県内の同時期の資料群を総称し「大塚式」と呼称することが提示された。その後、次に述べる宮町遺跡の資料がよりよく同時期の組成を示すものとして「宮町式」に変わっていったという経緯がある。

24の松葉ノ木遺跡ならびに、25の川原田遺跡は、かつて「宮町遺跡」や「宮町土師遺跡」と呼称され、その出土遺物は当地での古墳時代前期の標式資料として「宮町式」が与えられた。これらの資料は『土師式土器集成』に掲載されるなど、1960年代後半から70年代の東北の同時期研究において重要な位置を占めていた。しかし、宮町式の資料は1965年前後の農地改良に伴う工事で取り上げられたものであり、遺構の帰属が不明であった。時代が下り隣県での同時期の資料が増加するにつれ、細分が求められるようになると、宮町式の資料は次第に用いられなくなっていった。遺跡そのものも未調査のまま市街地化が進んでしまい、その多くが失われてしまっていると思われる。

26の双葉町遺跡は、山形駅西口の再開発に伴う大規模な調査で、1997～2000年にかけて実施された。古墳時代のものは多くはないが、前期のものと後期のものがあり、それぞれ検出する地区が異なる。遺物を含む遺構が少ないため、すべての帰属時期の判断は困難だが、複数の古墳時代前期の竪穴建物がみられ、前～中葉にあたるものである。

27の山形西高敷地内遺跡は、その名の通り高校の施設建設や隣接する市道整備に伴い、複数回の調査が実施

されている。縄文時代と古代を中心とするが、古墳時代前期の竪穴建物も合計で8棟検出している。出土遺物は多くはないが、中～後葉に相当するものであろう。

28の萩原遺跡は、東北中央道の建設に伴い1998～1999年に調査された。古墳時代前期の竪穴建物8棟を検出し、前～中葉に収まる時期のものである。

29の谷柏J遺跡は、東北中央道の建設に伴い1998～1999年に調査された。主体となるのは古代以降のものだが、古墳時代前期の後葉にあたる遺物も出土しており、調査区外に集落の展開を予期させる。

30の沢田遺跡は、1973年のブドウ畑の造成に伴い調査され、2棟の古墳時代の竪穴建物を検出している。出土遺物は多くはない。

31の谷柏遺跡は、その西側に多数の群集墳の存在が知られており、山形大学を中心に1950年代に断続的に調査がなされていた。県内の研究史的には「谷柏式」として古墳時代中期の標式資料とされた遺跡である。古い時代の調査のため、遺構の検出や出土状況の前後関係に不明瞭な点が多いが、資料には前期のものも含まれている。また、湧水を引くための用水施設と考えられる板敷きの排水溝遺構が前期の土器とともに検出している。

32の山形元屋敷遺跡は、河川整備に伴い2001年に調査された。古墳時代の竪穴建物4棟を検出し、うち1棟は前期中葉のものである。また、多くの遺物が含まれる河川跡も検出しており、その下層からは古墳時代前期から中期のものも出土している。

墳墓

かつて山形県内において前期古墳は存在せず、中期からその造営が始まると考えられてきた。しかし、1978年の南陽市稲荷森古墳の調査により東北最大級の前方後円墳が確認されるなど、1970年代後半～90年代において、山形県南部の置賜地方を中心に多数の前期古墳が発見されている（山形県遺跡地図外）。一方、山形盆地においては、1996年に山辺町の大塚天神古墳で初めて前期古墳が確認されたが、いまだその数は多くはない。

33の高瀬山古墳は、中・後期の古墳群として古くから知られ、県史跡にも指定されている。東北横断道の建設に伴う調査が1994～2001年に行われると、古墳時代前期の円墳の存在も明らかになった。また、同時代の方形周溝墓群も複数基検出している。

34の大塚天神古墳は、1996年の公園の造成に伴い調査され、日本海側では希少な埴輪を伴う円墳であることが確認された。その後2000～2002年にかけて追加調査が行われており、出土する埴輪から前期後葉と考えられている。

35の要害古墳は、13基からなる古墳群で、1号墳の調査が2000～2002年にわたって調査された。結果、葺石を施す方墳であることが判明した。出土遺物は多くはないが、前期中葉のものと考えられる。大塚天神古墳のように埴輪の出土はみられなかった。現在発見されている山形盆地内の古墳では最も古式の事例となる。

前後の段階の遺跡

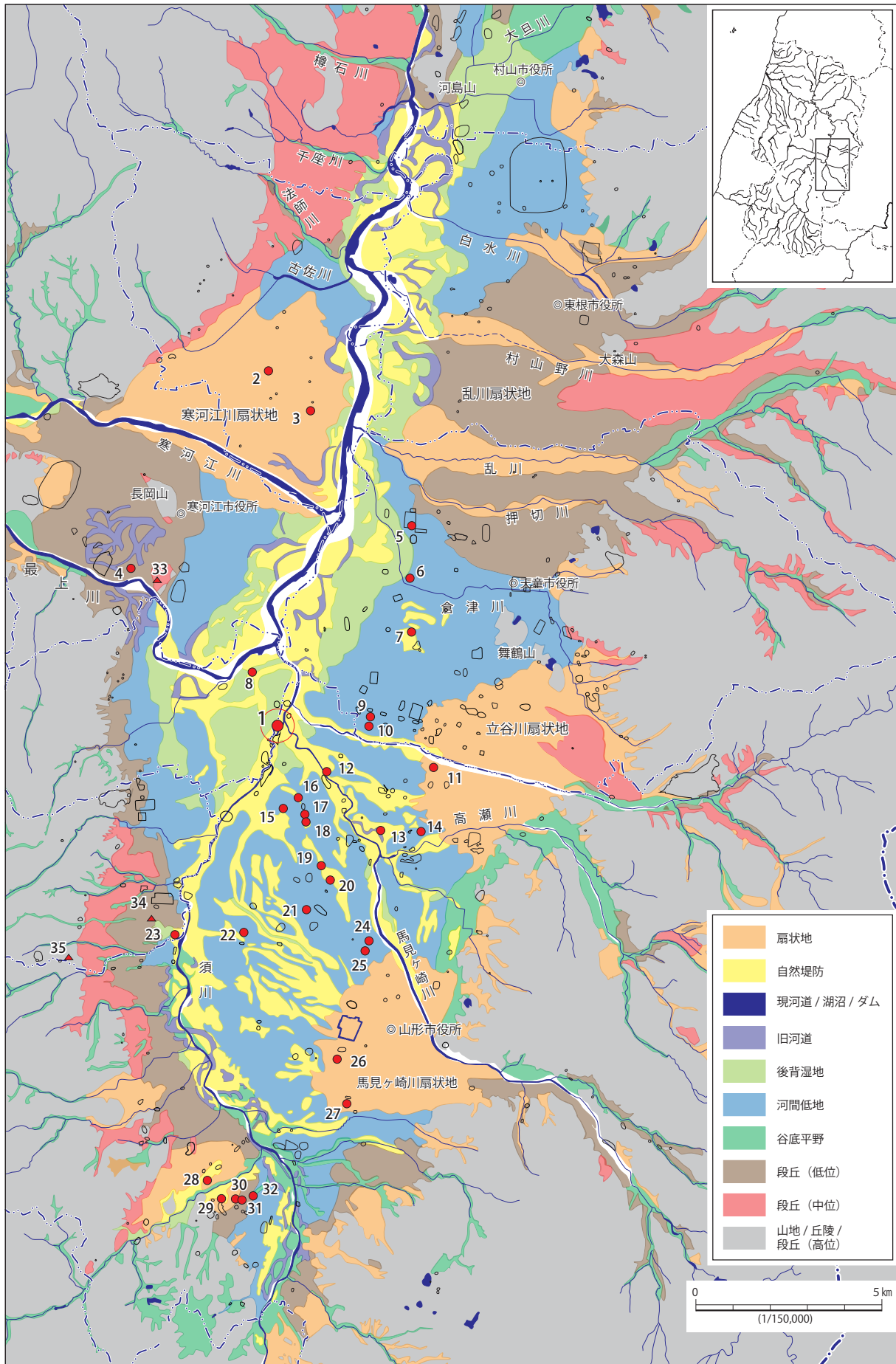
第8図は、川前2遺跡を中心に、周辺の遺跡範囲を5万分の1の縮尺で落としたものである。発掘調査された遺跡は太線でくくり、番号を付している。この番号は第7図と共通し、表1に載せている。これらの中から、本遺跡の中心となる古墳時代前期に先行する弥生時代の遺跡と、後続する古墳時代中期の遺跡の立地を概観する。

弥生時代の遺跡は、県内全域でみてもその数は少ないが、中期後半段階から後期において資料数が増している。中期後半のものは七浦遺跡（13）、江俣遺跡（68）などで古くから資料の存在が知られており、境田D遺跡（58）や河原田遺跡（62）などでも同段階の資料が確認されている。後期のものでは高掬南遺跡（10）や石田遺跡（40）、向河原遺跡（50）などで資料が得られている。

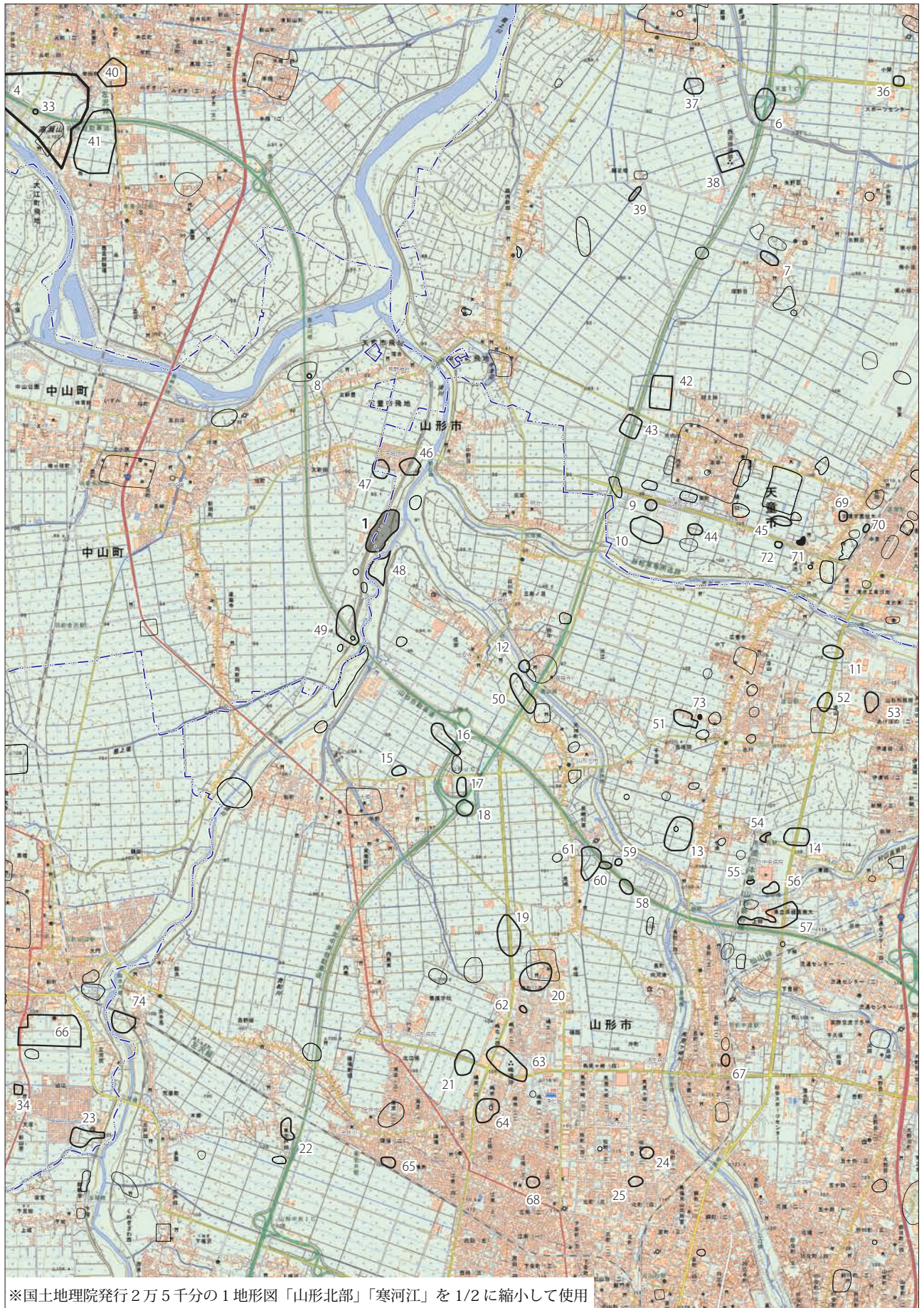
一方、本遺跡に後続する古墳時代中期の遺跡では、中期前葉の遺跡が極めて少なく、中期の中～後葉にかけてその数を増す。

地形的にみれば、弥生時代中期後半から古墳時代中期まで、遺跡の立地は変わらない。低地に進出し、その中の微高地に集落を築いていることがうかがえる。遺跡単位では複数の時期をまたいで存続しているものもあれば、短期的なものもある。

低地での調査は、遺構の検出がわかりづらい場合が多く、現代の開発事業に対して遺跡の発見が困難であることが少なくない。すでに圃場整備がなされた状況では、旧地形も失われてしまっているため、現在の地表面からその下に眠る遺跡の存在をうかがうことは不可能に近い。こまめな試掘調査が行われることによってのみ、山形盆地の歴史が解明していくことだろう。



第7図 山形盆地の地形分類と古墳時代前期の遺跡分布



第8図 川前2遺跡周辺の遺跡分布図

II 遺跡の位置と環境

表1 山形盆地における古墳時代～古代の遺跡

番号	遺跡名	時期	文献
1	川前2遺跡	古墳前期、古代	セ193・204集
2	下楯遺跡	古墳前・中期	県39集
3	熊野台遺跡	古墳前期、古代	県31集
4	高瀬山遺跡	古墳前期、古代	80・94・121・145・167・200集、寒河江市32集
5	板橋2遺跡	古墳前・中期、古代	セ125集
6	蔵増押切遺跡	古墳前・中期、古代	セ112集
7	塚野目A遺跡	弥生後期、古墳前期、古代	天童市22集、さあべい3-1
8	三軒屋物見台遺跡	古墳前・中・後期、古代	県106・107集
9	菖蒲江1遺跡	古墳前期	セ105・132集
10	高橋南遺跡	弥生後期、古墳前・中期	セ132集
11	一ノ坪遺跡	古墳前・後期、古代	セ78集、山形市12集
12	渡江遺跡	弥生後期、古墳前・中期、古代	セ106・124集
13	七浦遺跡	弥生中期、古墳前期	東北考古学3、別巻
14	漆山長表遺跡	古墳前期、古代	セ58集
15	中野遺跡	古墳前期	別巻
16	馬洗場B遺跡	古墳前期、古代	セ123集
17	藤治屋敷遺跡	古墳前期、古代	セ119集
18	服部遺跡	古墳前期、古代	セ119集
19	長表遺跡	古墳前期	セ87集
20	今塚遺跡	古墳前期、古代	セ7集
21	梅野木前1遺跡	古墳前期、古代	セ160集、山形市26・28集
22	志戸田縄遺跡	古墳前期、古代	セ92集
23	大塚遺跡	古墳前期、古代	山大史学1
24	桧葉ノ木遺跡	古墳前期	別巻
25	川原田遺跡	古墳前期	別巻
26	双葉町遺跡	古墳前・後期、古代	山形市24集
27	山形西高敷地内遺跡	弥生中期、古墳前期	県17・91・173・192集、セ117・143集、山形市18集
28	萩原遺跡	古墳前期、古代	セ120集
29	谷柏J遺跡	古墳前期、古代	セ95集
30	沢田遺跡	古墳前期、古代	郷土考古2
31	谷柏遺跡	古墳前・中期、古代	山形考古2・6、別巻
32	山形元屋敷遺跡	古墳前・中期、古代	セ109集
33	高瀬山古墳	古墳前・中・後期	(4と同じ)
34	大塚天神古墳	古墳前期	山辺町6・7・10・12集
35	要害古墳	古墳前期	山辺町11集

番号	遺跡名	時期	文献
36	クダノ遺跡	古代	セ189集
37	蔵増宮田遺跡	古墳中・後期	セ209集
38	西沼田遺跡	古墳中・後期	県101集、天童市10・12・20・21・23・24・26-32・41集
39	願正壇遺跡	古墳後期、古代	県81集、天童市12集
40	石田遺跡	弥生後期、古代	西村山地域史の研究1
41	三条遺跡	古代	セ93集
42	中袋遺跡	古代	セ97集
43	砂子田遺跡	古代	セ113集
44	桜江遺跡	弥生後期	セ88集
45	高橋東遺跡	古代	天童市39集
46	中野目II遺跡	古墳中期、古代	山形市9集
47	中野目I遺跡	古墳後期、古代	山形市9集
48	上敷免遺跡	古代	セ159集
49	達磨寺遺跡	古代	県104集、セ127集
50	向河原遺跡	弥生後期、古墳中期、古代	セ107・111・141集
51	井森塚遺跡	古墳中期	山形市36集
52	梅ノ木遺跡	古墳中期、古代	セ78集
53	南志田遺跡	古墳、古代	山形市23集
54	大明神遺跡	古代	セ118集
55	北柳2遺跡	古代	セ48集
56	北柳1遺跡	弥生前中期、古墳中期	セ48集
57	下柳A遺跡	古墳中期	セ38集
58	境田D遺跡	弥生中期	県105集
59	境田B遺跡	古代	県111集
60	境田C'遺跡	弥生中期、古代	県76集
61	境田C遺跡	古代	県62・105集
62	河原田遺跡	弥生中期、古代	山形市22集
63	嶋遺跡	古墳中・後期、古代	別巻、山形市29・34・35集
64	梅野木前2遺跡	古墳中・後期	山形市22集
65	馬上台遺跡	古代	山形市1995
66	山辺南条里遺跡	古代	県22集
67	長町遺跡	弥生中期、古墳中期	別巻
68	江俣遺跡	弥生中期	別巻
69	下遠矢塚古墳	古墳後期	山形県の古墳
70	上遠矢塚古墳	古墳後期	山形県の古墳、天童市1978
71	火矢塚1号古墳	古墳後期	山形県の古墳
72	火矢塚2号古墳	古墳後期	山形県の古墳
73	衛守塚2号墳	古墳中期	考古学雑誌14-13、山形県の古墳、MUSEUM616
74	去手呂古墳群	古墳後期	山形県の古墳

文献において、「県」は山形県教育委員会、「セ」は山形県埋蔵文化財センター刊行の報告書の巻数を示す。市町村教育委員会刊行の報告書は、市町村名+巻数で示す。通算巻数の付されていないものは、刊行年を記している。「別巻」は山形市史別巻1嶋遺跡を示す。雑誌等に掲載されたものは、雑誌名と巻号を記した。

引用文献

阿部島功 2004 「山形市服部・藤治屋敷遺跡の立地している地形」『服部・藤治屋敷遺跡』財団法人山形県埋蔵文化財センター
 植松暁彦 2005 「山形県の弥生時代後期～古墳時代前期の様相」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
 小原 洋・大倉利明・高田裕介・神山和則・前島勇治・浜崎忠雄 2011 「包括的土壌分類 第1次試案」『農業環境技術研究所報告』29
 松岡功・阿久津純・真鍋健一・竹内貞子 1984 「山形盆地の第四系一特に地質年代と堆積環境について」『地質学雑誌』90-8

Ⅲ 検出した遺構

1 遺構の概要

川前2遺跡第5次調査は、上・下層合計2000㎡を調査し、全体では平地式建物1棟、竪穴建物8棟、土坑6基、溝状遺構1条、ピット26基を検出している。遺構は調査区南部から中央部にかけて多く分布するものの、北部にかけては少なくなり、北端部にはほとんどみられなくなる。

主な時代は古墳時代前期のものとして古代（奈良・平安時代）のものであり、古墳時代前期のものは、平地式建物1棟（SB3）、竪穴建物5棟（ST6・7・10・11・17）、土坑4基（SK36・37・45・47）、溝状遺構1条（SD9）、ピット3基（SP32・33・42）であり、古代のものは竪穴建物3棟（ST4・5・12）、ピット1基（SP27）である。残りは帰属時期不明のものである。

本報告では検索の便宜上、遺構の帰属時期に関わらず、種別ごとに遺構番号順に掲載して行く。ただし、図面の掲載は版組の都合上、若干の前後が生じている。遺構種別は平地式建物、竪穴建物、土坑、溝状遺構、ピットの順で掲載している。本章では遺構の位置や規模、調査経緯や性格についてまとめた。遺物に関しては個別の記述を次章で行い、ここでは出土位置や帰属時期の判断について記している。

2 検出した遺構

SB3 建物

位置：調査区南側の3675～3876グリッドに展開する。二重の溝が方形にめぐる遺構である。調査段階ではSD1溝、SD2溝と別々の遺構名が付されていたが、セットで機能するものと考え、遺構全体をSB3建物とし、それに帰属する内側の溝をSB3ED1溝、外側をSB3ED2溝とする。SB3ED1溝の内側の区画はベルトを残し断ち割って調査しているが、掘り込みは検出できていない。よって遺構検出面より上に建物の痕跡があったと考え、二重の周溝で囲まれた平地式の建物跡と判断した。

SB3ED1・2溝が調査区西側に延長するため、調査区を1mほど拡張しているが、全体の検出には至らなかった。

周辺には南側に1.5m先にSK45土坑が、北側1m先にSK37土坑がある。両者とも古墳時代前期のものと考えられるが、本遺構と同時期に存在していたかまでは判然としない。

規模：SB3ED1溝の西側が検出しきっていないが、検出部分と同等のものと想定できる。長軸は北東-南西方向にあり、N-22°-Eを測る。SB3ED1溝で区画される内側は、中央部で長軸方向5.47m、それに直交する方向は5.23mを測る。溝幅は28～83cmで、東側が幅狭かつ不整形となる。溝幅を含めた上端の外寸で、長軸方向6.79m、直交方向は残存部で6.09mとなる。溝の掘り込みは深く40cm程度あり、底面の標高は91.4m前後を測る。覆土は暗褐色シルト層を基調とし、全体で8層に分けられる。

SB3ED2溝は北東角部のみを検出で、北西側は調査区外に延長する。南東部辺は平行する内側のSB3ED1に対して3/4程度で立ち上がってしまい、南辺は検出せず「コ」字形を呈する。SB3ED1溝との間隔は、北辺で95cm、東辺で1.72mほど離れている。SB3ED1溝とは若干軸が異なり、N-27°-Eを測る。とはいえ、同一の遺構と判断することを妨げるほどのずれではない。SB3ED1溝に区画された内側の中心点からの距離は、北側で4.91m、東側で5.09mを測る。西側調査区外へ対称的に展開するならば、東西方向の外側幅で10.08mとなることが予想される。溝幅は22～51cmで、SB3ED1溝のものより細身である。確認面からの平均的な深さは30cmほどであるが、底面の標高は91.36～91.6mを測り、地点ごとのばらつきが大きい。覆土は暗褐色シルト層を基調とし、全体で7層に分けられている。

形状：調査区外へ延長する部分があるものの、全体形は方形を呈する内側のSB3ED1溝による区画が途切れずに圍繞し、その外側南辺を残してSB3ED2溝による区画がめぐると推測される。SB3ED1溝による

区画の内側の遺構確認面に、被熱痕跡が確認できるとの調査所見が残されていたり、遺物の出土が見られたりしているが、いずれも深く入り込むものではなく、掘り込みは確認できない。盛土がなされていた、あるいはほとんど掘り込みをもたなかったなど、確認面より上に遺構の底面があり、失われてしまったものとする。

附属施設として捉えられる SB3ED1・2 溝の溝幅は、最大部でも 1 m に満たないものであるが、掘り込みは深く、急角度で立ち上がりバケツ形を呈する。ほか SB3ED1 溝の内側に重複してこれを切る SB3EK3 土坑がみられる。ただし、出土遺物の内容から、時期的に大きくは変わらないと思われる。

性格：このような平面形を呈する遺構として、方形周溝墓としての判断が下されがちである。しかし、1990 年代後半以降の関東地方を研究の進展からすれば、今回のような検出状況は、否定的に捉えられよう。これは北陸地方で特徴的に見られる、いわゆる「周溝をもつ建物」の一形態、岡本淳一郎氏の分類で「狭溝式平地建物」に属するものとする（岡本 2006）。溝区画の内側に竪穴も柱穴も確認できないため、建物跡と考える根拠に乏しいが、これについては 6 章で検討を加え、建物と判断した根拠を示している。

二重の周溝について考えると、外側の SB3ED2 溝は南側が空けられている。この方向は須川の上流側にあたることから、洪水時の水よけという機能ではなかったと想定される。建物の出入り口は南側に求められよう。内側の周溝 SB3ED1 溝は、建物の周溝、あるいはそれと竪穴の掘り込みまでつながったものの可能性も考えられる。周溝南辺に重複する SB3EK3 土坑は出入り口施設のピットと考えられ、その周辺から第 18 図 5 の高環が出土していることを考えると、出入り口付近に貯蔵穴などの存在が想定される。今回の検出状況は、検出段階で既に貯蔵穴の底面に近く、結果として周溝や掘り込みにつながったものと考えたい。

遺物：器台、高環、壺、ミニチュア、砥石などが出土している。個別の詳細は次章で述べる。SB3ED1 溝で区画された内側中央の遺構検出面から第 18 図 9 の二重口縁壺が出土している。周溝の覆土からは、内側の SB3ED1 溝から第 18 図 5 の、いわゆる東海系の高環が、外側の SB3ED2 溝からは第 18 図 1 の装飾器台が出土している。

全体の出土量に対して、復元率の高い遺物が多い。

時期：高環や装飾器台の形状から古墳時代前期前葉に比定される。装飾器台の新潟方面との類似性などから新潟シンボ 7 期に比定される。放射性炭素年代測定を 9 点の試料で行っており、多くのものは 2 世紀前半から 4 世紀後半までの範囲が与えられている。

ST4 竪穴建物

位置：調査区中央部の 4480 ～ 4581 グリッドに展開する竪穴建物である。西側が調査区外に延長するため、調査区の一部を拡張しているが、さらに西側へ延長するため全体を検出するには至っていない。プランが判然とせず、遺構としての判断が困難なものの、調査時の所見を優先し竪穴建物とする。

規模：北側のプランは判然としないが、長軸は北東 - 南西方向にあるものと考え、N-27° - E を測る。長軸方向は 4.07m、それに直交する方向は未検出のため、検出分で 2.52m を測る。掘り込みは非常に浅く、もっとも深い南側であっても 4cm しかない。北側は立ち上がりが見えず、そのまま床面とつながってしまう。床面の標高は 92.32m ほどを測る。確認面で認識していた覆土は黒褐色シルト層で焼土粒や炭化粒をわずかに含むものである。

形状：調査区外への延長することや、北側の立ち上がりが不明瞭なこともあるが、全体形は 1 辺 4 m 程度の方形を呈することが予測される。残存する掘り込みは浅く、立ち上がりは不明瞭である。

附属施設はピットが 2 基 (EP1、EP2) みられるのみで、カマドなどは検出していない。中央部には帯状に炭化材や焼土の集中が見られ、2 × 10cm ほどの炭化材が多くみられた。ただし、炉跡はみられない。北東側の角はコンクリート片を含む現代の掘り込みによって切られているほか重複はない。

遺物：古墳時代と古代のものが混在している。遺構の帰属は古代と考えられるが、古墳時代のものもまとまった資料が得られているので、ここに掲載しておく。

また、調査区拡張時に遺構範囲外からもいくつかの遺物の出土がみられた。とはいえ本遺構はそもそものプランが判然としない。よって、すべてを遺構外とするのではなく、出土位置を記録しているもので遺構範囲に隣接

するものは、本遺構のものとして掲載している。範囲外
のものは遺物観察表にその旨を記載している。

主要な遺物は、須恵器坏が多く、底部回転糸切りと回
転ヘラ切りのものの両者がみられる。底部に「鬼」の墨
書を残すものがある。古墳時代の中実の高坏脚部
や赤彩の施された中型壺などである。

時期：遺構の帰属時期としては、古代の出土遺物から 9
世紀前半のものと考えられる。中央部に残された炭化材
から放射性炭素年代を測定したところ、8 世紀後半から
9 世紀後半を示していることもそれを裏付けよう。古墳
時代前期の遺物は混入と考える。

ST5 竪穴建物

位置：調査区中央部の 4782 グリッドに展開する。東側
わずか 10cm には ST6・7 竪穴建物が近接するものの、
これらとは軸が異なる。

規模：長軸は北東-南西方向で、N-12° -E を測る。長
軸方向で 3.86m、それに直交する方向は 3.64m を測
る。確認面からの掘り込みは、もっとも深くなる南側で
40cm ほど、浅くなる東側では 18cm 程度を測る。床面
の標高は大きくは変わらず、竪穴の中央で 92.32m ほど
を測る。覆土は黒褐色シルトを基調とし、6 層に分けら
れる。

形状：今回の調査では数少ない全形が明瞭な竪穴建物で
ある。平面形は 4 m 弱の方形で、安定的な床面から逆
台形に立ち上がる。

附属施設はピットのみで、燃焼施設は検出されていな
い。ピットは 7 基検出しているが、いずれも浅く床面か
ら 10cm 程度のものである。これらは柱穴になるもの
も含まれようが、検出は北側に偏るため、建物の柱の配
置としては不定形である。

遺物：甕類のみの出土で、全体数は少ない。

時期：カマドなどの附属施設は検出していないが、出土
遺物からは 9 世紀代が与えられる。一部古墳時代のもの
も混在している。

ST6・7 竪穴建物

位置：調査区中央部の 4782～4883 グリッドに 2 棟が
重複して展開する竪穴建物である。ST6 竪穴建物が南東、
ST7 竪穴建物は北西側に位置する。ST7 竪穴建物は調査

区を西側へ拡張した際に検出されたが、平面形は捉えら
れていない。遺構としての判断が困難なものの、調査所
見を優先し、竪穴建物とする。周辺には西側に近接して
ST5 竪穴建物が、SK47 土坑が東へ 2 m ほどの距離で検
出している。

規模：ST6 竪穴建物の長軸は北東-南西方向で、N-54°
-E を測る。長軸方向は 3.12m、それに直交する方向は
2.89m を測る。掘り込みは西側で 54cm の立ち上がり
が確認できているが、東側に進むにつれ失われ、確認で
きなくなってしまう。床面の標高は 92.27m ほどを測る。
覆土は 1～6 層まで分けられ、黒褐色ないし暗褐色の
シルト層を基調とする。

ST7 竪穴建物は断面からその存在が確認できるのみ
で、平面的な範囲は把握できていない。床面は ST6 竪
穴建物より 20cm ほど高く、標高 92.48m を測る。覆
土は 7～10 層の 4 層に分けられ、暗褐色とにぶい黄褐
色が混在したシルト層を基調としている。

形状：ST6 竪穴建物の平面形は東側で不明確になっ
てしまうが、3 m 四方の方形を呈するものと考えられる。
壁面が残存する部分では、安定的な床面から逆台形に立
ち上がる。

附属施設は ST6 竪穴建物の中央や北東隅に 4 基のピ
ットが確認できる。いずれも小型で床面からの深さ 3
～13cm 程度のものである。柱穴としての機能も考え
られるが、配置は不定形で浅い。また、カマドなどの燃
焼施設は検出していない。

重複関係は覆土断面の観察から、ST7 竪穴建物→ST6
竪穴建物の順に建てられている事がわかる。

遺物：ST6 竪穴建物からの出土は甕類の胴部片のみで掲
載し得るものはない。ST7 竪穴建物とされている出土遺
物の多くは拡張した調査区の上層からのものが多い。た
だし、床面からほぼ完形の底部丸底の土師器甕が得られ
ている。

時期：出土遺物が甕類ばかりであり、点数も少ないこ
とから細分は困難であるものの、ST7 竪穴建物は古墳時代
前期中葉のものとする。それを切る ST6 竪穴建物も
古墳時代前期の範疇で収まると考えられる。

ST10 竪穴建物

位置：調査区中央部の 5586 グリッドに展開する。調査

区内には東辺部のみ検出し、多くは西側調査区外に延長するものと考えられる。検出した部分から推測される規模は竪穴建物とするには小さすぎるように思えるが、調査所見を優先し、竪穴建物として報告する。

規模：検出分の長軸は北東-南西方向で、N-27°-Eを測る。その長軸方向は2m、直交する方向は0.54m分を検出したのみである。床面の標高は北側で92.26m、南側で92.33mを測る。

形状：調査区外に延長する部分を含めて全形は、1辺2m程度の方形になることが推測される。床面は安定せず不整形で、短く立ち上がる。

附属施設は何も検出されていない。

遺物：覆土から土師器甕類の破片が数点出土する程度である。棒状浮文をもつ壺の口縁片が含まれる。

時期：出土遺物から、古墳時代前期のものと考えられる。

ST11 竪穴建物

位置：調査区北側の5286グリッドに展開する。プランが方形に見えたため、ベルトを設定して掘り下げているが、浅く判然としない。遺構としての判断は困難であるが、調査時の所見を優先し、竪穴建物とする。周辺には北8m先にST10竪穴建物があり、ほか北東2m先にSK44土坑が、西へ1m先にはSD9溝状遺構が検出している。

規模：長軸方向は北西-南東方向で、N-21°-Wを測る。長軸は3.86mで、それに直交する短軸は3.64mを測る。掘り込みはほとんど残存しないが、炭化粒を含む黄褐色シルトを基調とする覆土である。

形状：1辺4m弱の方形を呈するものと推定される。

附属施設は何も検出されていない。

遺物：覆土から甕類の破片が数点得られたのみ。

時期：出土遺物が少なすぎるため細別はできないが、古墳時代前期のものであろう。

ST12 竪穴建物

位置：調査区北部の6391グリッドを中心に展開する竪穴建物である。調査区外西側に延長するため、調査区を1mほど拡張するも検出しきれっていない。周辺にほかの遺構はほとんどみられず単独で存在する。SK49土坑が北へ10m先に検出している

規模：長軸は北東-南西方向で、N-14°-Eを測る。長軸方向は4.34mで、それに直交する短軸は検出分で3.79mを測る。床面での検出で、掘り込みはほとんど残存しない。褐色砂質シルトに焼土ブロックや炭化粒の混入する貼床層が数cmほど検出されるのみである。

形状：1辺4m強の方形を呈するものと推測されるが、床面での検出によるものか、平面形は不整形で、対辺はきれいに平行しない。

附属施設は炉とピットがみられる。ピットは大小様々14基(EP1～14)検出されている。これらは南東側に検出が偏り、すべてを柱穴とするには配置が不定形である。中でも炉の周囲に広がるEP4～7ピットは、ほかのものよりも大きい。これらのピットの覆土には多くの焼土や炭化粒が含まれていることから、炉とセットで機能したことが予想される。

中央やや南寄りに検出する燃焼施設(EL15)は、径48cmの円形の地床炉で、この周辺にも焼土や炭化粒が広がっていた。床面から12cmほどの掘り込みをもち、覆土は固く焼けしまっていることから、覆土11層の上面が炉底面であり、掘り込みは防湿などの目的で貼られたものと解釈できる。

遺物：比較的遺物量は多く、古代の須恵器や土師器が出土している。ほか石製品の紡錘車が出土している。遺構に帰属しない時期のものとして、弥生土器片も含まれる。

時期：調査当初段階では、竪穴中央部の燃焼施設の存在から、地床炉をもつ古墳時代の竪穴と判断されていた。しかし、調査を進めると貼床下から須恵器片が出土するため、古代のものとして判断されている。出土する環類の形状から9世紀前半のものと考えられる。炭素年代の測定値もそれと整合的である。

ST17 竪穴建物

位置：調査区南端部の3171～3272グリッドを中心に展開する。土色変化からベルトを設定し掘り進めるも、立ち上がりは検出されていない。遺構の判断は困難であるが、調査時の所見を優先し、竪穴建物として報告する。周辺にほかの遺構は検出していない。

規模：すべて判然としないが長軸は北東-南西方向になるだろうか。N-°38-Eを測る。長軸方向は9m弱程度のものが想定されている。深さは10数cmほどで、覆

土は明黄褐色と暗褐色の粘土質シルトが、ほぼ全面水平に堆積している。

形状：1辺9m四方の不整形な方形が想定される。

附属施設は北東側に偏って焼土の集中するEL1が検出しており、調査所見では地床炉と考えられている。

遺物：EL1 炉の周囲から、口縁部から胴部下半まで復元できる土師器甕が出土している。

時期：出土遺物が少なく、細別は困難だが古墳時代前期のものと考えられる。

土 坑

SK36 土坑

調査区南側の3575グリッドに所在する。北側4m先にSB3建物、北西側4mにSK45土坑がある。平面は楕円形で、断面形は上部が階段状に立ち上がる。長軸は北東-南西方向でN-40°-Eを測る。長軸方向は2.22m、短軸で1.36m、深さは40cmほどを測る。覆土は9層に分かれ、暗褐色層と黄褐色層が互層状に堆積する。

遺物は底面から器台が出土し、中型壺などの出土もみられることから、古墳時代前期と考えられる。

SK37 土坑

調査区南側の3876～3976グリッドに所在する。南へ1m先にSB3建物跡がある。掘り過ぎにより不明瞭だが、復元される平面は楕円形で、断面は逆台形に立ち上がる。長軸は北東-南西方向でN-36°-Eを測る。長軸方向は1.18m、短軸で0.82m、深さは45cmほどを測る。覆土は6層に分かれ、暗褐色シルト層を基調とし、明色土や炭化粒の含み方で分層される。掲載し得る出土遺物はない。土師器甕の胴部片のみのため時期判断は難しいが、古墳時代前期のものと思われる。

SK44 土坑

調査区中央部の5387グリッドに所在する。南西2mにST11 竪穴建物がある。平面は四隅が伸びる不定形な形状で、断面形は中央が掘り窪んでいる。長軸は北東-南西方向でN-22°-Eを測る。長軸1.35m、短軸1.15m、最深部の深さは30cmを測る。覆土は1層で暗褐色のシルト層である。中央部には炭化材の出土がみられた。出土遺物は礫の一端に強い擦痕をもつ砥石と、甕類の胴部小片のみのため、時期判断は困難である。

SK45 土坑

調査区南部の3674～3675グリッドに所在する。北側1.5m先にSB3建物跡があり、南東側4m先にSK36土坑がある。西側は調査区外へ延長するものの、全体の平面は隅丸長方形を呈することが予想される。長軸は、ほかの多くの遺構と異なり西へ傾き、N-55°-W方向を示す。長軸は検出分で1.87m、短軸は1.73mを測る。断面は北東部が緩やかに立ち上がるのに対して、南部は急傾斜である。深さは53cmを測り、覆土は暗褐色シルトを基調として9層に分けられる。底面は南東方向で深くなるものの、全体的に平坦である。

遺物は上～中層に集中して、器台や高坏、鉢や甕類などが出土しており、甕は復元率の高い個体が得られている。これらは古墳時代前期でも古手の様相を示すが、他器種においては欠損品が多く、細分は困難である。

SK47 土坑

調査区中央部の4883～4884グリッドに所在する。2m南にはST6 竪穴建物がある。平面形は不整楕円形で、長軸はN-58°-Eに傾き、長軸で2m、短軸で1.38mを測る。断面は逆台形で、深さは18cmを測る。中央部に焼土や炭化物を含む土層の堆積がみられた。遺物は甕類の胴部片のみで掲載し得るものはない。時期判断は困難であるが古墳時代前期のものであろう。

SK49 土坑

調査区北側、ほかの遺構が周辺にみられない6593グリッドに単独で所在する。平面形は楕円形で、長軸方向は、ほかの多くの遺構と異なり西へ傾き、N-66°-W方向を示す。長軸で1.36m、短軸で0.98mを測る。断面は逆台形で、深さは最深部で33cmを測る。覆土は3層に分かれ、上層に焼土が大量に含まれている。遺物はほとんど得られておらず、粘土塊が出土するのみ。時期判断は困難である。大量の焼土が含まれていることもあり、何らかの燃焼施設であったことをうかがわせる。

溝状遺構

SD9 溝状遺構

調査区北側の5285グリッドに所在する。東1.2m先にはST11 竪穴建物があり、その北西辺にやはずれながらも平行するように本遺構は伸びている。ただし、同時期のものであるかは定かではない。平面は長軸辺がやや蛇行しながら楕円形を呈する。長軸方向は真北に伸び、

N-3° -Eを示す。長軸は1.88m、短軸は40cmを測る。断面は箱形で、深さは10cmを測る。覆土は2層に分けられ炭化粒が多量に含まれている。遺物は甕類の胴部小片のみのため、掲載し得るものはない。時期判断も困難であるが、古墳時代前期のものであろう。

ピット

SP18～21ピット

調査区中央部の4280グリッドに所在する。周辺にはピットが集中しており、特にSP19～21ピットまでの3基はN-40° -Wの軸で直線的に並んでいる。平面はいずれも歪みのある円形ないし楕円形を呈し、22～44cmほどの規模である。断面は逆台形かバケツ形を呈し、深さは8～25cmを測る。SP18ピットは上層に大量の焼土が含まれていた。遺物はほとんど出土しておらず、SP19ピットやSP20ピットで土師器の小片が出土しているものの、器種判断も困難であり掲載し得るものではない。帰属時期も不明である。

SP22・23ピット

調査区中央部の4281グリッドに所在する。1mほど東に離れてSP18～21ピットのグループがある。SP22とSP23ピットは、6cmほどの距離に近接し、平面はSP22ピットが円形を呈し、長軸で22cmを測る。SP23ピットは楕円形を呈し、長軸で27cmほどの規模である。断面はいずれも逆台形で、深さは両者とも15cm前後、覆土は黒褐色のシルトと近似する。出土遺物は得られておらず、帰属時期は不明である。

SP24・25ピット

調査区中央部の4379～4380グリッドに所在する。SP24ピットから西へ1.2mほど離れてSP25ピットがある。平面は両者とも歪みのある円形を呈し、規模は長軸でSP24ピットが35cm、SP25ピットは27cmを測る。断面はいずれもバケツ形で、深さはSP24ピットで18cm、SP25ピットは23cmである。SP25ピットの覆土は暗褐色シルトを基調とし、3層に分けられている。出土遺物は得られておらず、帰属時期は不明である。

SP26・27ピット

調査区中央部の4380グリッドに所在する。両者の間は30cmほどであり、SP26ピットから2m南にSP24ピットが、SP27ピットから1m東にSP28ピットが

ある。平面は両者とも近似した円形を呈し、規模は長軸でSP26ピットが16cm、SP27ピットは19cmを測る。断面はいずれもバケツ形で、深さはSP26ピットが14cm、SP27ピットは17cmとなる。遺物はSP27ピットからの小片のみであり、掲載し得るものではない。ただし、これらには須恵器片がみられることから、古代のものと考えられる。

SP28ピット

調査区中央部の4380グリッドに所在する。1m西にSP27ピットが、2m北にSP29ピットがある。平面は歪んだ円形で長軸14cm、断面はバケツ形で深さ11cmを測る。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

SP29ピット

調査区中央部の4381～4481グリッドにかけて所在する。1.5m東にSP30ピットがある。平面は30cm径の円形を呈し、断面はバケツ形で深さは18cmを測る。出土遺物は得られておらず、帰属時期は不明である。

SP30・31ピット

調査区中央部の4381グリッドに所在する。両者は16cmほどの距離に近接し、1.5m西にSP29ピット、3m北にSP33ピットがある。平面はいずれもやや歪む円形で、SP30ピットが径29cm、SP31ピットは19cmほどを測る。断面は両者ともバケツ形で、深さはともに18cm程度である。出土遺物は得られておらず、帰属時期は不明である。

SP32・33ピット

調査区中央部の4481～4482グリッドにかけて所在する。両者の距離は東西へ40cmほど離れている。SP33ピットから2m西にSP34ピットがある。SP32ピットは細長い楕円形を呈し、長軸はN-33° -Eに傾き43cmを測り、短軸は16cmを測る。断面は箱形で、深さ12cm、覆土は2層に分かれる。上層には炭化粒が多く含まれている。SP33ピットは楕円形で、長軸23cm、断面は逆台形で、深さ13cmを測る。出土遺物に外面赤彩の高坏の口縁部があり、両者から出土した破片が接合するものである。これらの出土遺物から帰属時期は古墳時代前期が当てられる。

SP34ピット

調査区中央部4481～4581グリッドにかけて所在する。周辺には1.5m西にST4 竪穴建物がある。平面は

一部が歪む径 34cm の円形を呈し、断面はバケツ形で、深さは 28cm を測る。覆土は 3 層に分かれ、黒褐色のシルト層を基調とする。出土遺物は得られておらず、帰属時期は不明である。

SP35 ピット

調査区中央部の 4581 グリッドに所在する。周辺には 1 m 南に ST4 竪穴建物がある。平面は 1 辺 26cm ほどの隅丸方形を呈し、断面はバケツ形で、深さは 29cm を測る。覆土は 2 層に分かれ、暗褐色のシルト層を基調とする。出土遺物は得られておらず、帰属時期は不明である。

SP38 ピット

調査区北側の 5486 グリッドに所在する。周辺の遺構は南東 40cm に SP39・42 ピットがある。やや歪む円形を呈し、長軸で 22cm を測る。断面はバケツ形で、深さは 26cm になる。覆土は黒褐色シルト層が堆積する。出土遺物は器種判断も困難な土師器の小片のみであり、掲載し得るものはない。帰属時期は不明である。

SP39 ピット

調査区北側の 5486 グリッドに所在する。周辺には北東 4cm に近接して SP42 ピットがある。平面は楕円形を呈し、長軸で 29cm を測る。断面は箱形で、深さは 11cm ほどである。覆土は黒褐色シルトを基調とし、底面には黄褐色の砂質シルトが堆積する。出土遺物は得られておらず、帰属時期は不明である。

SP40 ピット

調査区北側の 5486 グリッドに所在する。周辺には北側 80cm に SP41 ピットが東側 1.8m に SP39 ピットがある。平面は一部が歪む楕円形を呈し、長軸で 28cm を測る。断面はバケツ形で、深さは 32cm となる。出土遺物は得られておらず、帰属時期は不明である。

SP41 ピット

調査区北側 5486 グリッドに所在する。周辺には南側 80cm に SP40 ピットが、2.4m 北側には ST10 竪穴建

物がある。平面は径 24cm のやや扁平な円形で、断面は逆台形で深さ 6 cm を測る。覆土は黒褐色シルト層を基調とする。出土遺物は器種判断困難な土師器の小片のみであり、掲載し得るものではない。帰属時期は不明である。

SP42 ピット

調査区北側 5486 に所在する。南西 4 cm に近接して SP39 ピットがあり、北西 40cm に SP38 ピットがある。平面形は径 25cm の円形で、断面はバケツ形、深さは 24cm を測る。覆土は黒褐色シルト層を基調とし、3 層に分けられる。出土遺物は土師器甕があり、帰属時期の細別は困難であるが、古墳時代前期のものであろう。

SP43 ピット

調査区北側 5386 グリッドに所在する。周辺には北側 2 m に SP39 ピットが、東側 1.2m に SK44 土坑がある。平面はやや扁平な円形で、長軸は 24cm を測る。断面は逆台形で、暗褐色シルト層が堆積し、深さは 16cm ほどとなる。出土遺物は得られておらず、帰属時期は不明である。

SP46 ピット

調査区中央部の 3978 グリッドに所在する。周辺に遺構はみられず、単独で検出している。平面は不整長方形で、長軸は N-33° -E に傾き 50cm を測り、短軸は 31cm を測る。断面は皿形で、深さは最大でも 5cm ほどである。床面は安定せず、焼土や炭化粒を大量に含む覆土が堆積していた。何らかの燃焼施設であることが想定される。出土遺物は得られておらず、帰属時期は不明である。

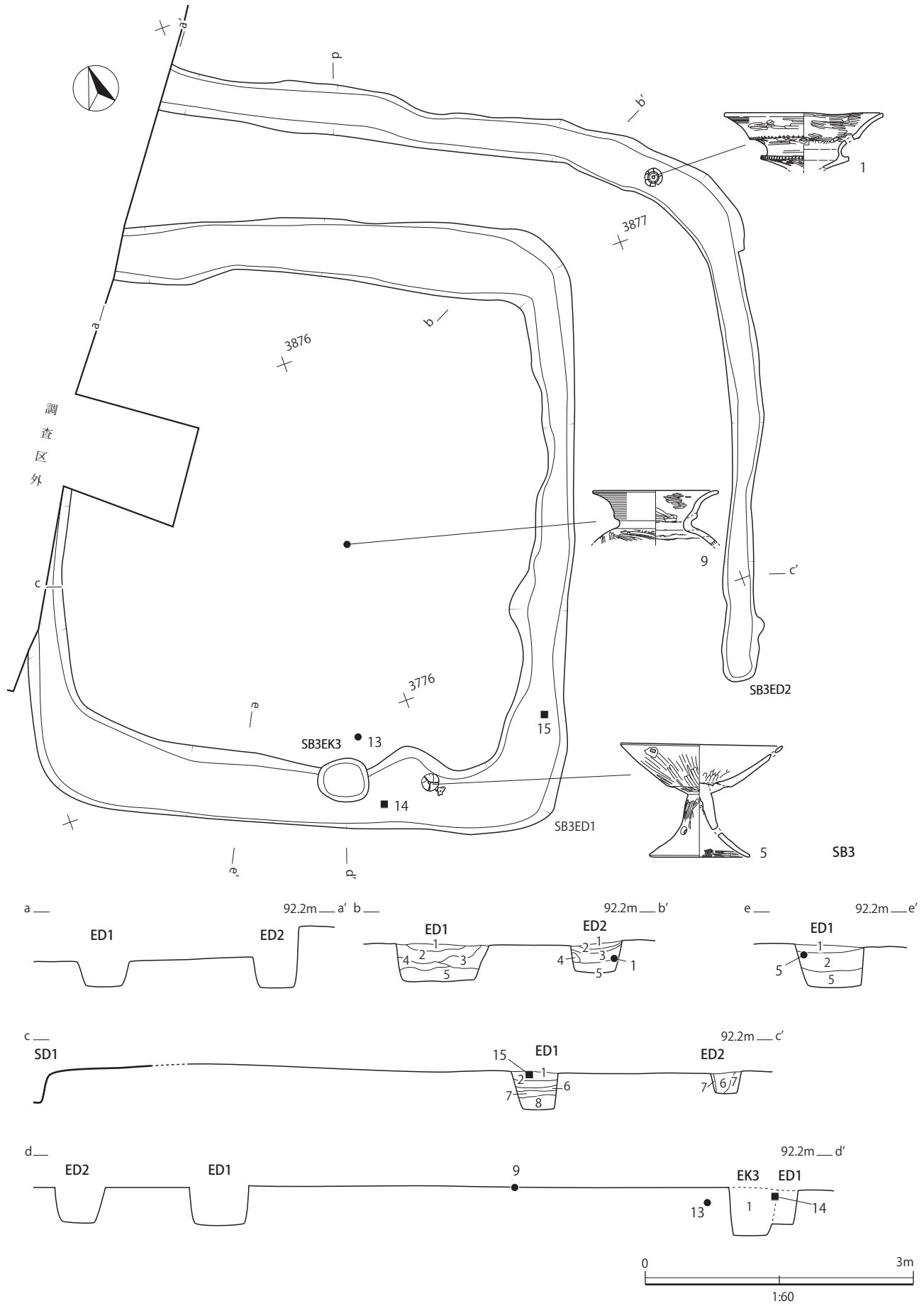
SP48 ピット

調査区北側の 5186 グリッドに所在する。周辺には北側 1m 先に ST11 竪穴建物がある。平面はやや扁平な円形で、長軸 23cm を測る。断面はバケツ形で、深さ 21cm となる。出土遺物は得られておらず、帰属時期は不明である。

引用・参考文献

岡本淳一郎 2006 「周溝をもつ建物の分類と系譜」『下老子笹川遺跡発掘調査報告書』第 5 分冊 p.247 ~ p.276 富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第 31 集

III 検出した遺構



第9図 検出遺構1 (SB3)

SB3ED1溝土層説明

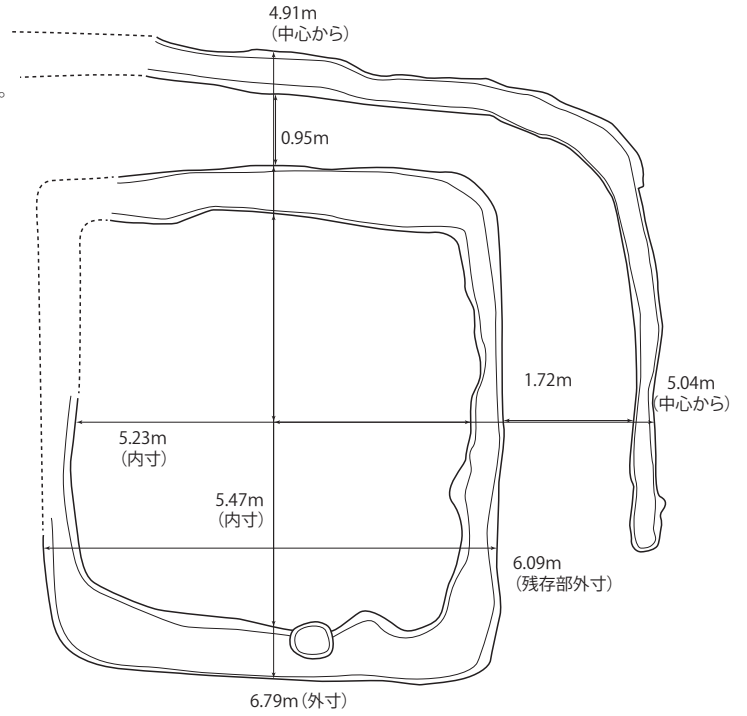
- | | |
|---------------------|--------------------------------------|
| 1. 10YR3/3暗褐色シルト | 10YR4/4褐色砂質シルト粒多量に混入する。 |
| 2. 10YR2/2黒褐色シルト | 10YR4/4褐色砂質シルト粒多量に混入する。 |
| 3. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト | 10YR4/4褐色シルト、同ブロックを混入する。 |
| 4. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト | 10YR4/4褐色シルト、同ブロックを多量に混入する。 |
| 5. 10YR3/3暗褐色シルト | 10YR4/4褐色シルト粒を多量に混入する。しまりなくやや黒っぽい。 |
| 6. 10YR3/3暗褐色シルト | 10YR2/2黒褐色シルトを少量混入する。 |
| 7. 10YR3/3暗褐色シルト | 10YR4/4褐色砂質シルト、同ブロックを多量に混入する。 |
| 8. 10YR3/3暗褐色シルト | 10YR2/2黒褐色シルトと、10YR4/4褐色シルト粒を少量混入する。 |

SB3ED2溝土層説明

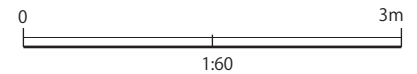
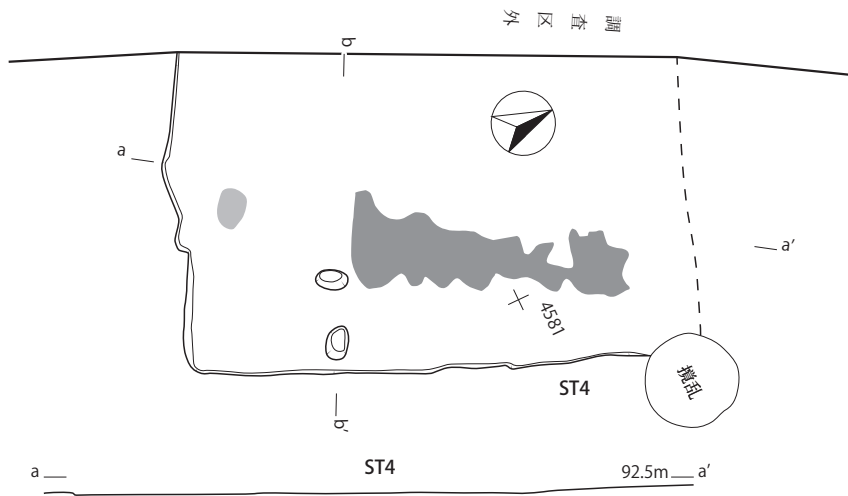
- 10YR3/4暗褐色シルト
10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック少量混入する。
- 10YR4/4褐色シルト 1を少量混入する。
- 10YR3/4暗褐色シルト
10YR4/3にぶい黄褐色ブロックを混入する。全体にしまりが無い。
- 10YR4/4褐色シルト層
10YR3/3暗褐色シルトを混入する。
- 10YR3/4暗褐色シルト
10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒多量、
10YR4/2灰黄褐色シルトブロックを混入する。
- 10YR3/3暗褐色シルト
10YR4/3にぶい黄褐色シルト、同ブロックを混入する。
- 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
10YR3/3暗褐色シルトを少量混入する。

SB3EK3土坑土層説明

- 10YR3/3暗褐色シルト
10YR4/3にぶい黄褐色シルト、同ブロック混入をする。

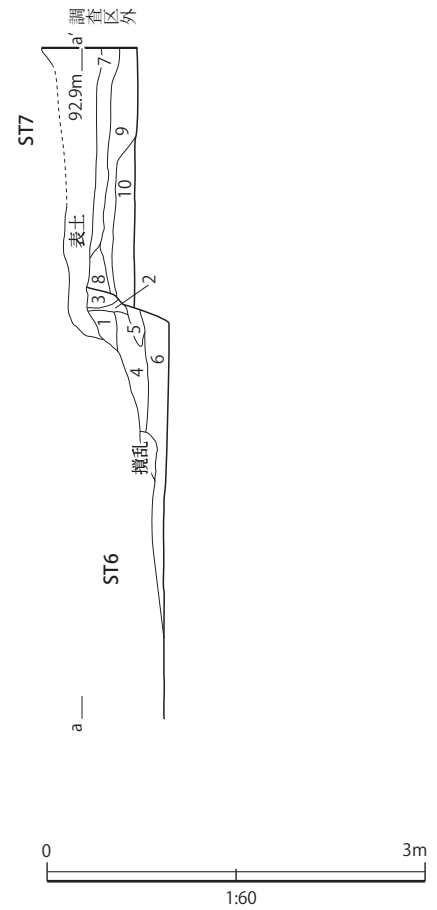
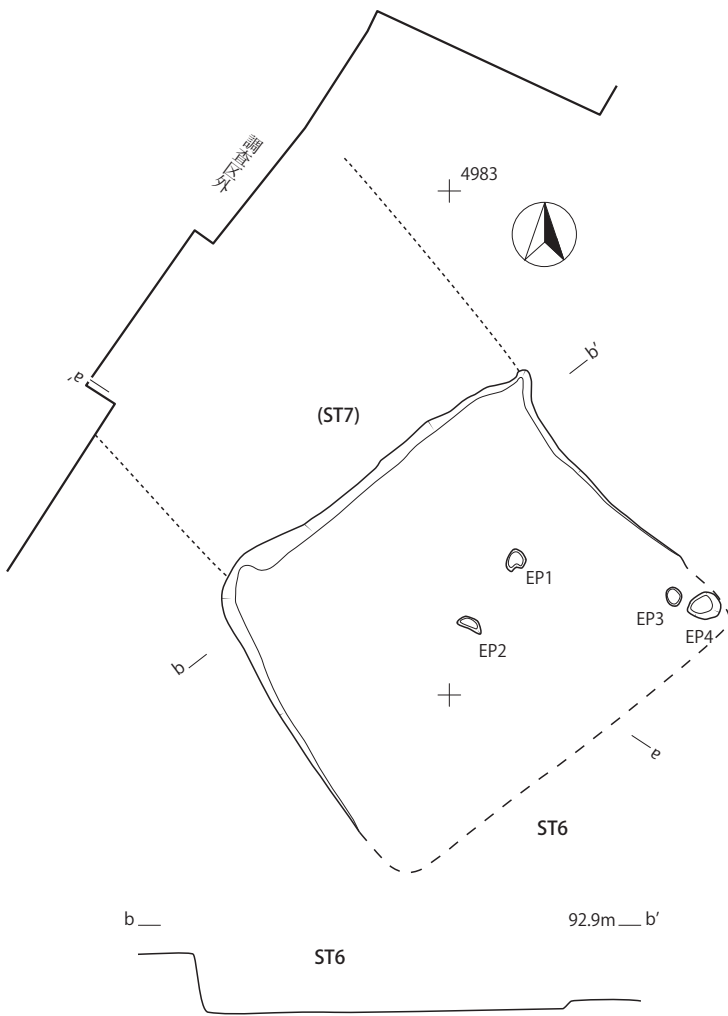
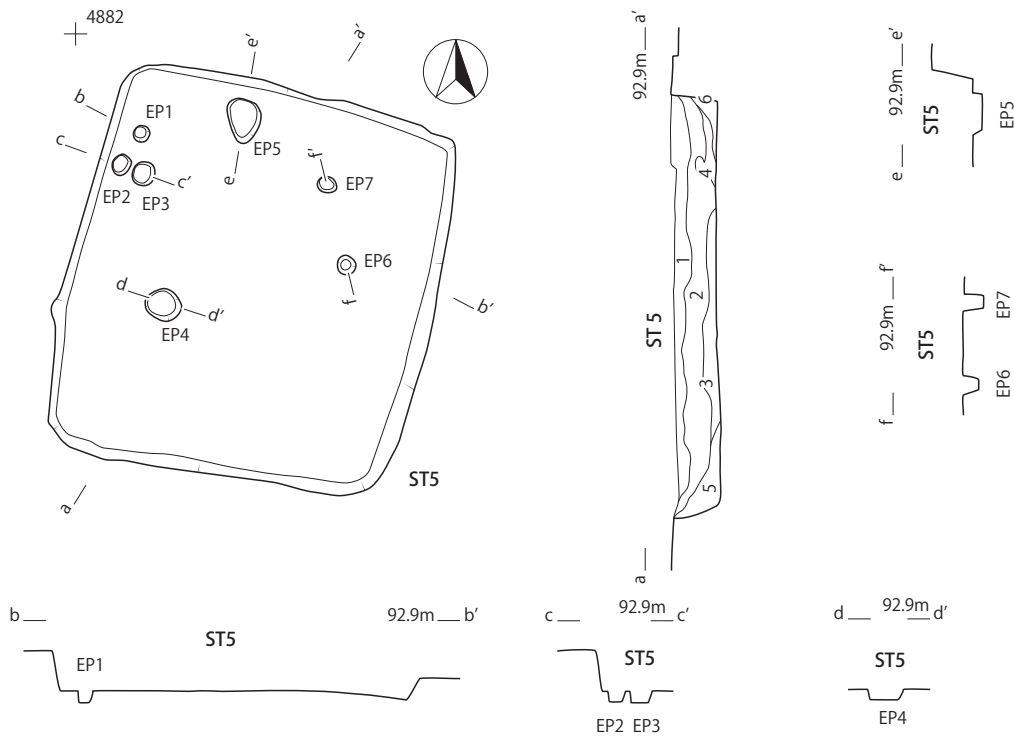


SB3建物計測位置 S=100



第10図 検出遺構2 (SB3、ST4)

III 検出した遺構



第11図 検出遺構3 (ST5、ST6・7)

ST5竪穴建物土層説明

- | | |
|------------------|---|
| 1. 10YR3/1黒褐色シルト | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒、焼土粒わずかに混入する。 |
| 2. 10YR3/1黒褐色シルト | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒・焼土粒少量混入する。 |
| 3. 10YR3/1黒褐色シルト | 10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック多く混入する。焼土粒少量混入する。 |
| 4. 10YR2/2黒褐色シルト | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒、焼土粒わずかに混入する。 |
| 5. 10YR2/2黒褐色シルト | 10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック多く混入する。 |
| 6. 10YR2/2黒褐色シルト | 10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック多く混入する。焼土粒・木炭粒わずかに混入する。 |

ST6・7竪穴建物土層説明

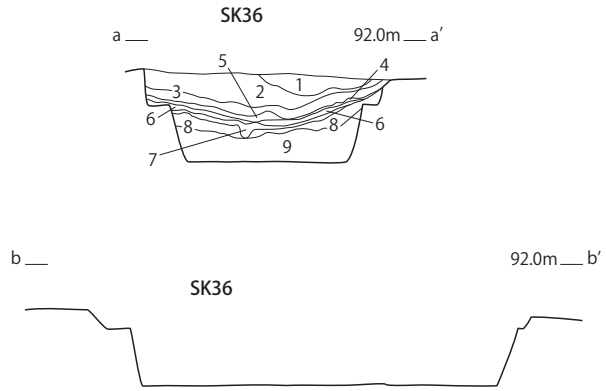
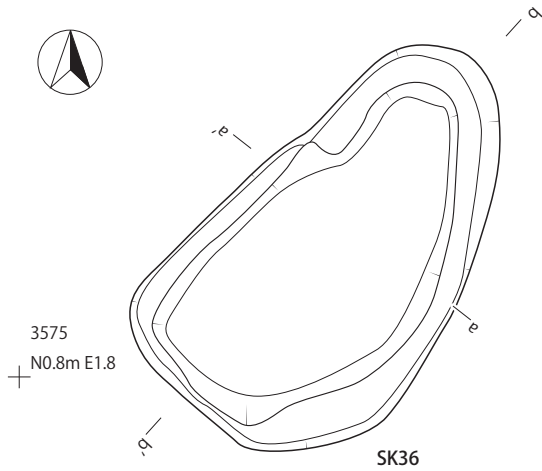
- | | |
|--------------------------|--|
| 1. 10YR3/3暗褐色シルト | 耕作土に近い。(ST6土層) |
| 2. 10YR3/2黒褐色シルト | 木炭粒・焼土粒少量混入する。(ST6土層) |
| 3. 10YR3/3暗褐色シルト | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒多く混入する。(ST6土層) |
| 4. 10YR3/2黒褐色シルト | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒多く混入する。(ST6土層) |
| 5. 10YR3/2黒褐色シルト | 4と似るが、4に加えにぶい黄褐色シルトを多く混入する。(ST6土層) |
| 6. 10YR3/3暗褐色シルト | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト及び同粒子が多量に混入する。(ST6土層) |
| 7. 10YR3/3暗褐色シルト | にぶい黄褐色シルト粒を多く混入する。焼土粒がわずかに混入する。(ST7土層) |
| 8. 10YR3/2黒褐色シルト | 4と似るが、締まりが4よりもなく、10YR4/3にぶい黄褐色シルトを混入している。(ST7土層) |
| 9. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト | 8の黒褐色シルトを多く混入する。(ST7土層) |
| 10. 10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック | 6の暗褐色シルトを多く混入する。(ST7土層) |



ST17竪穴建物土層説明

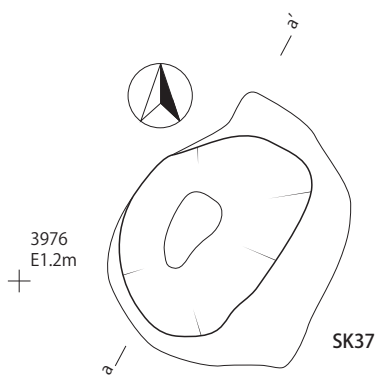
- | | |
|--|-----------------------------|
| 1. 2.5YR5/8明赤褐色の焼土 | 10YR2/3黒褐色シルトが混入する。(EL1土層) |
| 2. 10YR7/6明黄褐色粘質シルトブロックと10YR3/4暗褐色シルトの混合層。 | |
| 3. 10YR2/3黒褐色粘質シルト | 10YR7/6明黄褐色粘質シルト粒がやや多く混入する。 |
| 4. 10YR3/3暗褐色粘質シルト | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒子が少量混入する。 |

第12図 検出遺構4 (ST5、ST6・7、ST17)



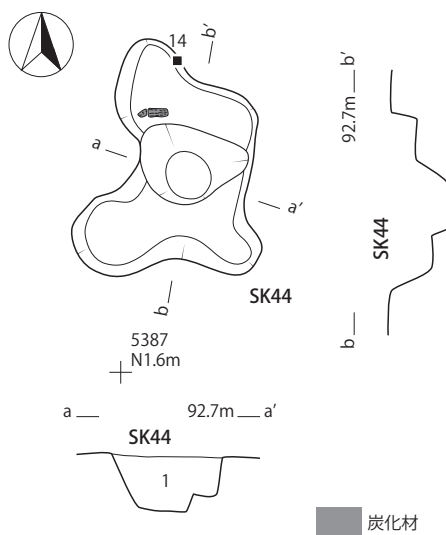
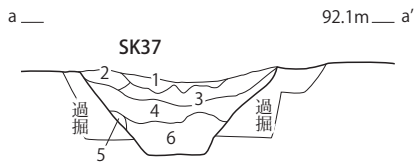
SK36土坑土層説明

- | | |
|-----------------------|--------------------------------------|
| 1. 10YR3/4暗褐色粘質シルト | 粘性、締まり有り。炭化粒がわずかに混入する。 |
| 2. 10YR4/4褐色粘質シルト | 粘性、締まり有り。炭化粒がわずかに混入する。 |
| 3. 10YR3/4暗褐色粘質シルト | 粘性、締まり有り。炭化粒がわずかに混入する。 |
| 4. 10YR4/6褐色粘質シルト | 粘性、締まり有り。
10YR5/6黄褐色ブロックが多量に混入する。 |
| 5. 10YR5/6黄褐色粘質シルト | 粘性、締まり有り。 |
| 6. 10YR3/4暗褐色粘質シルト | 粘性、締まり有り。 |
| 7. 10YR4/6褐色粘質シルト | 粘性、締まり有り。炭化粒がわずかに混入する。 |
| 8. 10YR3/4暗褐色粘質シルト | 粘性、締まり有り。
10YR4/6褐色土がわずかに混入する。 |
| 9. 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト | 粘性、締まり有り。 |



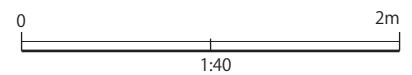
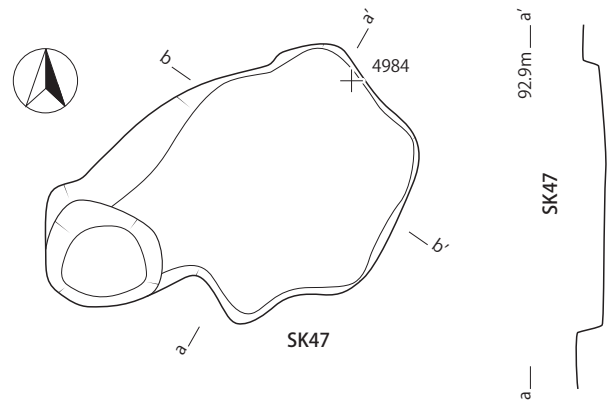
SK37土層説明

- | | |
|------------------|---|
| 1. 10YR3/3暗褐色シルト | 粘性、締まり有り。10YR4/6褐色砂、炭化粒がわずかに混入。 |
| 2. 10YR3/3暗褐色シルト | 粘性、締まり有り。炭化粒がわずかに混入。 |
| 3. 10YR4/6褐色シルト | 粘性、締まり有り。暗褐色シルトと黄褐色シルトが混在する。
炭化物、炭化粒がわずかに混入。 |
| 4. 10YR2/2黒褐色シルト | 粘性、締まり有り。褐色シルト粒、炭化粒がわずかに混在する。 |
| 5. 10YR3/3暗褐色シルト | 粘性、締まり有り。炭化粒がわずかに混入。 |
| 6. 10YR3/4暗褐色シルト | 粘性、締まり有り。黒色シルトと褐色シルトが混在する。
炭化粒わずかに混入。 |



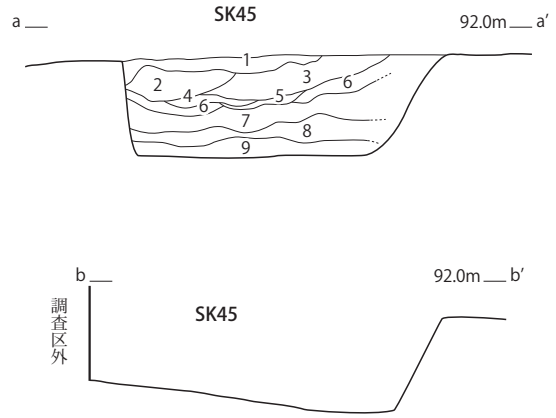
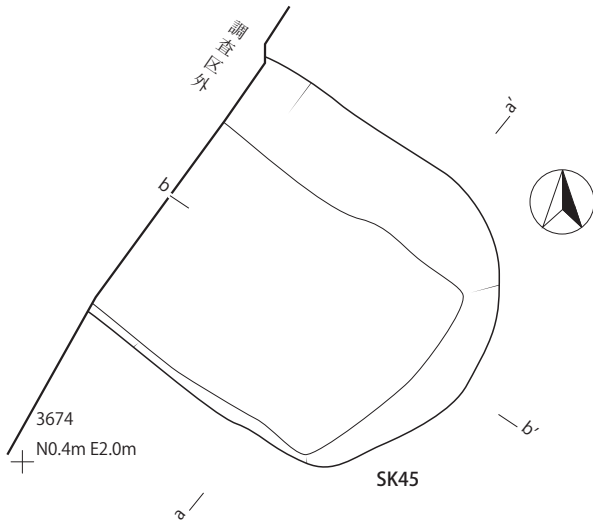
SK44土層説明

1. 10YR3/3暗褐色シルト にぶい黄褐色シルトと木炭、炭化粒が大量に混入している。



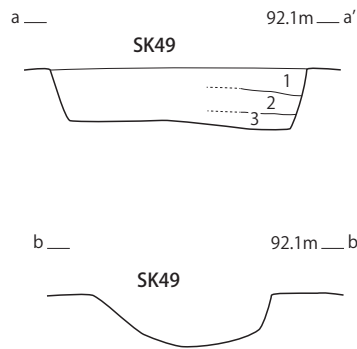
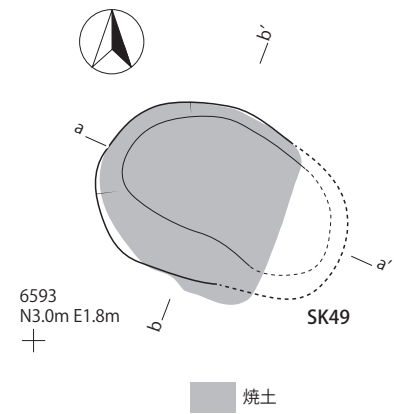
第 14 図 検出遺構 6 (SK36、SK37、SK44、SK47)

III 検出した遺構



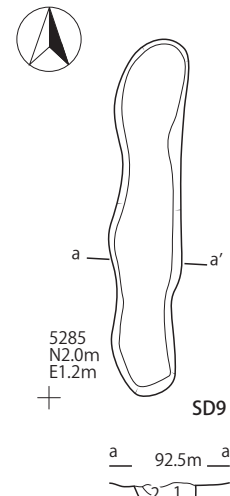
SK45土層説明

- | | |
|--------------------|---|
| 1. 10YR5/4にぶい黄褐色砂 | 粘性無し、締まり有り。炭化粒わずかに混入。 |
| 2. 10YR3/3暗褐色シルト | 粘性強、締まり有り。にぶい黄褐色砂、炭化粒(φ1~20mm)わずかに混入。 |
| 3. 10YR3/3暗褐色シルト | 粘性強、締まり有り。10YR5/6黄褐色粘土質シルトがまだらに20%、炭化粒わずかに混入。土器片多量。 |
| 4. 10YR3/4暗褐色シルト | 粘性強、締まり有り。10YR5/6黄褐色シルトがレンズ状に堆積。炭化粒わずかに混入。 |
| 5. 10YR2/1黒色シルト | 粘性有り、締まり有り。炭化物層。土器多量。 |
| 6. 10YR3/2黒褐色シルト | 粘性強、締まり有り。10YR5/6黄褐色粘土質シルトを斑状に含む。炭化粒わずかに混入。土器片多量。 |
| 7. 10YR3/4暗褐色シルト | 粘性強、締まり有り。黒褐色と黄褐色シルトを斑状に含む。炭化粒シルトを斑状に含む。 |
| 8. 10YR3/4暗褐色シルト | 粘性強、締まり有り。10YR4/6褐色シルト、炭化粒わずかに混入。 |
| 9. 10YR4/4褐色粘土質シルト | 粘性強、締まり有り。10YR3/3暗褐色シルトが帯状に混在。 |



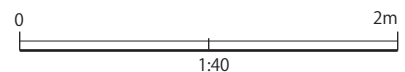
SK49土層説明

- | | |
|-----------------------|-------------------|
| 1. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト | 褐色砂、焼土粒が多量に混入。 |
| 2. 10YR4/4褐色砂 | 炭化物、焼土ブロックが多量に混入。 |
| 3. 10YR4/4褐色砂 | 炭化粒が多量に混入。 |

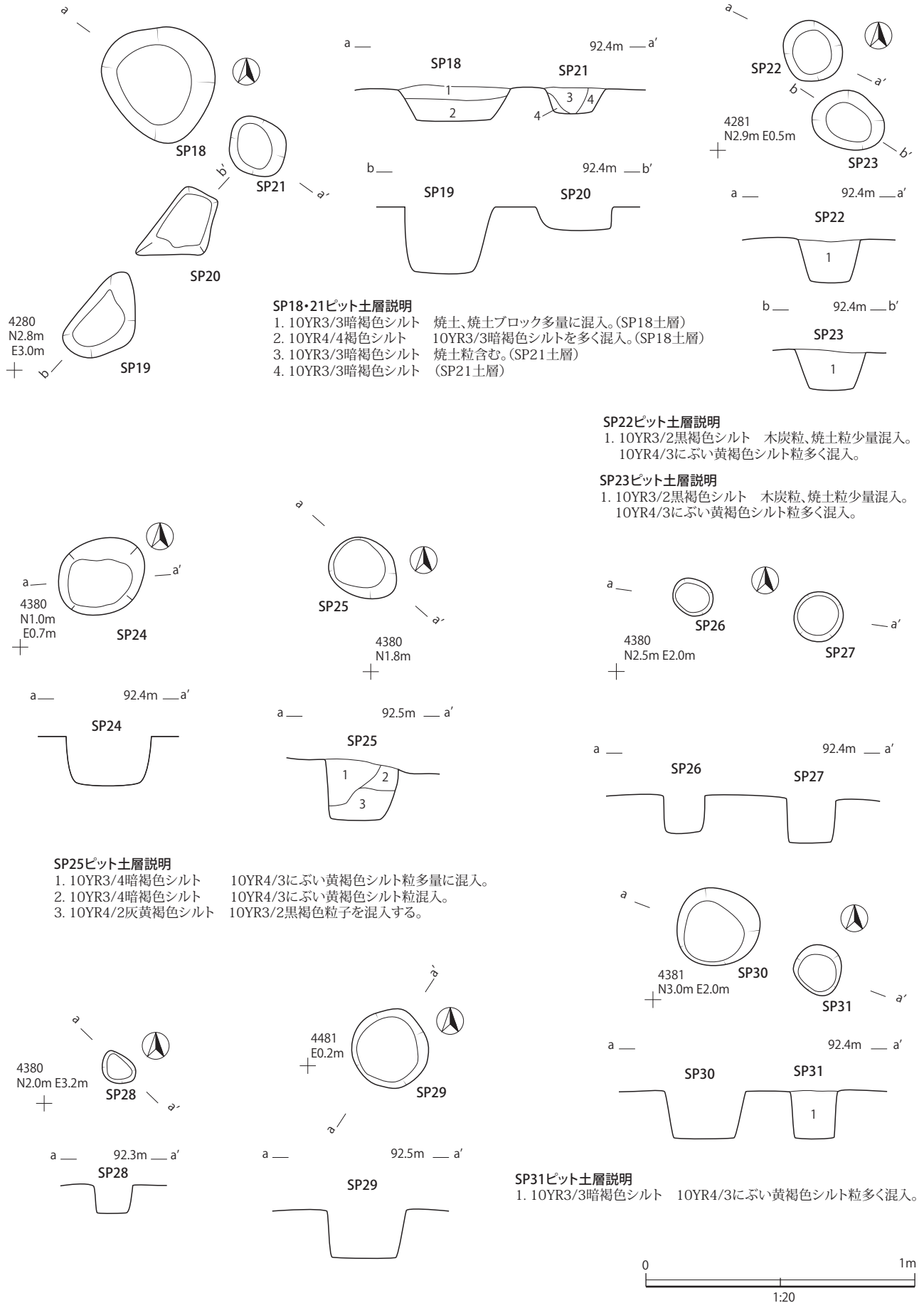


SD9溝状遺構土層説明

- | | |
|------------------|-------------------|
| 1. 10YR3/2黒褐色シルト | 木炭粒、木炭多く、焼土粒少量混入。 |
| 2. 10YR4/4褐色シルト | |

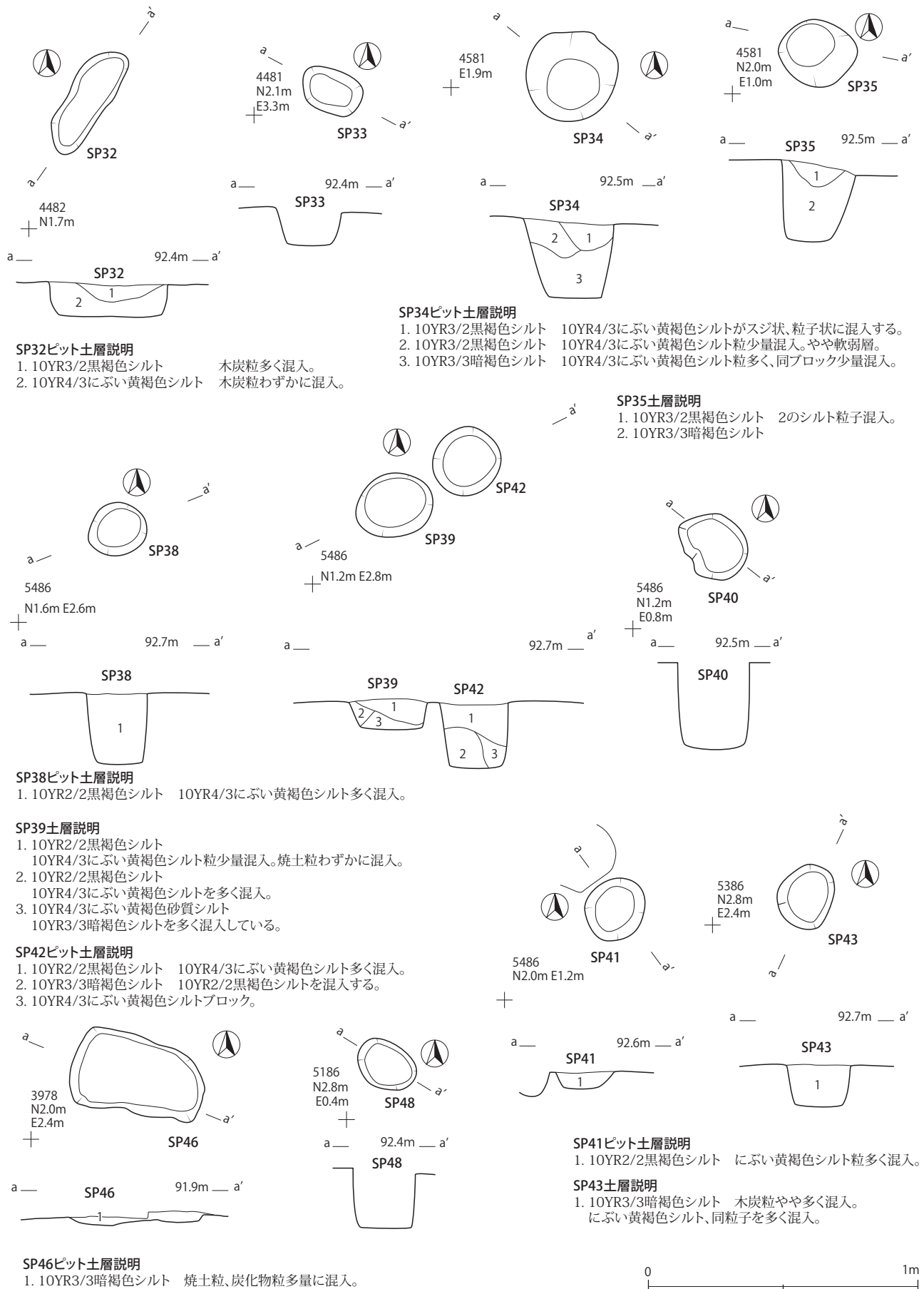


第15図 検出遺構7 (SK45、SK49、SD9)



第 16 図 検出遺構 8 (SP18 ~ SP31)

III 検出した遺構



第 17 図 検出遺構 9 (SP32 ~ SP48)

IV 出土した遺物

1 出土遺物の概要

川前2遺跡第5次調査では、調査終了時にコンテナ10箱分の遺物を得ている。主な遺物は古墳時代前期の土師器と、奈良・平安時代（以下古代）の須恵器や土師器である。遺物の出土はSB3建物やST4・12 竪穴建物、SK45土坑などに多くみられる。ここでは検索性を重視し、時代ごとではなく、遺構単位で番号順に記述、掲載している。

本遺跡は古墳時代前期を主体とする。細分が可能なほど良好なセット関係を得られている遺構は少ないが、可能なものは古墳時代前期を前葉、中葉、後葉の3段階に分けている。この編年観として山形盆地の在地編年である「植松編年」（植松 2005・2016）に基づき、前葉は新潟シンボ7・8期、中葉は新潟シンボ8・9期、後葉は新潟シンボ9・10期に相当するものとして記述する。

2 遺構ごとの出土遺物について

SB3 建物の出土遺物

二重の溝が方形に巡る遺構であり、内側の溝をSB3ED1、外側のものをSB3ED2と呼称する。これらの覆土中からの出土に加え、SB3ED1溝に区画された内側の遺構確認面からの出土遺物も本遺構の帰属としている。遺物組成は、器台、高坏、壺、甕、ミニチュア、砥石からなる。器形復元し得るものはすべて掲載し、第18図1～15にまとめている。これらの遺物の年代は、1の器台や5の高坏から、古墳時代前期前葉のものと考えられる。

1は、脚部を欠くものの、それ以外は完形で残存する高坏状の器台で、いわゆる「装飾器台」の範疇で捉えられるものである。口縁部は二重口縁状をなし、屈折部の稜にキザミが入る。その直下の胴部に小型の透穴が5つ、1段で巡っている。受部下端の突出は短く、先端は張り出さずに面取りされキザミが入る。脚部は剥落と思われ、きれいに欠けている。調整は内外丁寧ミガキが入り、

口縁先端部にはヨコナデがみられる。内面はハケメ後のミガキであり、ハケメ痕跡が一部残る。口唇部の一部に赤褐色の付着物がごくわずかにみられる。焼成時の黒斑が外面半分に認められる。胎土には特徴的に石英が多く含まれている。SB3ED2溝の覆土中層から下層にかけて出土した。器形としての類例は、新潟県胎内市の西川内南遺跡に多く確認でき、SK1002出土の251や包含層出土の433などが類似する（新潟県教育委員会 2005）。

2は、高坏か器台の口縁片である。調整はハケメ後、口縁端部にヨコナデがみられる。ED1溝の底面から出土した。

3は、高坏の口縁片である。外面にはミガキと赤彩が確認できる。ミガキの単位が判然としないのは、赤彩によるものか。小片だが横方向の湾曲がほとんどないため口径は大型のものが想定される。破損後の被熱痕がみられる。

4は、器台か高坏の坏身の底部である。調整が粗雑で外面は削られた器表の粘土がそのまま、ナデ消されていない。内面はハケメ痕が深く残り、粘土塊が付着している。SB3ED2溝の覆土上層から出土である。

5は、高坏である。いわゆる「東海系高坏」であり、脚部の裾縁辺を一部欠くものの、ほぼ完形での出土である。坏部下端に稜をもち、脚部は上面が棒状で裾部で開く。全面ミガキによる調整がなされているが、二次被熱と全面の摩耗で観察が困難である。内面には使用によるものか、擦痕が目立つ。口縁部1か所に内面からの穿孔がみられる。脚部の透穴は3か所である。SB3ED1溝の上層から出土している。

6は、壺の頸部片である。球胴形の胴部から直線的に開く口縁部をもつものと推測される。細かく、丁寧なミガキが確認できる。

7は、壺の頸部直下の肩部片である。小片ではあるものの、いわゆる「東海系加飾壺」（赤塚 1995）として捉えられる櫛描文系の広口壺と考えられる。外面は細かいハケメ調整の後、横位の櫛描沈線区画に波状文が描かれる。内面にも細かいハケメ痕が残る、その上からミガ

キ、ユビオサエ痕が残されている。器壁は薄く、内外面ともに赤く発色している。近隣の遺跡で同じ加飾壺の範疇に含まれるものとして、山形市の山形元屋敷遺跡のSG1 河川からの出土資料に頸部片(32)、口縁片(37)をみることができる(山形埋文2002)。

8は、壺の口縁部である。SB3ED1溝に重複するSB3EK3土坑から出土した。ヨコナデで調整される。

9は、二重口縁の壺である。口縁部の縁辺1/4を欠くが頸部は全周し、肩上部まで残存する。口縁部はミガキ後ヨコナデされ、肩部はミガキ痕が残される。肩部内面は黒色化しており、輪積痕が残され、ハケメやユビオサエによる調整痕がみえる。SB3ED1溝で区画された内側中央部の遺構確認面から出土している。

10は、甕の口縁片である。口唇部は面取りされ、やや上方へ上げられる。口縁部はヨコナデ、わずかに残存する頸部にはミガキが残される。内面にはハケメ痕が深く残されている。全体的に赤く発色する。SB3ED1溝で区画された内側の遺構確認面から出土している。

11は、甕の頸部から胴部片である。ハケメ痕が残される。内面の赤い発色や胎土の質感は10と類似することから、同一個体の可能性がある。

12は、甕の胴部片である。内外にハケメ痕を残す。残存率が低いものの、復元される胴径は240mmを測る。

13は、ミニチュアである。手捏ねで成形され、ナデ調整されている。SB3ED1溝で区画された内側南辺の遺構確認面から出土している。

14は、磨石である。ホルンフェルスの扁平な円礫の中央や縁辺に強い研磨痕を残す。一部の縁辺は磨り減って平坦になっている。砥石のような用い方ではないだろう。破断面に使用痕は確認できないため、使用後の破損である。研磨痕は自然の転磨の可能性がある。

15は、砥石である。長方形の板状砥石で、灰黄褐色の泥岩を用いている。全面使用されており、線条痕も確認できる。SB3ED1溝南東の覆土上層から出土した。

ST4 竪穴建物の出土遺物

調査区内に半分ほど検出した竪穴建物で、竪穴は浅く、プランは不明瞭である。そのため竪穴範囲外でも周辺から出土したものは、それを明示した上で、ここに掲載しておく。また、古墳時代の遺物が相当数含まれているた

め、遺構外としてまとめず、古代のものと分けてここに掲載する。遺物組成は、須恵器の坏、長頸壺、甕、土師器甕であり、古墳時代のものは高坏、壺、甕がみられる。器形復元可能なものはすべて掲載し、第19～20図16～42にまとめている。古代の遺物の年代は、9世紀前半のものと考えられる。

16～22は、須恵器坏である。16～18は口縁片、22は底部のみ、19～21は口縁から底部まで復元はできるものの、いずれも半分以上を欠くものである。器形は浅く、底部から直線的に開く19や21と、やや深身で底部から丸みをもって開く20が確認できる。底部の切り離しは19や20が回転ヘラ切りで21、22は回転糸切りのものである。21の底部には墨書「鬼」が記される。

23は、須恵器蓋である。1/4ほどの残存ながら、鈕部まで全形が復元できる個体である。頂部は回転ヘラケズリで調整され、体部との境は明瞭である。内部が窪むボタン状の鈕が貼付けられている。内面には重ね焼きの痕跡が残る。

24は、須恵器長頸壺の口縁部である。焼成は堅緻で器表面は青黒色を呈する。未接合だが同一個体と判断できる口縁片と頸部片がある。

25～30は、須恵器甕である。25は頸部片で沈線に分けられた上下に櫛描波状文が描かれる。胎土には大量の長石が含まれる。ほかはすべて胴部片で、外面に平行タタキ痕、内面に同心円のアテ具痕が残される。26は青黒色で深いタタキ目が外面に残される堅緻なもの。28は外器表面のみ灰色だが、断面や内面は橙色で軟質なものである。

31～34は、土師器甕である。31と32は口縁片で両者とも口唇部が上方へつまみ上げられるタイプのものである。33と34は底部で、いずれも平底で33は木葉痕が残り、34はケズリの痕跡がみられる。

35～44は、古墳時代前期のものである。

35は、中実棒状の高坏の脚部である。坏部と裾部の根元で剥落している。外面はミガキ痕、内面の裾部根元にはヘラ痕が放射状に残される。いわゆる畿内系高坏であり、古墳時代前期後葉のものであろう。今回の調査でほかに同時期の高坏と積極的に判断できるものはない。

36は、球胴形の中型壺である。頸部付近から底部付

近までの胴部で、細かく砕けた同一個体片が多い。外面は横位のミガキが細かく入り、赤彩される。内面は平滑にナデ調整され、肩部付近にハケメ痕が途切れながら周る。竪穴外より出土している。

37～44は、甕ないし壺である。器形や調整痕から古代ではなく古墳時代前期のものと考え、厳密な判断は困難である。

40は遺構帰属外と判断される古墳時代の甕だが、竪穴中央部の床面より出土している。一方、36や38、43は竪穴外よりの出土である。

ST5 竪穴建物の出土遺物

本遺構は今回の調査で調査区内に全形を検出し、かつ確認面から床面までの深さもある数少ない遺構のひとつである。しかし、出土遺物はごくわずかにとどまり、第20図45～51に掲載するのみである。確認できる遺物組成は須恵器甕と土師器甕のみである。器形復元可能なものはすべて掲載している。掲載外のものすべて土師器の甕類の破片である。土師器甕の破片には、古墳時代のものも含まれているが、本遺構の年代は9世紀代のものである。

46は、須恵器甕である。46は肩部上位の破片で外面にタタキ目と内面に同心円アテ具痕が残される。

45・47～51は、土師器である。45は甕の口縁片で口唇部が薄く白む以外は全面橙色を呈する。成形は丁寧で稜が明確に作り出されている。47は長胴甕の底部から胴部下半が1/4程度残存するものである。中央部床面より出土している。残存部上端に焼成後の穿孔が1か所確認できる。外面ヘラケズリ、内面にはユビオサエ痕が残される。48・49・51は、破片のため特定は困難だが、古墳時代の土師器甕、50は壺と思われる。

ST6・ST7 竪穴建物の出土遺物

本遺構は2棟の竪穴が重複して検出したものである。ST6 竪穴建物は、調査区内に全形が検出されているものの、上層を攪乱に切られているため東半分はほぼ床面での検出となる。出土遺物は土師器甕類の小片のみ54点を出土しているが、図化し得るものはない。

ST7 竪穴建物は、断面の観察からST6 竪穴建物に切られることは確認できているものの、平面のプランは特

定できていない。確認できる遺物組成は土師器の鉢、壺や甕である。器形復元可能なものはすべて掲載し、第21図52～57にまとめている。一部のものには古代の土師器甕が確認できる。しかし、これらは調査区の拡張部からの出土のため、混入と判断した。56の甕が床面から出土することから、ST7 竪穴建物は古墳時代前期のもの判断する。さらに52の小型丸底鉢の出土を踏まえるならば、古墳時代前期中葉以降のものと考えられる。これよりも新しいST6 竪穴建物からは古代の遺物がみられない。今回の調査区では古墳時代前期と古代の2つの時期しかみられないことから、古墳時代前期の範疇での重複と判断した。

52は、小型丸底鉢の口縁部である。頸部での欠損であり口径の1/4強残存している。頸部からやや丸みをもって開く。二次被熱により全面摩耗しているが、外面にわずかに赤彩の痕跡がみえる。4882グリッドと覆土上層から出土した破片が接合したもので、混入の可能性もある。

53は、土師器壺の口縁部である。二次被熱による器表面の摩耗のため、調整痕の観察は困難である。長石を多量に含む胎土で、調査区の拡張地区から出土している。

54は、土師器の甕や壺の肩部である。頸端部から肩上部にかけて径1/4ほど残存するもので、頸部から口縁部が剥落している。器表面の摩耗のため調整痕の観察は困難だが、ハケメやヘラナデが確認できる。

55は、土師器の甕や鉢などの底部である。底径1/2ほど残存する。外面は強いユビナデにより粗雑に調整される。内面は黒色化し、短い単位でハケメ痕が残されている。

56は、土師器甕である。本遺構の床面から出土している。口縁部から胴部を1/4強欠くものの、丸底の底部は全面残存する。口縁部は「く」字を呈し、頸部で肥厚する。胴部はあまり張らず、扁平な印象を受ける。外面は、磨り減った丸底の底部を含め、全面にハケメ調整が確認できる。内面は口縁部のみにハケメを残し、最後にヨコナデで調整される。内面の胴部はユビオサエの痕跡もヘラナデで平滑に調整されている。

57は、古代の土師器甕である。内外ロクロで調整された口縁片である。調査区拡張部からの出土であり、混入と判断する。

ST10・ST11 竪穴建物の出土遺物

異なる位置で検出している竪穴建物であるが、出土遺物量が少ないのでここにまとめる。

ST10 竪穴建物は、竪穴建物とするには小型の遺構である。ここからは第 21 図 58 の二重口縁壺の口縁片が得られている。口縁部外面に棒状浮文を 2 対 1 組で貼り付けたもので、棒状浮文にはハケメの工具でキザミがつけられる。棒状浮文の貼り付けのため、その根元には棒状の工具でケズリがなされている。同様のものは、県内鶴岡市の畑田遺跡からも出土している。棒状浮文を含まない口縁部の厚さは 10mm を測ることから、全体型はかなり大型のものとなるだろう。本遺構からはほかに図化し得るものはなく、土師器甕類の胴部小片 80 点ほど出土している。58 の時期は古墳時代前期の前葉から中葉のものと考えられる。

ST11 竪穴建物は、範囲の判然としない遺構である。そこから 40 数点の土師器甕類の破片資料を得ている。第 21 図に掲載し、59 は、内外にハケメ痕を残す甕の口縁片。60 は、土師器甕で S 字状の口縁片である。胎土に石英粒が目立つ。時期は判然としないが、古墳時代前期のものと考えられる。

ST12 竪穴建物の出土遺物

調査区北側に単独で検出する竪穴建物である。ほぼ床面での検出であるため、遺物はピットや貼床下からの出土である。中央に炉を有することから、古墳時代のもののように思えるが、貼床下から古代の遺物が出土することや、放射性炭素年代の測定値からも古代のものと考えられる。器形復元可能なものはすべて図化し、第 21 図 61～70 に掲載している。時期は 9 世紀前半と考えられる。

61 は、須恵器杯の口縁部である。口径 1/4 弱ほど残存する小片で、竪穴床面と ST12EP5 からの破片が接合する。

62 は、大型の須恵器杯の口縁部である。口径 1/4 弱ほど底部付近まで残存する。焼成は堅緻で色調は暗赤灰色を呈する。胎土に長石粒多い。

63 と 64 は須恵器の蓋である。両者とも縁辺のみの破片資料である。縁辺のシャープさや内面の稜の深さに

若干の差があるものの、白っぽい色調や石英粒の混入具合などが近似するため同一個体の可能性もある。63 は ST12EP4 ピットから、64 は ST12EP7 ピットからの出土である。

65 は、須恵器の鉢や瓶などの底部である。高台の付く底部のみが半分ほど残存するもので、底部は回転ヘラ切り後ナデ調整されている。内面見込みにはロクロ目が深く残されていることから、坏ではないと判断する。竪穴東辺部の貼床下から出土している。

66 は、土師器の小型鉢である。口縁部から底部まで残存するものの、径に占める割合はごくわずかである。全体的に丁寧なつくりであり、調整痕はきれいに消されている。ST12EP4 からの出土である。

67 と 68 は、土師器甕の長胴甕である。両者とも胴部の下位で、外面ヘラケズリで内面にハケメを残す。ただし、胎土の質感や器厚が異なるため別個体である。67 は胴径 1/4 弱の残存で、残存部の復元胴径は 180mm を測る。竪穴東辺部の貼床下から出土している。68 は底部板が剥落した個体で、胴径 1/4 強残存する。残存部の復元胴径は 155mm を測る。ST12EL15 炉の底面から出土している。

69 は、凝灰質砂岩製の紡錘車である。全面研磨により整形され、表面に棒状工具の痕跡が残る。古代のものにしては粗雑な印象をうける。竪穴東辺部の貼床下から出土している。

70 は、弥生土器の胴部片である。器厚が薄いため、鉢や高坏などになると思われる。2 本 1 組の沈線で施文する。弥生時代中期後半の沈線文系の土器である。貼床下から出土しているが、混入と考えられる。

ST17 竪穴建物の出土遺物

調査区南端部の遺構である。立ち上がりもプランも不明瞭であるが、ST17EL1 炉の近くから第 22 図 71 の土師器甕が出土している。1 個体が潰されたもので、同一個体の破片が多数存在する。71 は未接合の同一個体を図面上で合成したものである。口縁部から底部付近まで残存し、浅黄褐色の器表面に焼成時の黒斑が残される。口縁は頸部が直線的に伸びてから開くもので、胴部は球胴形に膨らむ。内外ハケメ調整痕を残す。時期は古墳時代前期のものと考えられる。

土坑・ピットの出土遺物

SK36 土坑

第 22 図 72・73 に掲載する。72 は器台の脚部、73 は小型壺の胴部である。ほか掲載外は甕類の胴部小片が得られている。古墳時代前期のものと同断できる。

72 は、円錐形に広がる器台の脚部で、裾部は径の半分ほど残存し、受け部底面まで残る。外面はハケメ後上方はミガキ、裾の端部はヨコナデで調整される。内面は黒色化し、ハケメがクモの巣状に残される。透穴は 3 か所確認できる。中央貫通孔は径 16mm ほどのものである。覆土下層より出土している。

73 は、直口壺の胴～底部を想定する。外面の調整は粗雑なハケメで削った粘土の凹凸が残される。底面は丸底だが弱く突出する。覆土上面での出土である。

SK45 土坑

SB3 建物の南に位置する土坑である。覆土中位の 5 層に炭化物が集中し、そこから多数の遺物を得ている。器形復元可能なものはすべて図化し、第 22 図 74～第 23 図 88 に掲載している。器種組成は器台、高坏、壺、鉢、甕が得られており、古墳時代前期のものと考えられる。

74 は、器台の脚部である。脚上部のみ残存し、裾部や受け部はすべて欠損する。透穴は 3 か所確認でき、中央貫通孔は 14mm ほどと、SK36 土坑から出土している 72 に類似する印象を受ける。内外にハケメ痕を残し、胎土は浅黄褐色を呈する。

75 と 76 は、高坏の口縁部片である。75 は内面に赤彩の痕跡が残っている。76 は内外丁寧ミガキが入る薄手のもので、口径 1/4 弱ほど残存する。そこから復元される口径は参考値としてのものだが、230mm と大型のものとなる。

77 は、鉢か壺の底部である。平底の外面は丁寧ミガキが入る精製品で、底径接地面は高台のように弱く突出する。内面見込みは細かいハケメで調整されている。胎土は全体的に赤褐色を呈している。

78 は、壺の口縁部である。外反して開く広口壺と考えられる。全体的に摩耗している。

79～88 は土師器甕類である。79～82 は口縁部片で、79 は 78 と同じタイプの壺の可能性もある。81 と 82 も焼成の色調がやや異なるものの同一個体の可能性

がある。83 は頸部から胴部にかけての破片で鉢などの可能性もある。84 は底部で底径 1/4 強残存する。底面に長軸 5mm ほどの靱痕が 2 か所みられる。

85 と 86 は、頸部が短く直立してから開く器形のものである。86 は胴部中央の一部以外は完形のもので、今回の調査で出土した土師器甕では最も状態がよい。胴部中位が張る球胴形で、底部は平底である。内外ハケメで調整され、外面底部付近から底部はヘラケズリで調整されている。胴部の内面は丁寧ミガキにヘラナデ調整されている。外面の中位から下位に煤が付着しており、底面やその付近にはみられない。

87 は胴部下半と上半部の未接合の同一個体を図面上で合成したものである。底部は丸底になるものと考えられる。残存部には煤が濃く付着している。

88 は肩部上半から口縁部を欠くもので、それ以外は底部まで半分ほど残存する。胴部のやや上位に最大幅をもち、小型の底部へと収斂する。底部は碁笥底状に窪み、中央部が兜巾のように盛り上がる。底径縁辺が強く摩耗しており、台付甕の脚部が剥落したようにもみえる。

SK49 土坑

調査区の北側で検出した燃焼土坑である。土器類は破片すら得られていない。第 23 図 89 に粘土塊を掲載する。図化した外にも 2 点ほど同様の粘土塊が得られている。本遺構で行われた焼成行為に関連するものと推測される。

SP32・SP33 ピット

調査区中央部に位置する 40cm ほど離れた 2 つのピットの覆土から出土した破片が接合したもので、第 23 図 90 に掲載する高坏の口縁部となる。外面に赤彩が残る。細分は困難だが、古墳時代前期のものである。

SP42 ピット

調査区北側のピットで第 23 図 91 に掲載する土師器甕類の口縁部片を得ている。古墳時代前期のものであろう。

3 遺構外出土遺物

遺構検出時や調査区の拡張時、あるいは遺構として調査されたが調査段階で攪乱と判断されたものからの出土遺物を第 24 図 92～第 25 図 119 までまとめる。

92 と 93 は、同一個体と考えられる弥生土器の精製

甕である。胴部上位に最大幅があるものと推測されるが、口縁径 130mm に対して胴径 142mm と大きくは変わらない。口縁部は緩い肩部から長く直立する。93 で口縁部から胴部上位まで半分程度の残存である。施文は口縁部に 2 本 1 組の沈線で重四角文を描くもので、下半には縄文が付される。弥生時代中期後半の平行沈線文系土器であり、県内南陽市の百刈田遺跡の出土遺物と時期的に近いものであろう（山形埋文 2010）。土器に付着した炭化物より放射性炭素年代を測定したところ、較正年代値で紀元前 4 世紀中頃から前 2 世紀初頭という結果が出ている。現在考えられている当該期の実年代観とはずれているものの、百刈田遺跡の測定結果も同様の値を示すことから、両者の時期は近いものと推定できる。

94～103 は古墳時代の土器である。94 は、器台の脚部である。上半部のみ残存し、受け部や裾部は欠損する。透穴は残存部で 1 か所確認できる。中央貫通孔は径 18mm ほど。胎土の色調は橙色で長石粒が多い。95 は、器台か高坏の脚裾部片である。96 と 97 は、壺の口縁部である。96 は内外に赤彩が残る。97 は短頸で頸部まで半分ほど残存する。98 は、小型鉢の頸部片である。ミガキの施される器表面に強く内湾する器形のため、小型丸底鉢などが想定される。99～103 は土師器甕である。99 と 100 は口縁部片で、101 は頸部片、102 と 103 は底部片である。いずれも破片資料のため全体の器形がうかがえるものではない。

104～116 は古代の土器である。104～108 は須恵

器坏である。いずれも底部片で 104～107 が回転ヘラ切り、108 だけが回転糸切り痕を残す。109～112 は須恵器蓋である。110 は頂部に回転ヘラケズリ痕を残し、体部との稜が明確に残される。112 は 2 点の未接合を図面上で合成したものである。両者とも内面が特徴的に黒色化している。

113 は、須恵器横瓶である。胴部のみ 1/4 弱の残存であり、頸部や口縁部の位置が不明のため、図上の横幅は任意で展開したものである。外面にはタタキ目が薄く残され、内面にはアテ具痕はなくユビオサエのみである。カキメによる沈線が同心円状に残る。側面内側には閉塞時の挽き絞り痕が確認できる。

114 は、須恵器甕の胴部片である。かなり厚手のため、大型品であることが推測される。内外に残る調整痕はハケメである。

115 は、土師器の小型鉢か甕である。底部片で、外面はヘラケズリ、内面には明確な黒色処理が施される。

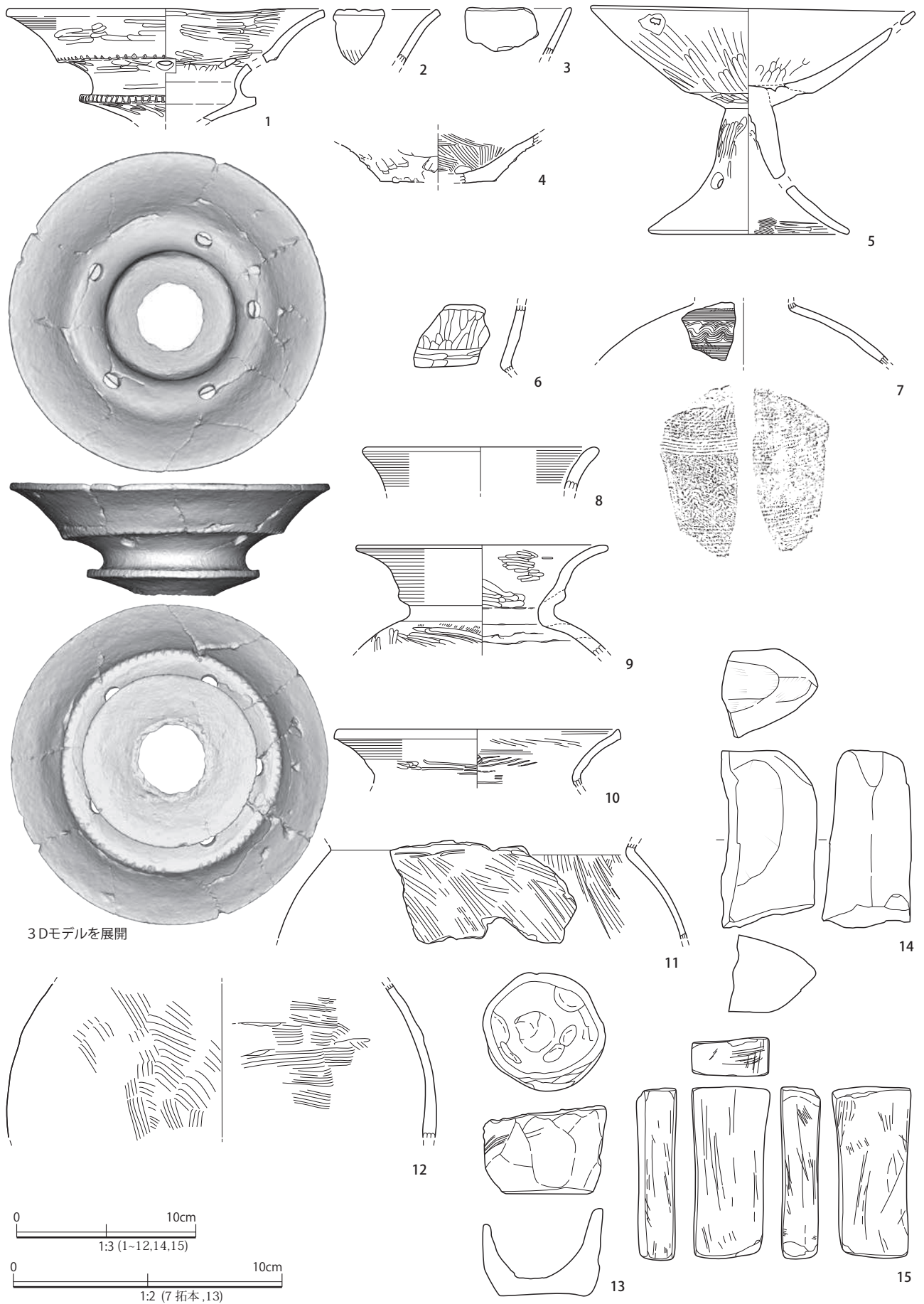
116 は、土師器甕の口縁部片である。ロクロで整形された長胴甕と考えられる。

117 は、砥石である。表裏左右の 4 面に作業痕が残り、結果的に角柱状を呈する。下半部ほど細くなり、折損する。上半部には節理が入る。節理面や折損面に使用痕はみられない。灰白色の凝灰岩製である。

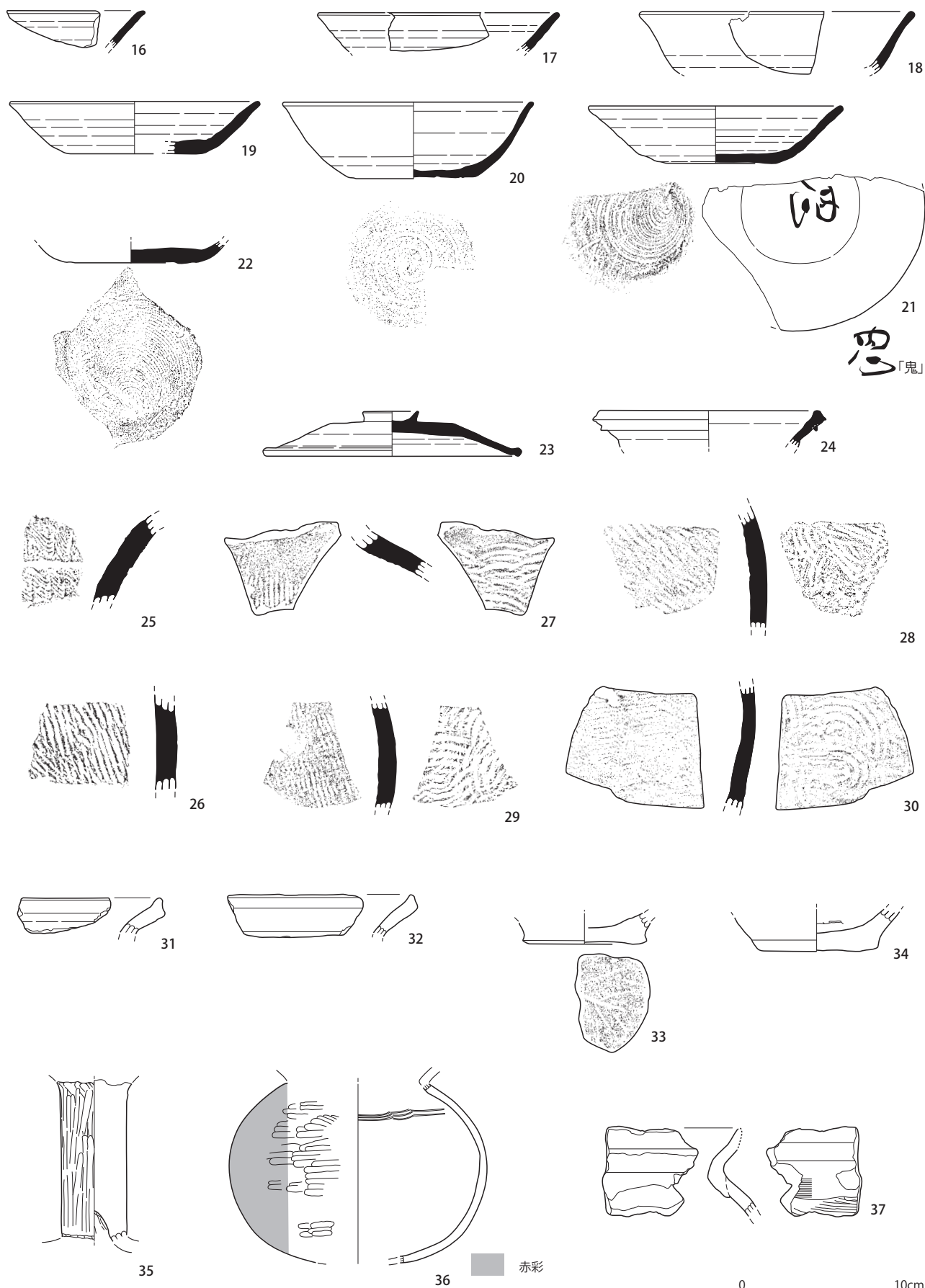
118 と 119 は、安山岩の焼け礫である。分割後被熱している。

引用・参考文献

- 赤塚次郎 1995 「壺を加飾する」『考古学フォーラム』7
 植松暁彦 2005 「山形県の弥生後期～古墳時代前期の様相」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
 新潟県教育委員会 2005 『西川内北遺跡・西川内南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 146 集
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2002 『山形元屋敷遺跡』山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 109 集
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2010 『百刈田遺跡』山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 184 集

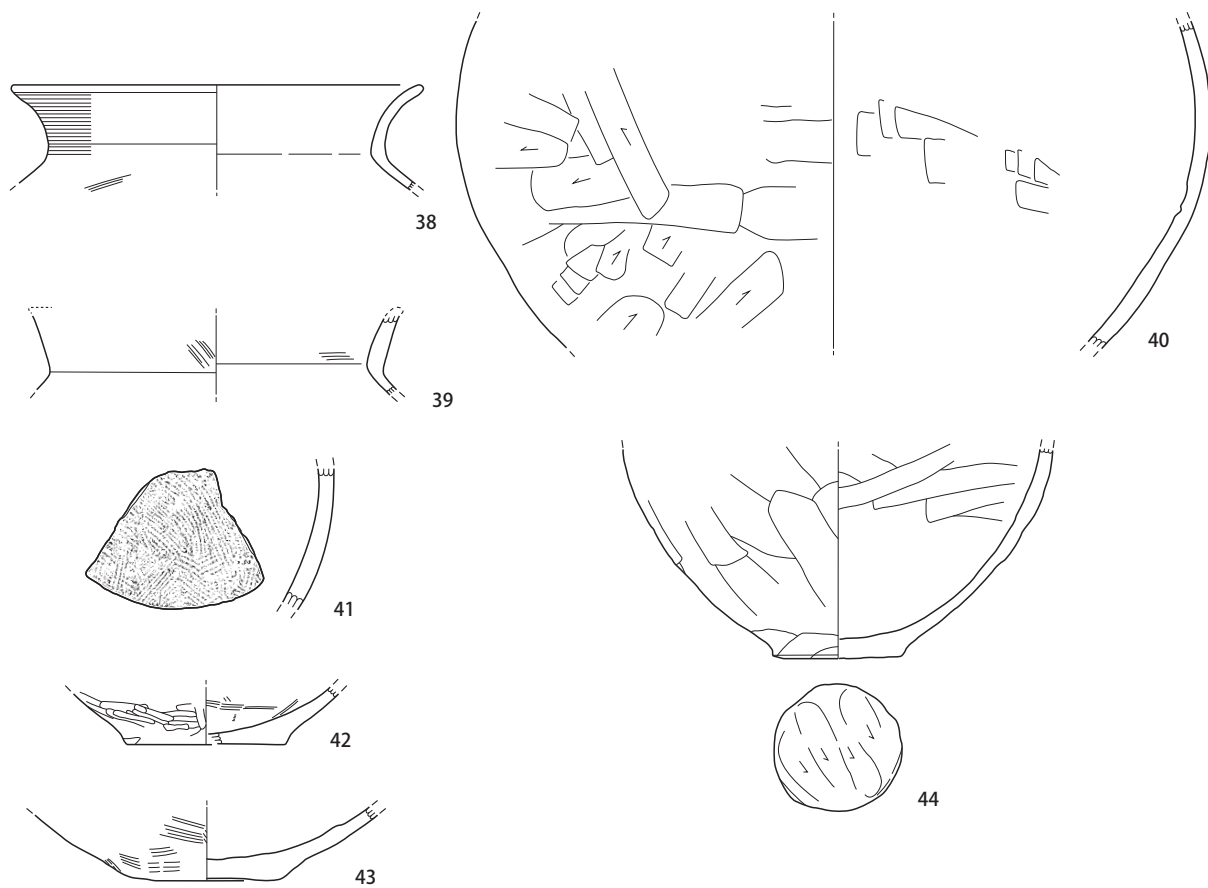


第 18 図 出土遺物 1 (SB3)

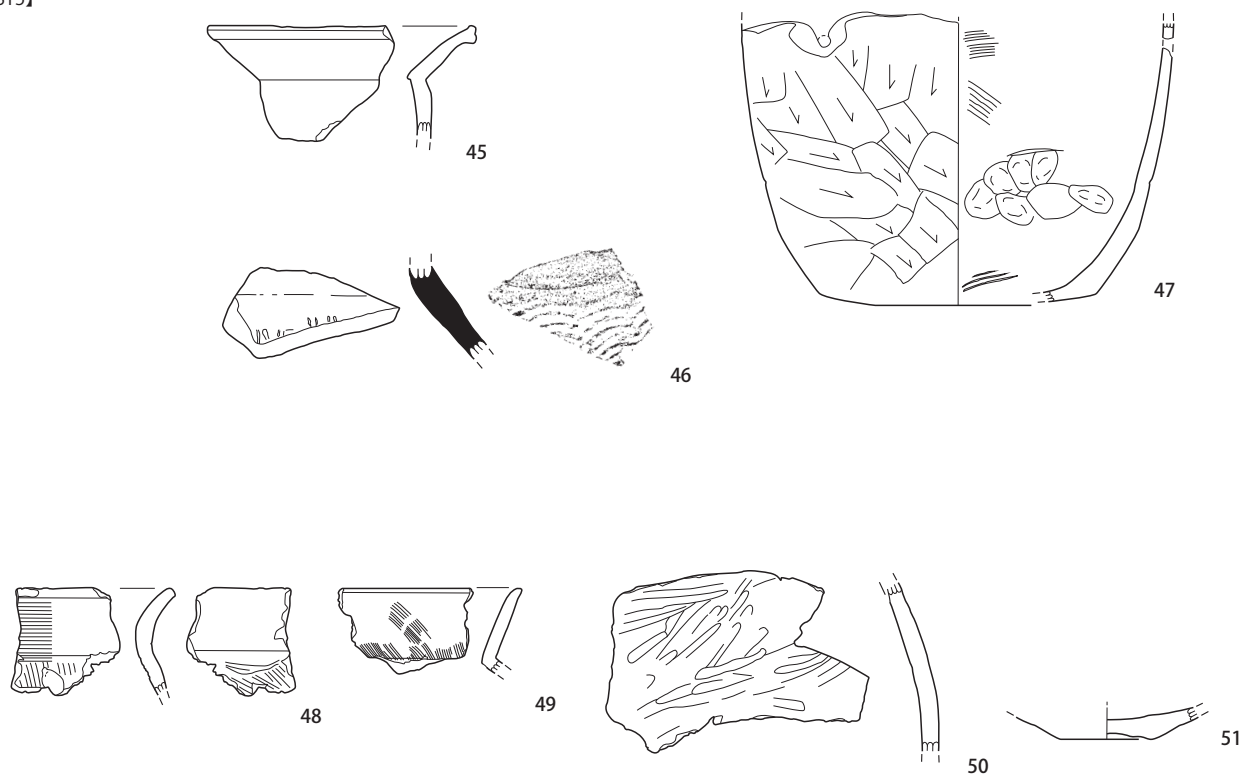


第19図 出土遺物2 (ST4)

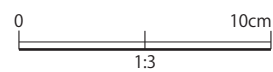
【ST4】



【ST5】

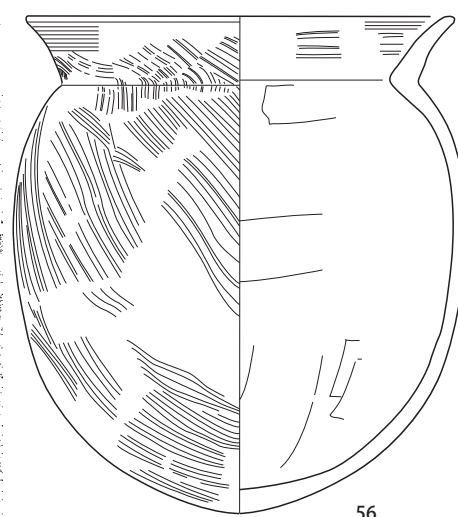
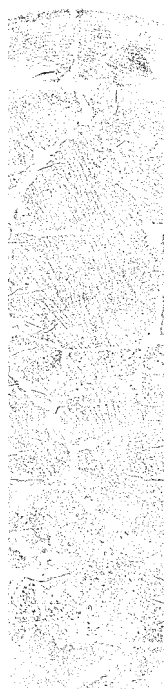
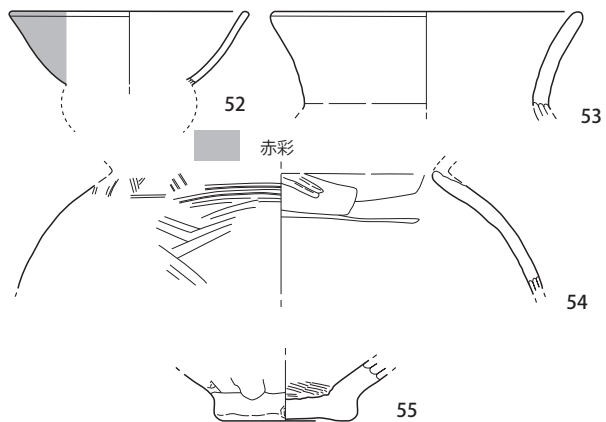


※拓本の輪郭は実測線を示す。

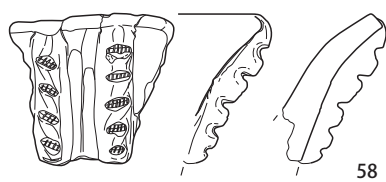


第20図 出土遺物3 (ST4、ST5)

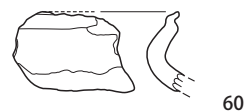
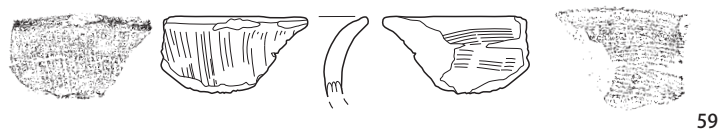
【ST7】



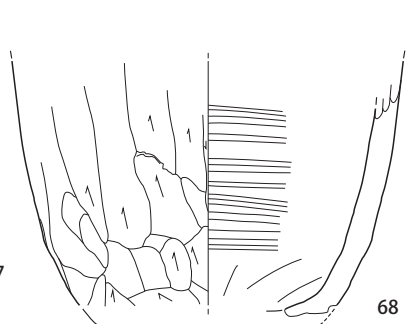
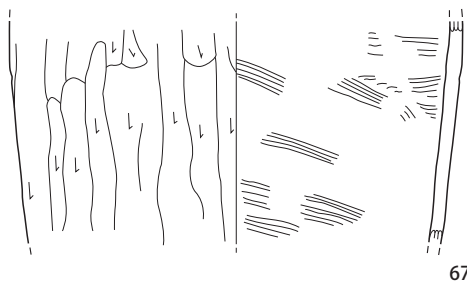
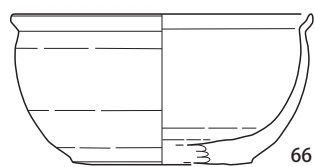
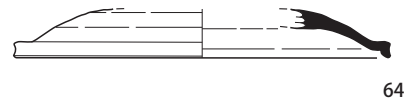
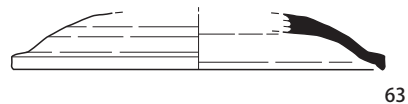
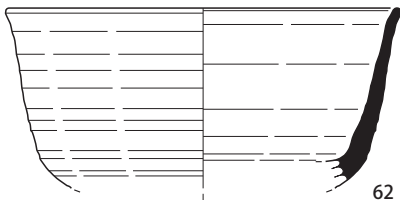
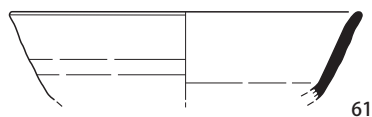
【ST10】



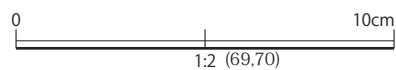
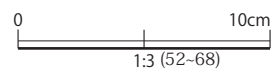
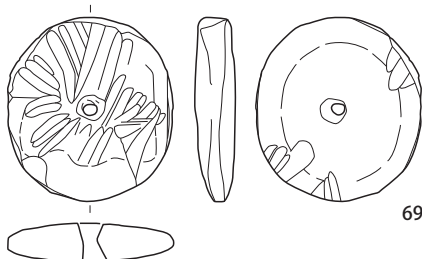
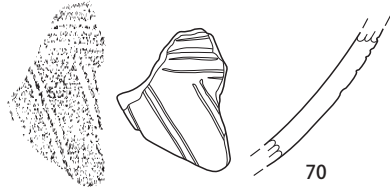
【ST11】



【ST12】



弥生土器

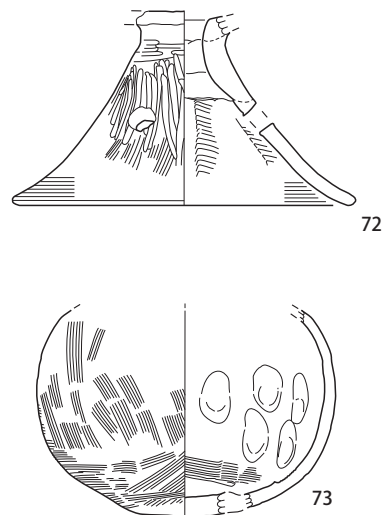


第21図 出土遺物4 (ST7、ST10、ST11、ST12)

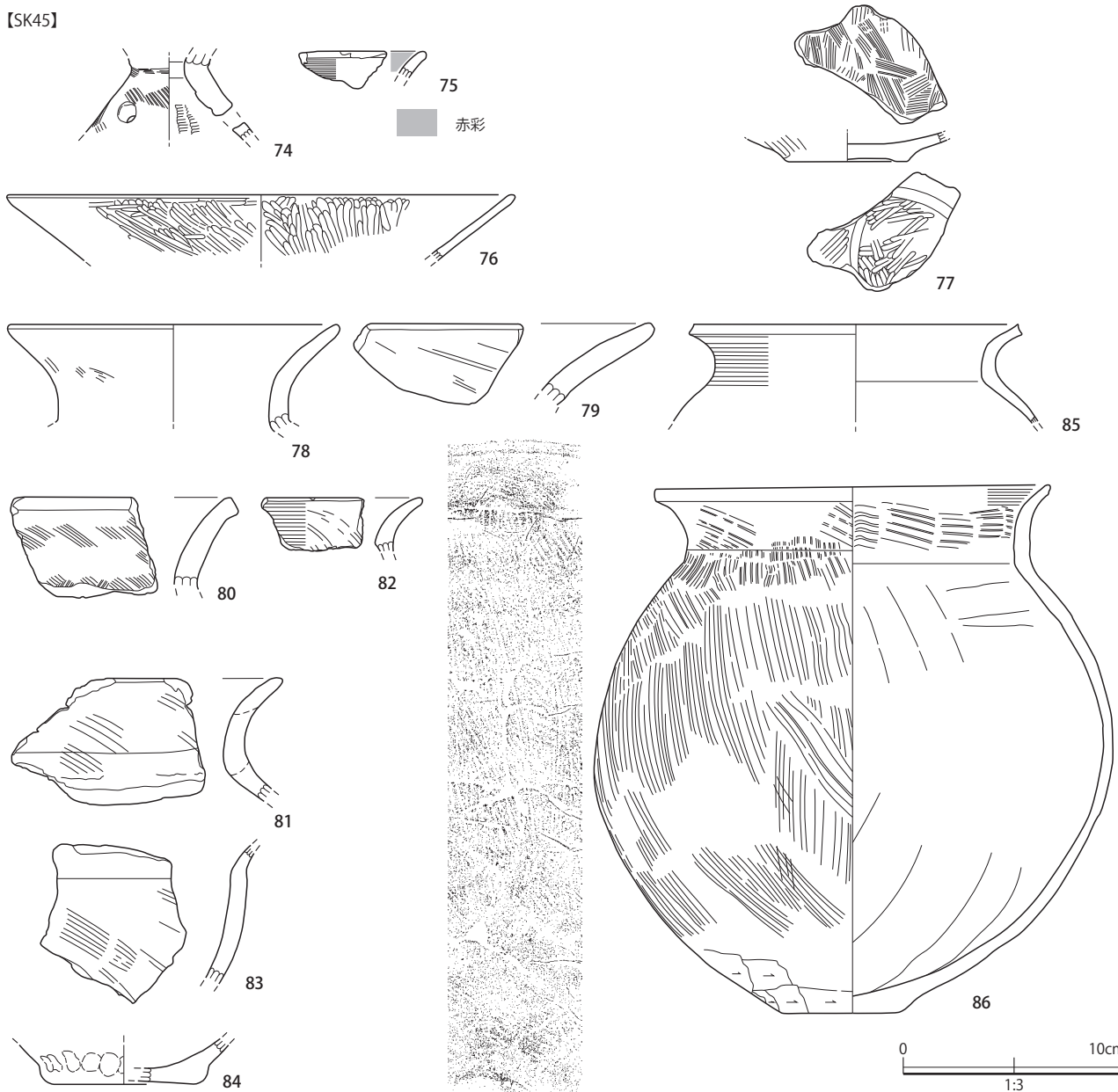
【ST17】



【SK36】

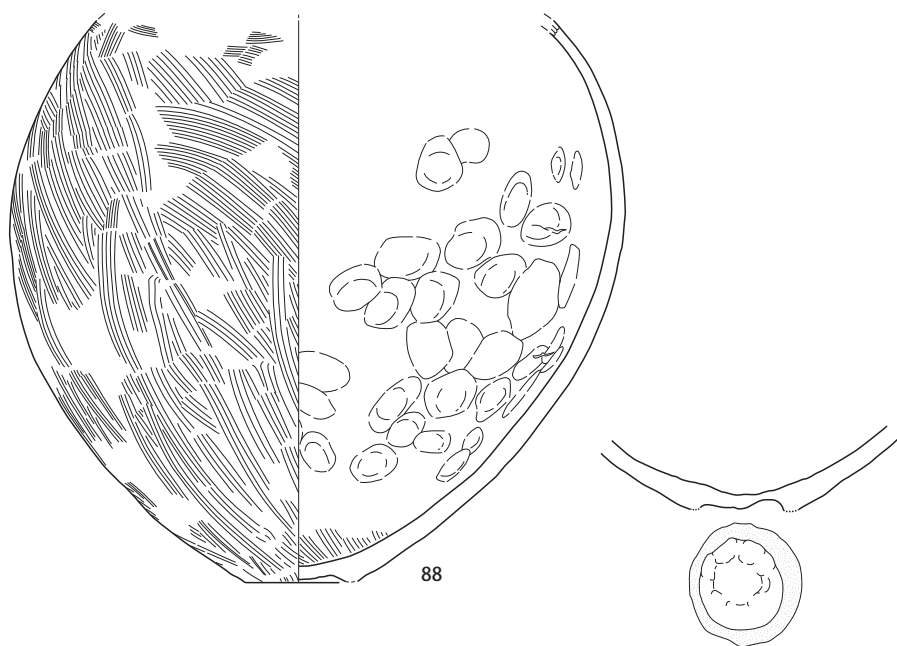


【SK45】

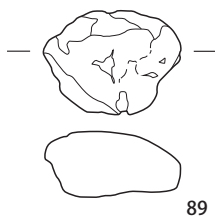


第 22 図 出土遺物 5 (ST17、SK36、SK45)

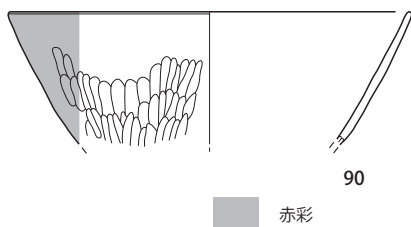
【SK45】



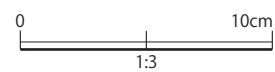
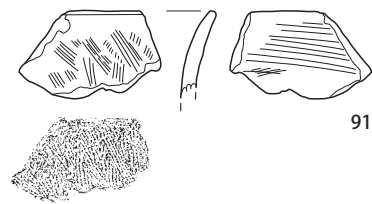
【SK49】



【SP32・33】

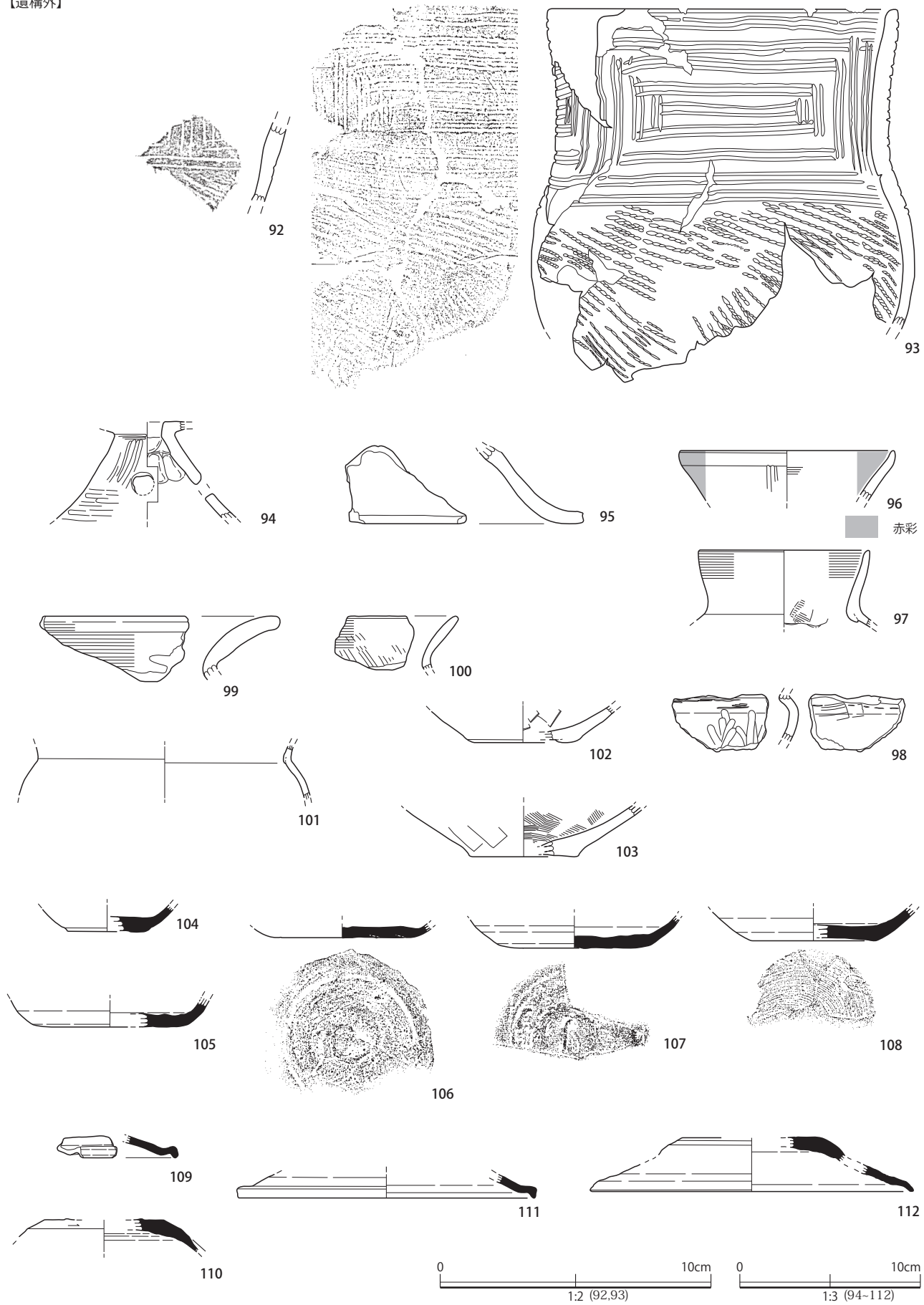


【SP42】



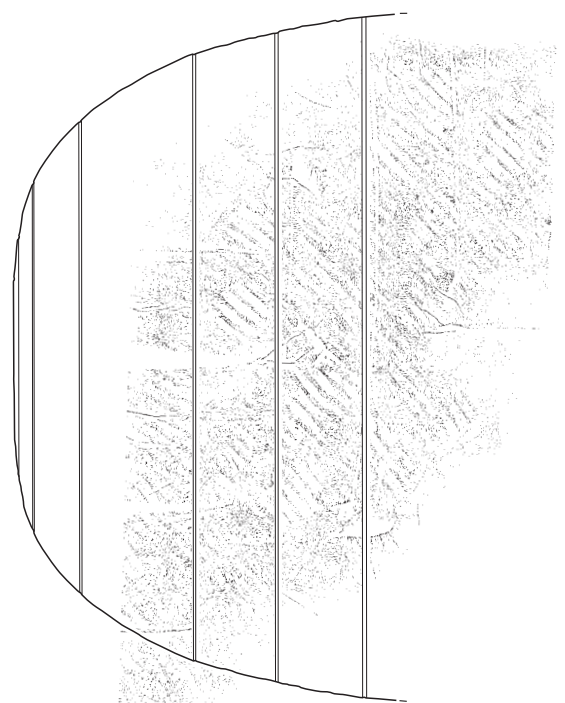
第 23 図 出土遺物 6 (SK45、SK49、SP32・33、SP42)

【遺構外】

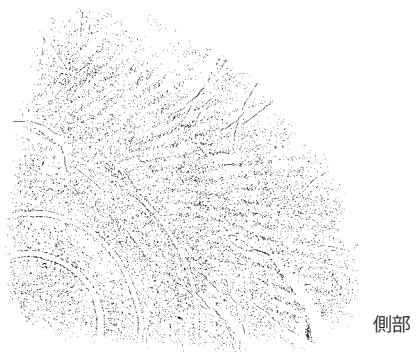


第 24 図 出土遺物 7 (遺構外出土遺物 1)

【遺構外】



113

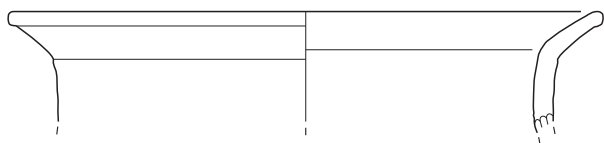


114

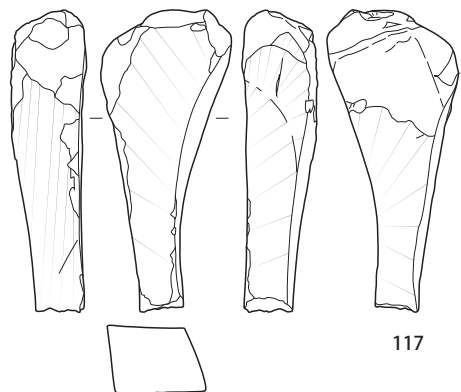


115

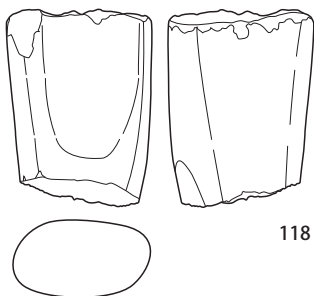
■ 黒色処理



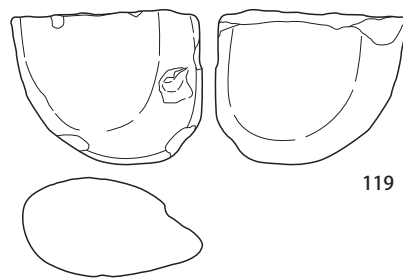
116



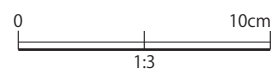
117



118



119



第 25 図 出土遺物 8 (遺構外出土遺物 2)

表2 出土遺物観察表1

単位：重さはgを記述 その他はmmで記述省略

番号	種別	器種	出土位置	残存	口径 長さ	底径 幅	器高 厚	器重 厚	備考
1	土師器	器台	SB3ED2	口縁～受部完形	180	-	<63>	5	装飾器台 受部に透穴5ヶ所
2	土師器	高坏 / 器台	SB3ED1	口縁部 1/8			<31>	4	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ
3	土師器	高坏 / 器台	SB3ED1	口縁部 1/8			<26>	4	外：赤彩 破損後被熱
4	土師器	高坏	SB3ED2	底部 1/4	-	-	<28>	6	外：ケズリ 粗雑なナデ 内：ハケメ 黒色 粘土塊付着
5	土師器	高坏	SB3ED1	完形	182	112	129	5	東海系高坏 透穴3ヶ所 穿孔1ヶ所 内面に擦痕
6	土師器	壺	SB3ED1	頸部 1/4			<35>	5	頸部径 (54mm)
7	土師器	壺	SB3ED1	肩部 1/8	-	-	<32>	4	楯描沈線区画に波状文、東海系加飾壺 赤く発色
8	土師器	壺	SB3EK3	口縁部 1/4	(132)		<25>	7	内外：ヨコナデ
9	土師器	壺	SB3	口縁～肩部 3/4	140	-	<62>	5	内外：ミガキ→ヨコナデ 方形区画内側中央より出土
10	土師器	甕	SB3ED1	口縁部 1/8	(194)	-	<32>	4	外：ヨコナデ ミガキ 内：ハケメ
11	土師器	甕	SB3ED1	頸～胴部 1/8	-	-	<54>	4	外：ハケメ 内：ヘラナデ、ナデ
12	土師器	甕	SB3ED1	胴部片			<86>	5	内外：ハケメ 残存胴径 (240mm)
13	土製品	ミニチュア	SB3	ほぼ完形	46	34	33	6	手捏ね 口唇部摩滅
14	石製品	磨石	SB3ED2	1/4 以下	<99>	<50>	<53>	374g	ホルンフェルス 円礫の縁辺に強い研磨痕
15	石製品	砥石	SB3ED1	完形	96	44	20	154g	泥岩 6面使用の板状砥石 線条痕
16	須恵器	坏	ST4	口縁部 1/8	-	-	<20>	4	内外：ロクロ
17	須恵器	坏	ST4	口縁 1/4	(133)	-	<21>	4	内外：ロクロ
18	須恵器	坏	ST4	口縁 1/8	(152)	-	<34>	3	内外：ロクロ
19	須恵器	坏	ST4	底部 1/4～口縁 1/8	(138)	(78)	29	4	内外：ロクロ 底：回転ヘラ→ナデ
20	須恵器	坏	ST4	口縁～底部 3/8	(138)	70	42	3	内外：ロクロ 底：回転ヘラ、渦巻状
21	須恵器	坏	ST4	口縁～底部 3/8	(140)	64	32	5	内外：ロクロ 底：回転糸切、墨書「鬼」
22	須恵器	坏	ST4	底部 3/4	-	68	<10>	4	内外：ロクロ 底：回転糸切 断面橙色
23	須恵器	蓋	ST4	口縁 1/4～鈕	(140)		25	3	頂部回転ケズリ 内側重ね焼き痕 鈕径 30mm
24	須恵器	長頸壺	ST4	口縁部 1/4	(120)	-	<20>	3	内外：ロクロ
25	須恵器	甕	ST4	頸部片			<49>	10	外：沈線区画に2段の楯描波状文
26	須恵器	甕	ST4	胴部片			<53>	11	外：タタキ 内：ナデ
27	須恵器	甕	ST4	胴部片			<25>	9	頸部付近 外：タタキ 内：同心円アテ具痕
28	須恵器	甕	ST4	胴部片			<60>	9	外：タタキ 内：同心円アテ具痕 焼成弱
29	須恵器	甕	ST4	胴部片			<59>	8	外：タタキ 内：同心円アテ具痕
30	須恵器	甕	ST4	胴部片			<61>	7	外：タタキ 内：同心円アテ具痕
31	土師器	甕	ST4	口縁部 1/8	-	-	<19>	8	内外：ナデ
32	土師器	甕	ST4	口縁部 1/8	-	-	<23>	7	内外：ナデ、摩耗
33	土師器	甕	ST4	底部 3/8	-	(68)	<17>	-	小型甕 内：指圧 底：木葉痕
34	土師器	甕	ST4	底部	-	66	<25>	-	底面半分は黒斑 内外：ナデ 底：ケズリ
35	土師器	高坏	ST4	脚部のみ			<90>	8	中実脚部のみ 径 36mm
36	土師器	壺	ST4 外	胴部 1/2			<100>	5	胴径 142mm 竪穴外 赤彩
37	土師器	甕	ST4	口縁部 1/8	-	-	<48>	7	口縁部小片、摩滅、剥落
38	土師器	甕	ST4 外	口縁部 1/2 弱	164		<42>	5	内外：ヨコナデ
39	土師器	甕類	ST4	頸部 1/4	-	-	<31>	4	内外：ハケメ→ナデ
40	土師器	甕	ST4	胴部 1/4			<129>	6	残胴径 (150mm) 外：ケズリ 内：ヘラナデ
41	土師器	甕類	ST4	胴部 1/8	-	-	<54>	6	外：ハケメ 内：ミガキ→ナデ
42	土師器	甕類	ST4	底部 1/2		(63)	<23>	4	外：ミガキ 内：ハケメ 底：ミガキ
43	土師器	甕	ST4 外	底部完形	-	62	<29>	5	外：ハケメ、被熱、摩耗 内：ナデ、指圧 底：摩耗
44	土師器	甕類	ST4	胴～底部 3/8		52	<83>	5	残胴径 (170mm) ケズリ、ハケメ 底：粗いケズリ
45	土師器	甕	ST5	口縁部 1/8			<45>	6	内外：ロクロ
46	須恵器	甕	ST5	胴部片			<36>	8	外：タタキ 内：同心円アテ具痕
47	土師器	甕	ST5	胴～底部 1/4		(110)	<112>	5	外：ケズリ 内：穿孔1ヶ所、ナデ、指圧、輪積痕
48	土師器	甕	ST5	口縁部 1/8			<43>	6	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ・ハケメ
49	土師器	甕	ST5	口縁部 1/8			<34>	5	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ナデ
50	土師器	壺	ST5	胴部片			<20>	7	外：ミガキ、黒色 内：ヘラナデ、ナデ
51	土師器	甕	ST5	底部 1/2		36	<9>		上げ底状の底部
52	土師器	鉢	ST7	口縁部 3/8	(95)		<29>	3	小型丸底鉢 外：ナデ、赤彩カ 内：ナデ、摩耗
53	土師器	壺	ST7	口縁部 3/8	(124)		<41>	6	内外：摩耗、破損後被熱
54	土師器	甕類	ST7	頸部～胴上半 1/4	-	-	<50>	5	残胴径 (208mm) 外：ハケメ 内：ハケメ、ヘラナデ
55	土師器	甕類	ST7	底部 1/2	-	50	<24>	9	外：ナデ 内：ハケメ 黒色 底：ナデ
56	土師器	甕	ST7	口縁～底部 5/8	170		198	5	胴径 180mm 内外：ヨコナデ、ハケメ 底：丸底
57	土師器	甕	ST7	口縁部 1/8	(140)		<55>	5	内外：ロクロ
58	土師器	壺	ST10	口縁部 1/8	-	-	<62>	10	二重口縁の大型壺 刻みのある棒状浮文を2対1組で貼付
59	土師器	甕	ST11	口縁部 1/8			<30>	6	内外：ハケメ→口縁部ナデ

表3 出土遺物観察表2

単位：重さはgを記述 その他はmmで記述省略

番号	種別	器種	出土位置	残存	口 長	径 さ	底 幅	器 厚	高 さ	器 重	厚 さ	備考
60	土師器	甕	ST11	口縁部 1/8					<32>	7		S字状口縁 胎土に石英、雲母多量
61	須恵器	坏	ST12P5	口縁部 1/4	(140)				<35>	4		内外：ロクロ
62	須恵器	坏	ST12	口縁～体部 1/8	(157)		-		<122>	5		大型品 内外：ロクロ
63	須恵器	蓋	ST12P4	口縁部 1/4	(148)				<22>	4		内外：ロクロ
64	須恵器	蓋	ST12P7	口縁部 1/8	(149)				<19>	4		内外：ロクロ
65	須恵器	甕類	ST12	底部 1/2			80		<17>	5		瓶か鉢 内外：ロクロ 底：回転ヘラ→ナデ
66	土師器	鉢	ST12P4	口縁～底部 1/8	(120)		(70)		60	4		小型品 内外：ロクロ 底：ケズリ
67	土師器	甕	ST12	胴部 1/4					<87>	6		残胴径(180mm) 外：ケズリ 内：カキメ、ハケメ
68	土師器	甕	ST12	胴部下位 3/8					<101>	10		底部板剥落 残胴径(155mm) 外：ケズリ 内：ハケメ
69	石製品	紡錘車	ST12	完形	48		43		10	16		凝灰質砂岩 表面に線状の工具痕が残る
70	弥生土器	鉢/高坏	ST12	胴部片					<36>	5		2本1組の沈線で施文
71	土師器	甕	ST17	口縁～胴部 1/4	(148)				<180>	5		未接合同一 胴径(192mm)
72	土師器	器台	SK36	脚部 1/2	-		(136)		<78>	6		透穴3ヶ所確認 内外：ハケメ
73	土師器	壺	SK36	胴～底部 3/8	-				<82>	4		胴径(120mm) 底：ハケメ、丸底
74	土師器	器台	SK45	脚上部	-		-		<37>	9		透穴3ヶ所確認 外：ハケメ、ナデ 内：ハケメ、ナデ
75	土師器	高坏	SK45	口縁部 1/8	-		-		<17>	4		外：ヨコナデ 内：赤彩
76	土師器	高坏	SK45	口縁部 1/4	(230)		-		<30>	4		内外：ミガキ
77	土師器	鉢/壺	SK45	底部 1/2	-		(54)		<13>	5		精製品 外：ミガキ 内：ハケメ 底：ミガキ
78	土師器	壺	SK45	口縁部 1/4	(150)		-		<49>	6		外：ハケメ→ナデ、摩耗 内：ナデ、摩耗
79	土師器	甕類	SK45	口縁部 1/8	-		-		<24>	6		壺か甕 内外：被熱、摩耗
80	土師器	甕	SK45	口縁部 1/8	-		-		<26>	6		内外：ハケメ、ナデ
81	土師器	甕	SK45	口縁部 1/8	-		-		<37>	6		82と類似 内外：ハケメ、ナデ
82	土師器	甕類	SK45	口縁部 1/8	-		-		<18>	6		81と類似 内外：ハケメ→ヨコナデ 内：ナデ、黒斑
83	土師器	甕類	SK45	頸部 1/8	-		-		<24>	5		鉢か甕 外：ハケメ 内：ナデ 破損後の被熱
84	土師器	甕	SK45	底部 3/8	-		(66)		<21>	5		外：ナデ、指圧 内：ナデ 底：粉痕2ヶ所
85	土師器	甕	SK45	口縁部 3/8	(150)		-		<45>	4		外：ヨコナデ、ハケメ 内：ナデ
86	土師器	甕	SK45	完形	178		52		234	5		胴径234mm 外面中～下位に煤 内外：ヨコナデ、ハケメ
87	土師器	甕	SK45	胴部 1/4	-		-		<212>	5		胴径(282mm) 未接合同一 煤付着多量
88	土師器	甕	SK45	胴部 1/2	-		44		<224>	6		胴径244mm 煤付着 底：碁笥底状で中央部兜巾
89	粘土塊		SK49		55		41		26	39g		スサ含む 3点あり
90	土師器	高坏	SP33+32	口縁部 3/8	(160)				<53>	3		外：ミガキ→端部ヨコナデ、赤彩 内：ヨコナデ、ナデ
91	土師器	甕類	SP42	口縁部 1/8					<30>	6		内外：ハケメ
92	弥生土器	甕	5486	胴部片					<29>	6		93と同一 2本1組の沈線で重四角文、下部に縄文
93	弥生土器	甕	5486	口縁～胴部 1/2	(130)				<138>	6		精製甕 胴径142mm 付着煤から炭素年代測定
94	土師器	器台	トレンチ一括	脚上部 3/4	-		-		<54>	5		透穴1ヶ所確認 長石粒多量
95	土師器	高坏/器台	5184	脚部 1/8	-		-		<42>	5		外：ミガキ→ナデ 内：ナデ
96	土師器	壺	トレンチ一括	口縁部 1/8	(120)		-		<28>	5		内外に赤彩
97	土師器	壺	4882	口縁部 1/2	(95)				<42>	5		短頸直口壺 内外：ハケメ→ヨコナデ
98	土師器	鉢	4379	頸部 1/8	-		-		<26>	5		外：ミガキ、ナデ 内：ナデ
99	土師器	甕	トレンチ一括	口縁部 1/8	-		-		<24>	6		外：ヨコナデ 内：破損後の被熱、煤付着
100	土師器	甕	5486	口縁部 1/8					<29>	5		外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ
101	土師器	甕	4882	頸部 1/4					<30>	4		内外：ナデ、摩耗
102	土師器	甕	4882	底部 1/4			(58)		<21>	4		外：ケズリ、摩耗 内：ヘラナデ
103	土師器	甕	4882	底部 1/4	-		(61)		<28>	5		外：ヘラナデ 内：ハケメ 黒色 底：ナデ
104	須恵器	坏	4882	底部 1/4			(30)		<15>	4		内外：ロクロ 底：回ヘラ
105	須恵器	坏	6089	底部 3/8			(88)		<16>	5		内外：ロクロ 底：回転ヘラ→ナデ
106	須恵器	坏	4882	底部 1/2	-		76		<8>	-		内外：ロクロ 底：回転ヘラ→ナデ 断面赤褐色
107	須恵器	坏	4882	底部 1/4	-		(86)		<19>	3		内外：ロクロ 底：回転ヘラ→ナデ
108	須恵器	坏	4882	底部 1/2	-		(70)		<17>	4		内外：ロクロ 底：回転糸切
109	須恵器	蓋	4983～5186	口縁部 1/8	-		-		<12>	3		内外：ロクロ、全面摩耗
110	須恵器	蓋	4882	頂部 1/4					<18>	5		頂部との稜が明確 外：回転ケズリ、ロクロ 内：ロクロ
111	須恵器	蓋	5989	口縁部 1/8	(166)		-		<13>	3		内外：ロクロ
112	須恵器	蓋	4882	口縁部 1/8	(180)				<30>	2		未接合同一 胴径(155mm) ロクロ、回転ケズリ 内面黒色
113	須恵器	横瓶	3876	胴部 1/4					<273>	6		外：カキメ、タタキ 内：指圧、ナデ、挽き絞りに閉塞痕
114	須恵器	甕	4882	胴部片					<79>	18		内外：ハケメ
115	土師器	甕類	4882	底部 1/8					<38>	6		鉢か甕 外：ケズリ 内：ミガキ、内黒 底：木葉痕
116	土師器	甕	4983～6090	口縁部 1/8	(236)		-		<48>	7		内外：ナデ、摩耗 ロクロ
117	石製品	砥石	5486	下端欠	<120>		52		30	167g		凝灰岩 4面使用の柱状砥石
118	礫		4882		<78>		58		36	220g		安山岩 分割後被熱
119	礫		4882		<61>		74		40	236g		安山岩 分割後被熱

V 理化学分析

1 2018 年度

(株) 加速器分析研究所

A 放射性炭素年代 (AMS 測定)

1 測定対象試料

山形県に所在する川前 2 遺跡第 5 次調査の測定対象試料は、遺構等から出土した炭化物 16 点と、土器付着炭化物 1 点の合計 17 点である (表 4)。土器付着炭化物は、土器の外面に付着した炭化物が土壤に転写された状態で、できる限り黒色部を集めて試料とした。土器付着炭化物試料 3 以外の 16 点の推定年代は古墳時代または平安時代である。試料 3 の炭化物付着の土器は弥生時代中期と考えられている。

2 化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

(2) 酸 - アルカリ - 酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。

(6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国立標準

局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

(1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表 4)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 4 に、補正していない値を参考値として表 5 に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 4 に、補正していない値を参考値として表 5 に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるた

め、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.3 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 5 に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

5 測定結果

測定結果を表 4～6 に示す。ST12 竪穴建物から出土した試料 2 点 (試料 1、2) の ^{14}C 年代は、試料 1 が $1230 \pm 20\text{yrBP}$ 、試料 2 が $1240 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 (1σ) は、試料 1 が $720 \sim 864\text{cal AD}$ の間に 4 つの範囲、試料 2 が $690 \sim 776\text{cal AD}$ の間に 2 つの範囲でそれぞれ示される。

第 24 図 93 の土器に付着した試料 3 の ^{14}C 年代は $2210 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 (1σ) は $358 \sim 208\text{cal BC}$ の間に 3 つの範囲で示される。

SK44 土坑から出土した試料 2 点 (試料 4、5) の ^{14}C 年代は、試料 4 が $2130 \pm 20\text{yrBP}$ 、試料 5 が $2140 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 (1σ) は、試料 4 が $199 \sim 112\text{cal BC}$ 、試料 5 が $203 \sim 112\text{cal BC}$ の間に各々 2 つの範囲で示される。

SK45 土坑から出土した試料 4 点 (試料 6～9) の ^{14}C 年代は、 $1870 \pm 20\text{yrBP}$ (試料 7) から $1740 \pm 20\text{yrBP}$ (試料 8) も間にある。暦年較正年代 (1σ) は、4 点のうち最も古い試料 7 が $84 \sim 209\text{cal AD}$ の間に 3 つの範囲、最も新しい試料 8 が $254 \sim 335\text{cal AD}$ の間に 2 つの範囲でそれぞれ示される。

SK37 土坑から出土した試料 10 の ^{14}C 年代は $1780 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 (1σ) は、 $218 \sim 323\text{cal}$

AD の間に 2 つの範囲で示される。

SB3ED1 溝から出土した試料 5 点 (試料 11～15) の ^{14}C 年代は、 $1870 \pm 20\text{yrBP}$ (試料 11) から $1780 \pm 20\text{yrBP}$ (試料 15) の間にある。暦年較正年代 (1σ) は、5 点のうち最も古い試料 11 が $85 \sim 209\text{cal AD}$ の間に 3 つの範囲、最も新しい試料 15 が $222 \sim 325\text{cal AD}$ の間に 2 つの範囲で示される。

SB3ED2 溝から出土した試料 2 点 (試料 16、17) の ^{14}C 年代は、試料 16 が $2200 \pm 30\text{yrBP}$ 、試料 17 が $1740 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 (1σ) は、試料 16 が $356 \sim 204\text{cal BC}$ 、試料 17 が $253 \sim 335\text{cal AD}$ の間に各々 2 つの範囲で示される。

試料の年代値は、全体としておおむね弥生時代中期頃から平安時代頃に相当し (佐原 2005、小林 2009)、推定年代よりもやや古いかおおむね一致する。土器付着炭化物試料 3 の年代値は弥生時代中期頃に相当し (小林 2009)、推定された年代と一致する結果となった。また、遺構ごとにおおむね近い年代を示したものが多い。

なお、試料 6～9、11～14 が含まれる 1～3 世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線 IntCal に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある (尾寄 2009、坂本 2010 など)。その日本産樹木のデータを用いてこれらの試料 8 点の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率は、試料 3 を除く 17 点で 44% を超えるおおむね適正な値である。試料 3 の炭素含有率は、37% と炭化物としてはやや低い値となった。この試料は土壌に付着した炭化物を採取したことから、土の混入が見られた。このため、測定された炭素の由来に若干注意を要するが、測定結果に影響するほどではないと考えられる。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. 2009, "Bayesian analysis of radiocarbon dates", *Radiocarbon*, Vol.51(1).
 Reimer, P.J. et al. 2013, "IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP", *Radiocarbon*, Vol.55(4).
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977, "Discussion: Reporting of ^{14}C data", *Radiocarbon*, Vol.19(3).
 尾寄大真 2009 「日本産樹木年輪試料の炭素 14 年代からみた弥生時代の実年代」『弥生時代の考古学 1』同成社
 小林謙一 2008 「縄文時代の暦年代」『縄文時代の考古学 2』同成社
 坂本稔 2010 「較正曲線と日本産樹木」『第 5 回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集』(株) 加速器分析研究所
 佐原真 2005 「日本考古学・日本歴史学の時代区分」『ドイツ展記念概説 日本の考古学』上巻 学生社

表4 2018年度分析試料一覧 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり			
						Libby Age (yrBP)		pMC (%)	
IAAA-182462	1	ST12EP4	炭化物	AAA	-13.95 ± 0.34	1,230 ± 20	85.83 ± 0.24		
IAAA-182463	2	ST12EP5	炭化物	AAA	-25.29 ± 0.39	1,240 ± 20	85.66 ± 0.24		
IAAA-182464	3	93 付着物	土器付着炭化物	AaA	-24.55 ± 0.28	2,210 ± 20	75.93 ± 0.23		
IAAA-182465	4	SK44 上層	炭化物	AAA	-27.07 ± 0.38	2,130 ± 20	76.73 ± 0.23		
IAAA-182466	5	SK44 下層	炭化物	AAA	-27.36 ± 0.29	2,140 ± 30	76.66 ± 0.25		
IAAA-182467	6	SK45	炭化物	AaA	-23.60 ± 0.32	1,750 ± 20	80.46 ± 0.23		
IAAA-182468	7	SK45	炭化物	AAA	-26.39 ± 0.29	1,870 ± 20	79.24 ± 0.23		
IAAA-182469	8	SK45 上層	炭化物	AAA	-26.48 ± 0.47	1,740 ± 20	80.53 ± 0.24		
IAAA-182470	9	SK45 下層	炭化物	AAA	-27.28 ± 0.47	1,830 ± 20	79.59 ± 0.24		
IAAA-182471	10	SK37 上層	炭化物	AaA	-27.77 ± 0.25	1,780 ± 20	80.08 ± 0.23		
IAAA-182472	11	SB3ED1	炭化物	AAA	-28.58 ± 0.36	1,870 ± 20	79.25 ± 0.22		
IAAA-182473	12	SB3ED1 中層	炭化物	AaA	-23.77 ± 0.41	1,850 ± 20	79.48 ± 0.22		
IAAA-182474	13	SB3ED1 下層	炭化物	AaA	-17.42 ± 0.33	1,790 ± 20	79.98 ± 0.23		
IAAA-182475	14	SB3ED1	炭化物	AAA	-26.94 ± 0.27	1,790 ± 20	79.99 ± 0.23		
IAAA-182476	15	SB3ED1	炭化物	AAA	-24.26 ± 0.29	1,780 ± 20	80.12 ± 0.25		
IAAA-182477	16	SB3ED2 1 出土付近	炭化物	AAA	-24.31 ± 0.26	2,200 ± 30	76.05 ± 0.24		
IAAA-182478	17	SB3ED2	炭化物	AAA	-26.69 ± 0.33	1,740 ± 20	80.52 ± 0.23		

表5 2018年度放射性炭素年代測定結果 1

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Libby Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-182462	1,050 ± 20	87.79 ± 0.24	1,227 ± 22	720cal AD - 741cal AD (18.0%)	694cal AD - 746cal AD (27.6%) 763cal AD - 881cal AD (67.8%)
				767cal AD - 778cal AD (10.6%)	
				791cal AD - 828cal AD (23.6%)	
				839cal AD - 864cal AD (16.0%)	
IAAA-182463	1,250 ± 20	85.61 ± 0.23	1,243 ± 22	690cal AD - 750cal AD (55.4%)	685cal AD - 779cal AD (75.1%) 790cal AD - 868cal AD (20.3%)
				761cal AD - 776cal AD (12.8%)	
IAAA-182464	2,200 ± 20	76.00 ± 0.23	2,212 ± 24	358cal BC - 349cal BC (6.3%)	364cal BC - 203cal BC (95.4%)
				316cal BC - 277cal BC (27.0%)	
				258cal BC - 208cal BC (34.9%)	
IAAA-182465	2,160 ± 20	76.40 ± 0.22	2,128 ± 23	199cal BC - 150cal BC (46.2%)	346cal BC - 321cal BC (4.9%) 206cal BC - 87cal BC (86.5%) 78cal BC - 57cal BC (4.0%)
				140cal BC - 112cal BC (22.0%)	
IAAA-182466	2,170 ± 30	76.29 ± 0.24	2,135 ± 25	203cal BC - 148cal BC (49.7%)	350cal BC - 310cal BC (11.5%) 210cal BC - 88cal BC (81.1%) 76cal BC - 58cal BC (2.8%)
				141cal BC - 112cal BC (18.5%)	
IAAA-182467	1,720 ± 20	80.69 ± 0.22	1,746 ± 23	251cal AD - 265cal AD (12.4%)	236cal AD - 356cal AD (92.6%) 366cal AD - 380cal AD (2.8%)
				272cal AD - 332cal AD (55.8%)	
IAAA-182468	1,890 ± 20	79.02 ± 0.22	1,869 ± 23	84cal AD - 142cal AD (51.2%)	78cal AD - 219cal AD (95.4%)
				155cal AD - 168cal AD (7.7%)	
				195cal AD - 209cal AD (9.3%)	
IAAA-182469	1,760 ± 20	80.29 ± 0.23	1,739 ± 23	254cal AD - 302cal AD (48.5%)	241cal AD - 358cal AD (90.6%) 365cal AD - 380cal AD (4.8%)
				315cal AD - 335cal AD (19.7%)	
IAAA-182470	1,870 ± 20	79.22 ± 0.22	1,834 ± 23	135cal AD - 214cal AD (68.2%)	125cal AD - 242cal AD (95.4%)
IAAA-182471	1,830 ± 20	79.63 ± 0.22	1,784 ± 23	218cal AD - 259cal AD (38.7%)	138cal AD - 200cal AD (16.2%) 206cal AD - 264cal AD (44.5%) 274cal AD - 330cal AD (34.7%)
				283cal AD - 323cal AD (29.5%)	
IAAA-182472	1,930 ± 20	78.67 ± 0.21	1,868 ± 22	85cal AD - 142cal AD (50.5%)	79cal AD - 219cal AD (95.4%)
				155cal AD - 168cal AD (8.0%)	
				195cal AD - 209cal AD (9.7%)	

表6 2018年度放射性炭素年代測定結果2

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Libby Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-182473	1,830 ± 20	79.68 ± 0.21	1,845 ± 22	131cal AD - 214cal AD (68.2%)	89cal AD - 102cal AD (3.1%) 123cal AD - 236cal AD (92.3%)
IAAA-182474	1,670 ± 20	81.23 ± 0.23	1,794 ± 23	145cal AD - 150cal AD (2.3%) 170cal AD - 194cal AD (12.7%) 211cal AD - 256cal AD (42.2%) 300cal AD - 318cal AD (11.0%)	135cal AD - 259cal AD (76.5%) 281cal AD - 324cal AD (18.9%)
IAAA-182475	1,830 ± 20	79.68 ± 0.23	1,793 ± 23	145cal AD - 150cal AD (2.1%) 170cal AD - 194cal AD (11.8%) 211cal AD - 257cal AD (41.6%) 298cal AD - 319cal AD (12.7%)	135cal AD - 260cal AD (75.0%) 280cal AD - 325cal AD (20.4%)
IAAA-182476	1,770 ± 20	80.24 ± 0.24	1,780 ± 24	222cal AD - 260cal AD (34.1%) 280cal AD - 325cal AD (34.1%)	140cal AD - 197cal AD (12.2%) 208cal AD - 333cal AD (83.2%)
IAAA-182477	2,190 ± 20	76.15 ± 0.23	2,199 ± 25	356cal BC - 286cal BC (46.8%) 234cal BC - 204cal BC (21.4%)	361cal BC - 197cal BC (95.4%)
IAAA-182478	1,770 ± 20	80.24 ± 0.22	1,740 ± 22	253cal AD - 303cal AD (48.7%) 314cal AD - 335cal AD (19.5%)	241cal AD - 358cal AD (91.2%) 365cal AD - 380cal AD (4.2%)

1 2019年度

パリーノ・サーヴェイ株式会社

A はじめに

本分析調査では、平地式建物と竪穴建物から出土した炭化物について放射性炭素年代測定を実施、遺構の年代観を得るとともに、平地式建物、土坑、竪穴住居から採取された土壌について植物珪酸体分析を実施し、植物利用、古植生について検討する。

試料

調査対象とした遺構は、調査区内の平地式建物や竪穴建物に伴う炉などである(表7)。このうち、古墳時代前期とされるSB3建物のED1溝の区画内側では、焼土や炭化物を含む土壌(塊状)が採取された。この中から、焼土を含む土壌より試料番号1と2、炭化物を含む土壌より試料番号3と4が採取された。なお、試料番号1と3は同じ塊より、それぞれ分離した。

同時期のSK44土坑では、炭化物を含む土壌より試料番号5、炭集中と下の土壌から試料番号6が採取された。

奈良・平安時代とされるST4竪穴建物では、炭化物を含む土壌より試料番号7と8が採取された。

同時期のST12竪穴建物では、EL15炉跡の下層に見られた少量の炭化物を含む土壌より試料番号9、北に隣接するEP6に見られた少量の炭化物を含む土壌より試

料番号10、炉北側の灰や少量の炭化物を含む土壌より試料番号11、EP4内の灰を含む土壌より試料番号12、EP5内の灰や焼土、炭化物を含む土壌より試料番号13、14が採取された。

放射性炭素年代測定では、炭化物を主体として7点(試料番号3、4、7、8、9、10、11)、植物珪酸体分析では焼土や灰を主体に7点(試料番号1、2、5、6、12、13、14)がそれぞれ選択された。

B 放射性炭素年代(AMS測定)

1 分析方法

試料は、炭化物の汚れた周囲をトリミングして0.1g程度に調整する。この段階で、今回の試料は測定可能な最小限量であったため、酸やアルカリに可溶性成分を除去すること無く、無処理で進めた。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置(NEC社製)を用いて、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、

国際原子力機関から提供される標準試料 (IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料 (IAEA-C1) の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma:68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いる較正曲線は Intcal13 (Reimer et al.2013) である。

2 結果

結果を表 8 に示す。

試料の保存状態は悪く、定法の処理が難しいために無処理で分析試料とした。炭素量は、年代測定に必要な最低限の量であった。

同位体補正を行った測定値は、試料番号 3 が $1865 \pm 20\text{BP}$ 、試料番号 4 が $1995 \pm 20\text{BP}$ 、試料番号 7 が $1185 \pm 20\text{BP}$ 、試料番号 8 が $1195 \pm 20\text{BP}$ 、試料番号 9 が $1355 \pm 20\text{BP}$ 、試料番号 10 が $1255 \pm 20\text{BP}$ 、試料番号 11 が $1185 \pm 20\text{BP}$ である。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期 (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。ソフトウエアは、Oxcal4.3 (Bronk,2009) を用いる。2 σ の値は、試料番号 3 が cal AD83 ~ 220、試料番号 4 が cal AD43 ~ 54、試料番号 7 が cal AD773 ~ 889、試料番号 8 が cal AD771 ~ 887、試料番号 9 が cal AD645 ~ 684、試料番号 10 が cal AD679 ~ 856、試料番号 11 が cal AD773 ~ 889 である。

3 考察

SB3 建物の内側区画から得られた炭化物の放射性炭素年代は、暦年較正により 1 ~ 3 世紀の値を示した。調査所見からは、古墳時代前期が想定されている。今回の測定結果は、調査所見よりも古いものとなった。この要因として、古い炭素が混入していた中で必要量の炭素を得るために無処理であったため、古い炭素の影響を受けたことが可能性の 1 つとして挙げられる。今回の結果

については、遺構の埋積状態や炭化物の混入状況を含めて検討する必要がある。

ST4 竪穴建物の炭化物 2 点は、いずれも暦年較正により 9 世紀前後の年代を示した。また、ST12 竪穴建物の炭化物 3 点も同様の年代を示し、7 ~ 9 世紀であった。これらの値についても、今後さらに遺構の埋積状態や炭化物の混入状況を含めて検討する必要がある。

C 植物珪酸体分析

1 分析方法

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム, 比重 2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プレパラートで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を、近藤 (2010) の分類を参考に同定し、計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土 1g あたりの植物珪酸体含量 (同定した数を乾土 1g あたりの個数に換算) を求める。

また今回は、珪化組織片の産状にも注目している。植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離し単体となる。しかし、植物が燃えた後の灰や炭化物 (特にイネ科) には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い (例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社 1993)。そのため、珪化組織片の産状により当時の構築材や燃料材などの種類が明らかになると考えられる。

結果は、植物珪酸体含量と珪化組織片の一覧表で示す。その際、100 個 /g 未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸め (100 単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量や珪化組織片の産状を図示する。

2 結 果

結果を表9、第26図に示す。

調査した7点のうち、ST12 竪穴建物以外では植物珪酸体を含む珪化組織片が検出されない。ST12 竪穴建物では、特に試料番号13と14で数多く検出される。

ST12 竪穴建物の試料番号12では、栽培植物であるイネ属の籾殻（穎）に形成される穎珪酸体や葉部の短細胞列が検出される。試料番号13では、ススキ属の短細胞列や不明組織片が非常に多く検出され、ススキ属の機動細胞列やイネ属の短細胞列も見られる。試料番号14でも試料番号13と同様に不明組織片が非常に多いが、イネ属の穎珪酸体や短細胞列も多く見られ、イネ属の機動細胞列も検出される。

また各試料からは単体の植物珪酸体も検出され、保存状態は概ね良好である。SB3 建物の試料番号1や2、SK44 土坑の試料番号5や6ではヨシ属の産出が目立ち、クマザサ属を含むタケ亜科なども見られる。ST12 竪穴建物の試料でも同様にヨシ属の産出が目立つが、珪化組織片で多く検出されたイネ属やススキ属の含量も多い。

この他にイネ科起源（棒状珪酸体、長細胞起源、毛細胞起源）も検出される。また、各試料から珪藻化石も認められる。

3 考 察

試料番号1、2のSB3 建物の焼土や炭化物には、珪化組織片が検出されず、燃料材（特にイネ科植物）の種類を特定することは難しい。試料番号5、6のSK44 土坑土坑についても、炭化物を含む土壌や炭集中と下の土壌で珪化組織片が検出されず、燃料材の特定には至らない。

なお、各遺構試料では単体で検出された植物珪酸体の

分類群としてヨシ属やタケ亜科などが認められ、これらのイネ科植物が生育していたと考えられる。遺構が周辺の土壌により埋積されたものであれば、湿潤な場所に生育するヨシ属の産出が目立ったことから、周辺に湿潤な場所が存在したことがうかがえる。

ST12 竪穴建物では、採取場所により珪化組織片の産出が異なった。試料番号13のEP5内の土壌からはススキ属の短細胞列が数多く検出されたことから、ススキ属の植物体が燃料材の1つとして利用された可能性が挙げられる。ススキ属は草原など乾いた場所に生育し、集落周辺にも生育することから、手に入れやすいものだったと考えられる。なお不明組織片も多いことから、他のイネ科も利用されていた可能性がある。また、同じEP5内でも試料番号14からは、イネ属の穎珪酸体や短細胞列が多く見られ、稲籾殻や稲藁が利用されていた可能性が高い。イネ属の植物体は、コメの収穫後に容易に入手でき、古くから燃料材などの生活資材として利用されている。ただし、不明組織片も多いことから、試料番号13と同様に他のイネ科も利用されていたと思われる。試料番号12のEP4内の土壌でもイネ属の穎珪酸体や短細胞列が検出されており、燃料材の1つとして少なくともイネの植物体が利用されていたと考えられる。場所により燃料材が違う要因については現段階では明確にならないが、灰や炭化物の出土状況や遺構の埋積状態を含めて検討する必要がある。

なおST12 竪穴建物では単体の植物珪酸体でヨシ属の産出が目立った。遺構内が周囲の土壌で埋積されていたとすれば、ST12 竪穴建物の周辺にもヨシ属が生育するような湿潤な場所が存在したと思われる。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. 2009, "Bayesian analysis of radiocarbon dates", *Radiocarbon*, Vol.51(1).
 Reimer, P.J. et al. 2013, "IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP", *Radiocarbon*, Vol.55(4).
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977, "Discussion: Reporting of ^{14}C data", *Radiocarbon*, Vol.19(3).
 近藤鍊三 2010『プラント・オパール図譜』北海道大学出版会
 パリノ・サーヴェイ株式会社 1993「自然科学分析からみた人々の生活（1）」『湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論』慶應義塾

表7 2019年度分析試料一覧

試料番号	採取場所	考古学的年代観	種類	状態 (形状)	備考	項目	
						¹⁴ C	Po
1	SB3ED1 溝区画内側	古墳時代前期	土壌	塊状	焼土や炭化物を含む 3 と同じ塊より採取		●
2	SB3ED1 溝区画内側	古墳時代前期	土壌	塊状	焼土が目立つ		●
3	SB3ED1 溝区画内側	古墳時代前期	土壌	塊状	焼土や炭化物を含む 1 と同じ塊より採取		●
4	SB3ED1 溝区画内側	古墳時代前期	土壌	塊状	焼土や炭化物を含む		●
5	SK44 土坑	古墳時代前期	土壌	塊状、粒状	炭化物を含む		●
6	SK44 土坑	古墳時代前期	土壌	塊状	炭化物を含む (炭集中と下の土壌)		●
7	ST4 竪穴建物跡	奈良・平安時代	土壌	塊状	炭化物を含む		●
8	ST4 竪穴建物跡	奈良・平安時代	土壌	塊状	炭化物を含む		●
9	ST12 竪穴建物跡 EL15	奈良・平安時代	土壌	塊状、粒状	炭化物 (少量) を含む		●
10	ST12 竪穴建物跡 EP6	奈良・平安時代	土壌	塊状	炭化物 (少量) を含む		●
11	ST12 竪穴建物跡覆土	奈良・平安時代	土壌	塊状	炭化物 (少量) を含む		●
12	ST12 竪穴建物跡 EP4	奈良・平安時代	土壌	塊状、粒状	灰を含む		●
13	ST12 竪穴建物跡 EP5	奈良・平安時代	土壌	塊状	灰・焼土・炭化物を含む		●
14	ST12 竪穴建物跡 EP5	奈良・平安時代	土壌	塊状	灰がほとんど (焼土や炭を含む)		●
						分析点数	7

¹⁴C: 放射性炭素年代測定, Po: 植物珪酸体分析

表8 2019 放射性炭素年代測定結果

試料 (遺構)	性状	分析方法	補正年代 (暦年較正用) BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代								Code No.			
					年代値										確率	
					1 σ	cal AD	89 -	cal AD	103	1861 -	1847	cal BP				0.109
3 (SB3)	炭化物	無処理	1,865 ± 20 (1,863 ± 20)	-21.63 ± 0.27	1 σ	cal AD	89 -	cal AD	103	1861 -	1847	cal BP	0.109	pal-12462	YU-10922	
						cal AD	122 -	cal AD	174	1828 -	1776	cal BP	0.425			
						cal AD	192 -	cal AD	211	1758 -	1739	cal BP	0.148			
4 (SB3)	炭化物	無処理	1,995 ± 20 (1,995 ± 20)	-27.86 ± 0.40	1 σ	cal BC	37 -	cal BC	30	1986 -	1979	cal BP	0.087	pal-12463	YU-10923	
						cal BC	22 -	cal BC	11	1971 -	1960	cal BP	0.145			
						cal BC	2 -	cal AD	26	1951 -	1924	cal BP	0.408			
7 (ST4)	炭化物	無処理	1,185 ± 20 (1,187 ± 20)	-40.53 ± 0.32	1 σ	cal AD	778 -	cal AD	792	1172 -	1158	cal BP	0.126	pal-12464	YU-10924	
						cal AD	808 -	cal AD	843	1142 -	1107	cal BP	0.345			
						cal AD	857 -	cal AD	881	1093 -	1069	cal BP	0.210			
8 (ST4)	炭化物	無処理	1,195 ± 20 (1,196 ± 20)	-26.62 ± 0.36	1 σ	cal AD	789 -	cal AD	869	1161 -	1081	cal BP	0.490	pal-12544	YU-11123	
						2 σ	cal AD	771 -	cal AD	887	1179 -	1063	cal BP			0.954
						2 σ	cal AD	771 -	cal AD	887	1179 -	1063	cal BP			0.954
9 (ST12)	炭化物	無処理	1,355 ± 20 (1,354 ± 20)	-24.19 ± 0.29	1 σ	cal AD	653 -	cal AD	670	1297 -	1280	cal BP	0.682	pal-12466	YU-10926	
						2 σ	cal AD	645 -	cal AD	684	1305 -	1266	cal BP			0.954
						2 σ	cal AD	645 -	cal AD	684	1305 -	1266	cal BP			0.954
10 (ST12)	炭化物	無処理	1,255 ± 20 (1,254 ± 20)	-36.10 ± 0.43	1 σ	cal AD	696 -	cal AD	700	1254 -	1250	cal BP	0.054	pal-12467	YU-10927	
						cal AD	710 -	cal AD	746	1240 -	1204	cal BP	0.536			
						cal AD	764 -	cal AD	771	1186 -	1179	cal BP	0.093			
					2 σ	cal AD	676 -	cal AD	778	1274 -	1172	cal BP	0.930			
						cal AD	792 -	cal AD	802	1158 -	1148	cal BP	0.012			
						cal AD	843 -	cal AD	856	1107 -	1094	cal BP	0.012			
11 (ST12)	炭化物	無処理	1,185 ± 20 (1,186 ± 20)	-25.59 ± 0.34	1 σ	cal AD	778 -	cal AD	792	1172 -	1158	cal BP	0.128	pal-12468	YU-10928	
						cal AD	803 -	cal AD	843	1147 -	1107	cal BP	0.343			
						cal AD	857 -	cal AD	881	1093 -	1069	cal BP	0.211			
					2 σ	cal AD	773 -	cal AD	889	1177 -	1061	cal BP	0.954			

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5,568 年を使用。

2) yrBP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

4) AAA は酸-アルカリ-酸処理、AaA はアルカリの濃度を薄くした処理、HCl は塩酸処理、Edg はエッジング処理、CoEx はコラーゲン抽出処理を示す。

5) 暦年の計算には、Oxcal4.3 を使用。

6) 暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。

7) 1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。

8) 統計的に真の値が入る確率は 1 σ は 68%、2 σ は 95% である。

表9 植物珪酸体含有量と珪化組織片の産状 (個/g)

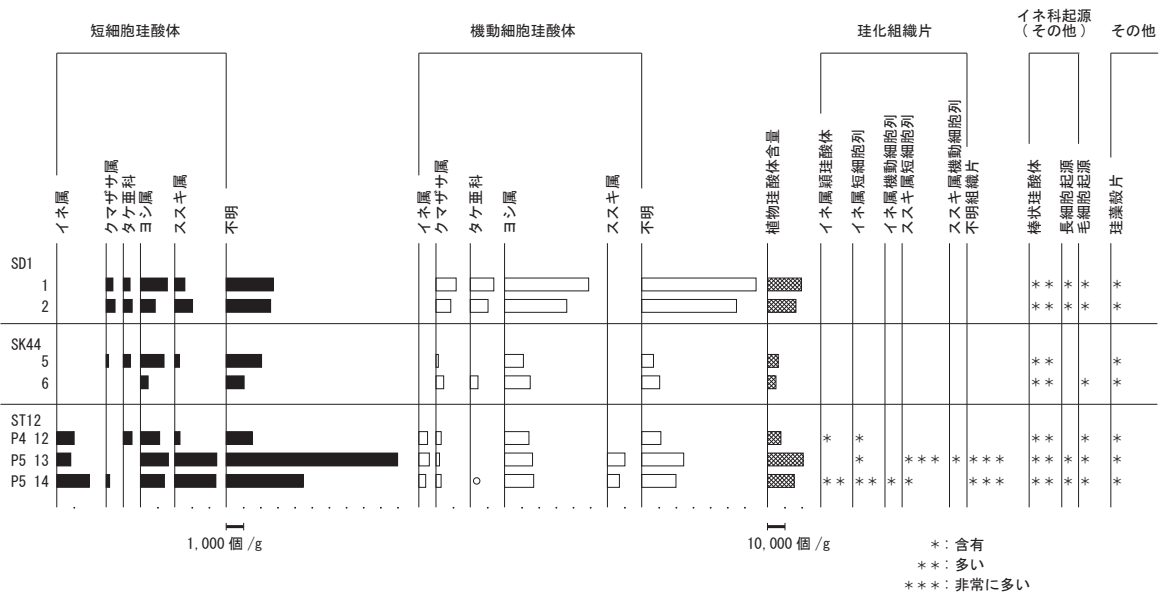
分類群	SB3		SK44		ST12		
	1	2	5	6	EP4 12	EP5 13	14
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ属	-	-	-	-	1,000	800	1,900
クマザサ属	400	500	100	-	-	-	200
タケ亜科	400	500	400	-	500	-	-
ヨシ属	1,600	900	1,400	400	1,100	1,600	1,400
ススキ属	600	1,000	300	-	300	2,400	2,400
不明	2,700	2,600	2,100	1,000	1,500	10,000	4,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ属	-	-	-	-	500	600	400
クマザサ属	1,200	900	100	400	300	200	300
タケ亜科	1,400	1,000	-	400	-	-	<100
ヨシ属	4,900	3,600	1,100	1,500	1,400	1,600	1,700
ススキ属	-	-	-	-	-	1,000	700
不明	6,700	5,500	700	1,000	1,100	2,400	2,000
合計							
イネ科葉部短細胞珪酸体	5,700	5,500	4,300	1,500	4,500	14,900	10,400
イネ科葉身機動細胞珪酸体	14,100	11,100	1,900	3,400	3,400	5,900	5,200
植物珪酸体含量	19,800	16,600	6,200	4,900	7,900	20,800	15,600
珪化組織片							
イネ属穎珪酸体	-	-	-	-	*	-	**
イネ属短細胞列	-	-	-	-	*	*	**
イネ属機動細胞列	-	-	-	-	-	-	*
ススキ属短細胞列	-	-	-	-	-	***	*
ススキ属機動細胞列	-	-	-	-	-	*	-
不明組織片	-	-	-	-	-	***	***
イネ科起源(その他)							
棒状珪酸体	**	**	**	**	**	**	**
長細胞起源	*	*	-	-	-	*	*
毛細胞起源	*	*	-	*	*	*	*
その他							
珪藻殻片	*	*	*	*	*	*	*

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)

合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている

<100:100個/g未満

-:未検出,* :含有,** :多い,*** :非常に多い



乾土 1gあたりの個数で示す。○は100個未満を定性的に示す。

第26図 植物珪酸体含有量

3 小 括

2018年と2019年に実施した放射性炭素年代の測定試料について、遺構ごとに合計数をみると、SB3建物で9点、ST4 竪穴建物で2点、ST12 竪穴建物で5点、SK37 土坑で1点、SK44 土坑で2点、SK45 土坑で4点を分析している。これらから得られた炭素測定値の較正年代については、本文の執筆段階で分析時よりも新しい較正曲線 IntCal20 (Reimer et al.2020) が公開されているため、ここで入力し直している。この結果をまとめたものが、第30図である。これをみると測定値の分布は大きく3つのグループに分かれる。第1グループは紀元前のもの、第2グループは紀元前後から4世紀台のもの、第3グループは7世紀から9世紀のものとなる。ここでは、これらが示す分布の差を、どのように読み解けばよいのかを考えてみたい。

第1グループ (第28図)

第1グループの値を示す試料は、第24図93の土器付着物(2018-3)、SK44土坑に含まれる炭化材2点(2018-4・5)、SB3の外側の周溝から出土した炭化物(2018-16)の計4点である。このグループの較正年代値は、紀元前4世紀中頃から前1世紀中頃までの範囲が与えられている。しかし、この時期については、較正曲線がフラットな時期であり、多くの測定年代が重なってしまうため注意が必要と思われる。

2018-3の較正年代値は375(95.4%)197cal BCを示す。この試料は弥生時代中期後半の平行沈線文系の土器に付着した炭化物である。この土器と類似したものは、県内南陽市の百刈田遺跡SH906出土土器などに求めることができる。この遺跡の土器も付着炭化物から炭素年代測定を実施しており、2018-3と近似した値を示している(山形埋文2010)。とはいえ、この実年代値は、そのまま受け入れ難いものであろう。炭素年代研究者からは、近畿地方の同時期の年代として、ウィグルマッチ法の成果などから、前100年代～前1世紀という年代が提示されており(今村ほか2007)、本試料の年代もそれに類するものとなろう。

SK44土坑からの試料は、覆土の上層と下層から採られたものであるが、両者とも近似した値を示している。較正年代は2 σ で3つの分布がみられ、もっとも確

率の高いもので205(74.2%)89cal BCを示す。SK44土坑からは時期判断可能な遺物が出土していないものの、2018-3よりも新しい値を示し、まとまっていることから、時期的には異なるものを想定できるかもしれない。

2018-16は、SB3建物の外側のED2溝から出土した装飾器台(第18図1)の下から得られた炭化物である。較正年代は2 σ で361(95.4%)176cal BCを示しており、先の弥生時代中期後半の土器の付着物と近い値である。しかし、土器の年代は古墳時代前期のものであり、年代観には開きがある。SB3建物から採取された試料9点のうち、これだけが突出して古い値といえるので、エラーとして扱えるかもしれない。

第2グループ (第29図)

第2グループの値を示す試料は、SK45土坑の覆土から4点(2018-6～9)、SK37土坑の覆土(2018-10)、SB3建物からは8点あり、試料採取場所の内訳は区画内側の地山から2点(2019-3・4)、SB3ED1溝の覆土5点(2018-11～15)、SB3ED2溝の覆土(2018-17)である。このグループの較正年代値は、概ね2世紀前半から4世紀後半までの範囲が与えられている。この範疇のものは、分析段階の較正曲線(IntCal13)との差が大きいため注意を要する。

例外的な値を示すのがSB3建物の内側から採取した2019-4であり44cal BC(95.4%)77cal ADを示す。

それ以外は、第2グループの範囲内で、更に分布は3つに分かれる傾向がみられる。それぞれ2-A、2-B、2-Cとしよう。2-Aは、2世紀前葉から3世紀中葉までを示すもので、2018-7・9・11・12、2019-3らがそれにあたる。2-Bは、3世紀中葉から4世紀中葉に2つのピークをもつもので2018-10・13・14・15にみられる。2-Cは、3世紀中葉から4世紀後葉のもので2018-6・8・17らである。これらは遺構ごとに分かれるものではなく、SK45土坑では2-Aが2点、2-Cが2点あり、SB3建物では2-Aが3点、2-Bが3点、2-Cが1点みられる。これは遺構の存続期間ともみれるだろうか。SK45土坑やSB3建物は多くの遺物が得られており、古墳時代前期前葉のもと考えられる。遺物だけでなく、測定値の分布も類似することから、両者は時期的に近いものと考えられるかもしれない。

SK37土坑からは出土遺物が少ないものの、SK45土

坑やSB3 建物と類似する測定値から、多少の前後はあるにせよ、同様の古墳時代前期が推定される。

本グループ全体として、較正年代の示す幅の中に従来考えられている古墳時代前期の実年代は含まれてはいない。しかし、その数値が示す幅が広過ぎるため、これを根拠にした年代の特定や細分は困難である。

第3グループ (第27図)

グループ3の範疇に収まるものは、ST4 竪穴建物とST12 竪穴建物の2つの遺構から採取した試料に限られる。竪穴の中央部に炉を持つST12 竪穴建物は、周辺の竪穴建物と同じ、古墳時代前期のもののように思われる。しかし、ST4 (2019-7・8) とST12の一部(2018-1・2、2019-11)からは、8世紀後半から9世紀後半といった較正年代が得られている。これは両遺構からの出土遺物とも整合的な結果であることから、これらは古代の竪穴建物と判断できる。

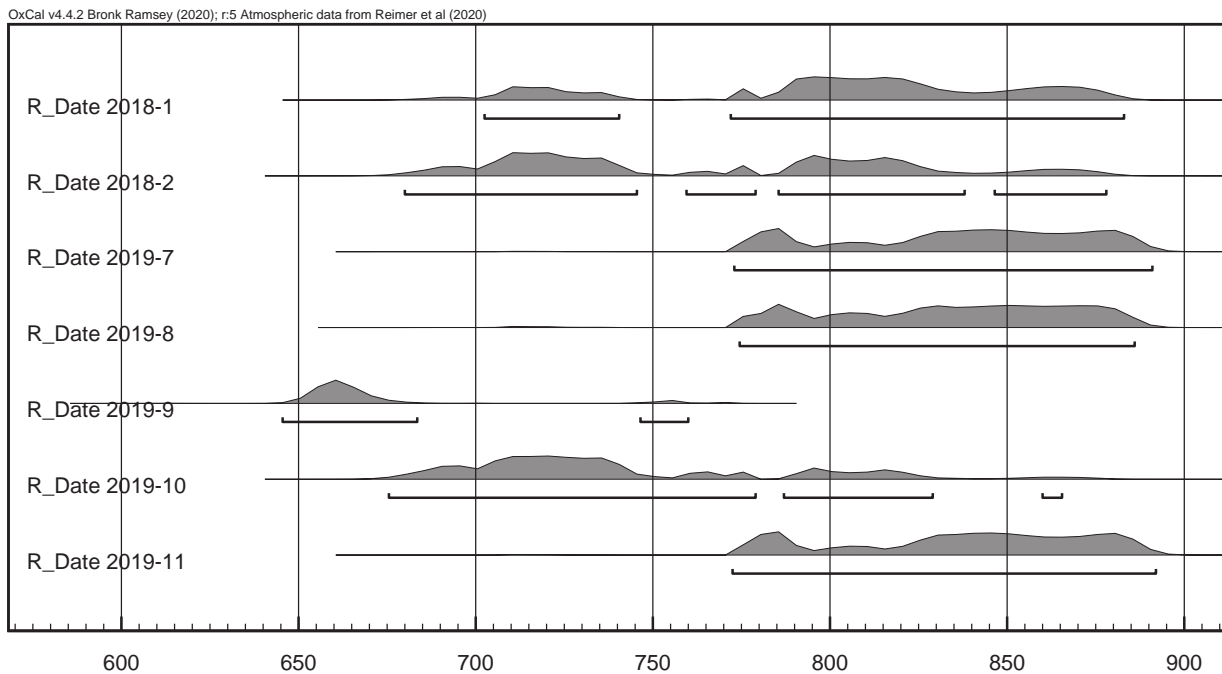
例外的な結果を示すものとして、ST12 竪穴建物の炉跡EL15からの試料(2019-9)や、それに隣接するピットEP6からの試料(2019-10)の較正年代は、前者で7世紀中葉から後葉、後者で7世紀後葉から8世紀後葉

という較正年代を得ている。ST12 竪穴建物は回転糸切りで平底の須恵器片が出土しており、7世紀とするのは、考古学的な年代観とは大きくずれたものである。ただし、同様のずれがみられることは少なくない。例えば村山市の清水遺跡では(山形埋文2020)、9世紀中から後葉と考えられる遺物が得られている1ST365 竪穴建物の炭素年代測定値は、7世紀前～中葉を示す(測定番号IAAA-150495)。上層に915年の十和田火山灰、下層に9世紀中葉の須恵器片が大量に出土している1SD186溝の測定値は7世紀後葉から8世紀後葉を示す(IAAA-150491)。このような事例は他県でも相当数確認できる。この遺物年代と測定値のずれをどのように捉えるかは今後の課題である。

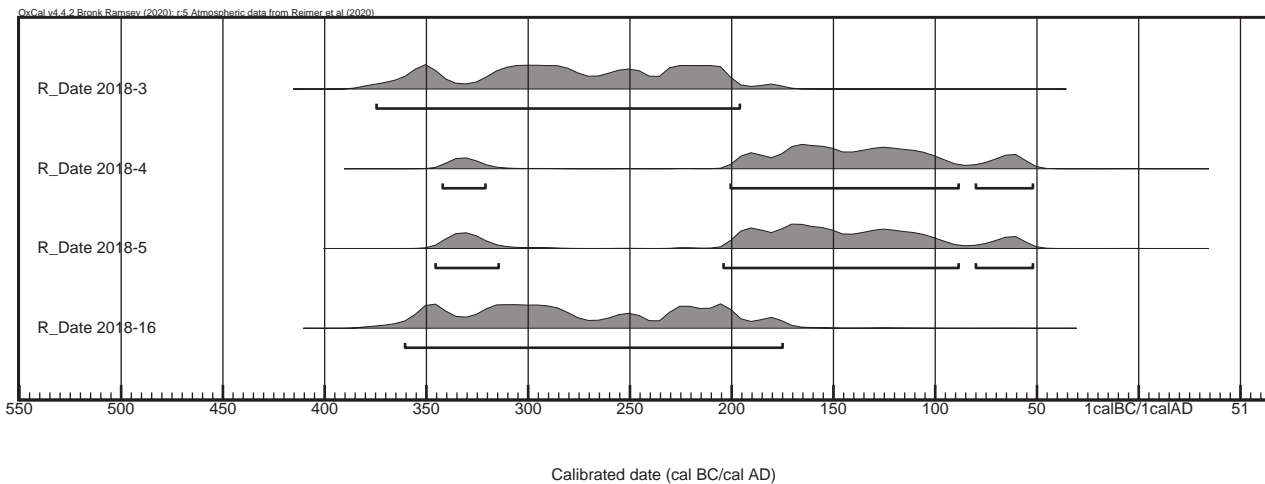
また、8世紀後葉から9世紀後葉にかけては、較正曲線がフラットなため、多くの測定結果が集約しがちである。山形県においてはこの時期に遺跡数が急増するため炭素年代による細分が期待できるかもしれない。しかし、現在の較正曲線ではそれは難しい。分析するには内容を精査し、目的を定めて実施することが必要と思われる。

参考文献

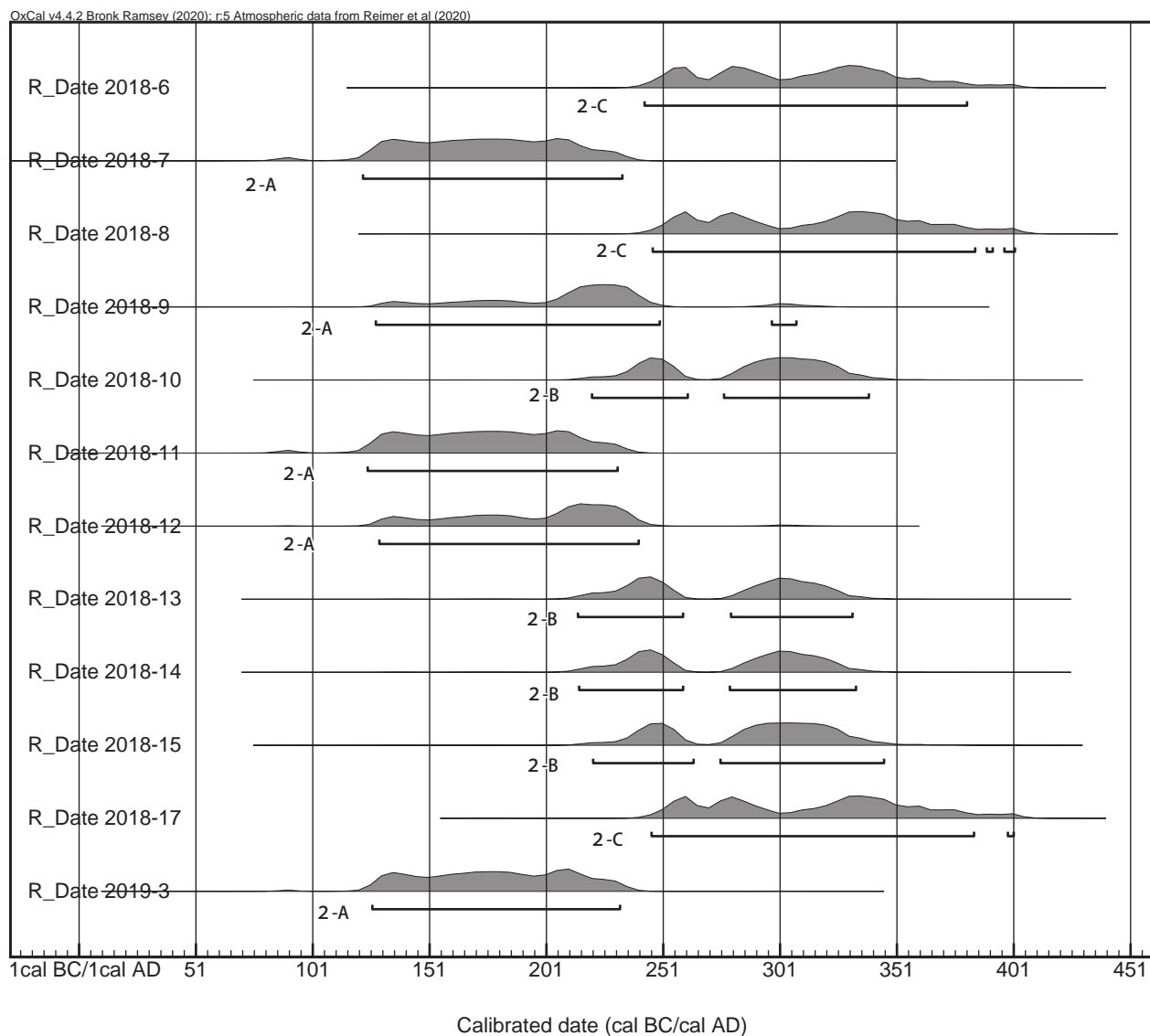
Reimer et al. 2020, "The IntCal20 Northern Hemisphere Radiocarbon Age Calibration Curve (0-55 cal kBP)", *Radiocarbon*, Vol.62(4).
 今村峰雄ほか 2007 「日本考古学協会第73回総会参加」『弥生農耕の起源と東アジア』ニュースレター No.8
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2010『百刈田遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第184集
 公益財団法人山形県埋蔵文化財センター 2020『清水遺跡第1～7・9次調査』(第1分冊)山形県埋蔵文化財センター調査報告書第238集



第27図 第3グループの較正年代

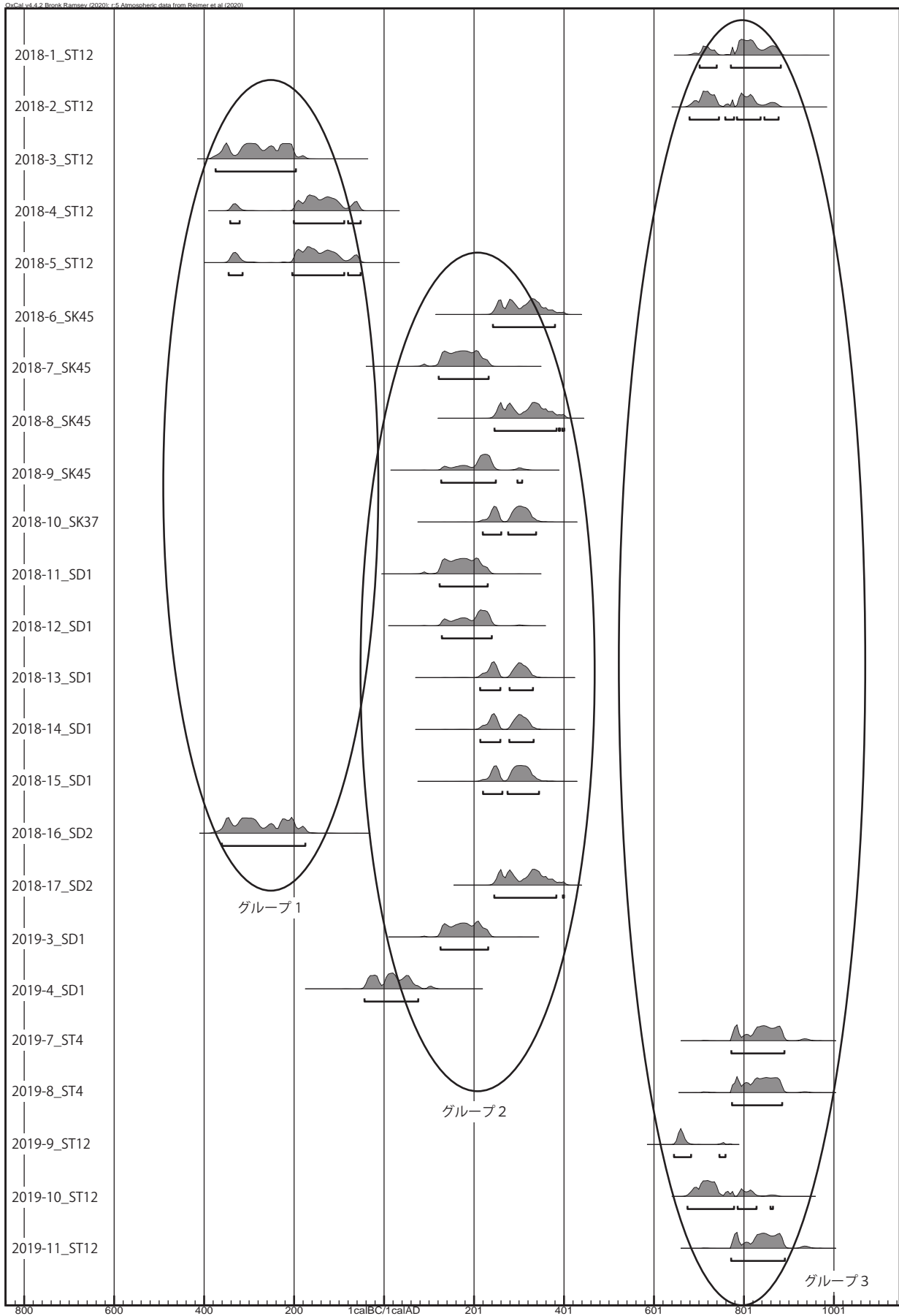


第 28 図 第 1 グループの較正年代



2019-4 は除く

第 29 図 第 2 グループの較正年代



第 30 図 2018・2019 年度分析試料較正年代一覧

VI まとめ

1 古墳時代の川前2遺跡について

川前2遺跡の第1～4次調査は、同じ事業範囲を4か年に分けて調査したものである。第1・2次調査は、上層を南北に分けて2002・2003年度に調査し、第3・4次調査は、下層を南北に分けて2007・2008年度に調査している。これらの調査成果は既に刊行済みではあるが（山形埋文2011・2012b）、改めて今回の第5次調査に関連する古墳時代前期のものを抜き出し、川前2遺跡全体で当該期の様相を把握したい。

調査区の基本土層は、黄色と黒色のシルト層が互層状に堆積するもので、洪水による堆積と、地表の土壌化をくり返した結果と考えられる。遺構確認面は、第1・2次調査の上層で92.5～93.3m、第3・4次調査の下層で92～92.5mを測る。今回の第5次調査は、第3・4次調査よりも若干低い、91.8～92.4mで遺構を確認している。調査区内には古墳時代前期と古墳時代後期から平安時代までの遺構が検出しているが、これらの時期差が検出層位に明確に対応しているわけではない。その理由のひとつは、土層の堆積が調査区内で一定ではないことが挙げられる。これは旧地形が水平ではなかったことが考えられ、洪水堆積層が厚く堆積する場所もあれば、その反対もある。よって調査段階で水平に表土を掘削すると、同じレベルの確認面で時期差が生じるというものである。もうひとつは、遺構検出時の色調変化が乏しいため、検出面が下がりがちという問題である。低地での調査には共通する問題ではあるが、特にこの須川沿いの調査区は、検出面が複数の堆積層からなるため、何を客土とするのかの判断が複雑となる。結果、竪穴建物上面での検出が困難であり、床面近くでの遺物の出土をもって判断される場合が少なくない。

A 遺構について

このような検出条件下で古墳時代前期の竪穴建物は、第1・2次の上層調査でも4棟ほどみられ、一部は第3・4次の下層調査時に新しく番号をつけ直されている。

第1次調査ではST8の1棟。第2次調査でのST595とST707の2棟は、第4次調査でそれぞれST229とST216と振り替えされているので、ここではカウントしない。それ以外にST622、ST628、ST703の3棟がある。

第3・4次の下層調査では遺物の出土から古墳時代前期と考えられる竪穴建物が15棟検出している。第3次調査ではST16、ST18、ST19、ST49、ST94、ST161の6棟。第4次調査ではST186、ST190、ST192、ST193、ST200、ST211、ST216（＝第2次調査ST707）、ST229（＝第2次調査ST595）、ST230の9棟である。これに今回の第5次調査で検出された5棟を加えると、遺跡全体で古墳時代前期の竪穴建物は24棟を数える。

第1～4次調査検出の竪穴建物の多くは、ほぼ床面での検出であり、周溝や掘方をもって検出されているものも少なくない。全形を検出、推測できるものは、7棟ほどあり、長軸で5～8m強ほどを測る。多くは方形で、長軸と短軸に大きな差をもつものや、不整形なものはない。炉跡は焼土の検出のみで不明瞭なものも含まれるが、ほとんどのもので確認される。柱穴はST19、ST161、ST186、ST216、ST229などで規格的な配列と掘り込みが検出されている。前回の報告でも触れられているが、方形の掘方を有する貯蔵穴がST186、ST200、ST229らで確認されている。これは天童市の高嶺南遺跡ST211で検出しているものと類似する。ST211の貯蔵穴は上面に炭化材が残存しており、蓋と考えられている（山形埋文2004b）。川前2遺跡と直線距離で2.5kmしか離れていないため、関連性をうかがわせる資料である。

一方、第5次調査で検出した5棟の竪穴建物をみると、1辺2mほどしかないST10は小さ過ぎ、9mを越えても立ち上がりが検出されないST17は大き過ぎる。いずれにも明瞭な炉跡はなく、柱穴も規格的に並ばない。これらから遺物は出土するものの、竪穴建物とするには不定形かつ不明瞭な状況である。

竪穴建物以外の遺構をみると、古墳時代前期とされる土坑も多数検出されている。ただし、遺物の出土は少なく、検出層位から帰属を推測しているものが多い。第5次調査のSK45土坑のように多くの遺物が出土する状況は、ほかにみられない。また、同調査のSB3建物のような方形周溝状の遺構も、前回までの調査からは確認されていない。遺構の切合関係は、古代のものとの間には多くみられるが、古墳時代間では第3次調査でST18竪穴建物を切るST19竪穴建物のみである。ただし、前者の出土遺物が少ないため、有意な時期差は看取できない。

B 出土遺物と編年

出土遺物の分類基準

今回の調査を含め、これまでの調査で本遺跡から出土した古墳時代前期の遺物をまとめ、主な器種となる器台、高坏、鉢、壺、甕ごとに、器形の特徴から下記のように細分した。一部、本遺跡でみられないものも説明の便宜上分類している（第31・32図）。

器台A：いわゆる装飾器台や結合器台などの一群。

A1：口縁部が有段になるもの。

A2：口縁端部が水平に開くもの。

A3：受部下端が突出するだけのもの。

器台B：いわゆる炉器台

器台C：脚部が「ハ」字状に開くもの。

高坏A：いわゆる東海系高坏。

高坏B：開脚形で小型のもの。便宜的に口径140mm前後以下のものとしておく。

高坏C：開脚形で、脚裾部が口径よりも大きくなるもの。

高坏D：脚部が長く、上半が中実化したもの。本遺跡からは得られていない。

高坏E：棒状脚部のもの。

E1：脚部が中空のもの。

E2：脚部が中実のもの。

高坏F：屈折脚のもの。

小型鉢A：平底环形のもの。

小型鉢B：いわゆる小型丸底鉢。

小型鉢C：口縁部で短く屈曲し、扁平なもの。

小型鉢D：口縁部で短く屈曲し、深身のもの。

鉢A：「く」字口縁で口径に対して器高が低いもの。

鉢B：小型鉢Bと相似形で大型のもの。

鉢C：いわゆる有段鉢、屈曲口縁鉢。

鉢D：口縁部が直立気味に開くもの。

鉢E：厚底の底部で深身のもの。

鉢F：台付鉢をまとめる。

有孔鉢A：「く」字口縁のもの。

有孔鉢B：素口縁で丸底のもの。

壺A：球胴の体部から直線的に開く直口壺。

壺B：素口縁壺。

壺C：複合口縁・二重口縁壺をまとめる。

甕A：口縁部が複合口縁になるもの。

甕B：口縁部有段のもの。

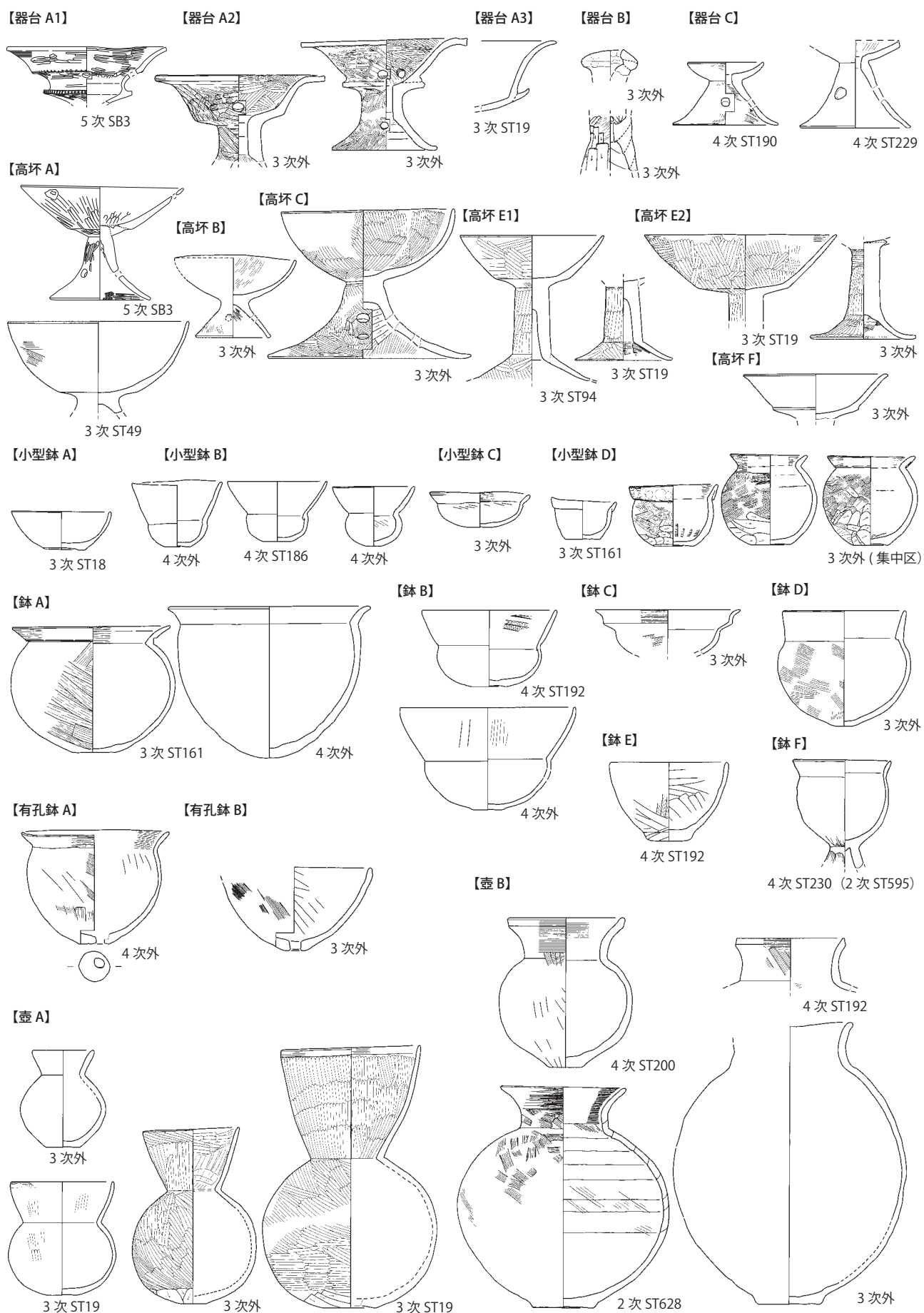
甕C：台付甕をまとめる。

甕D：「く」字口縁のものや頸が直立して開くものなど。

各器種器形と出土状況

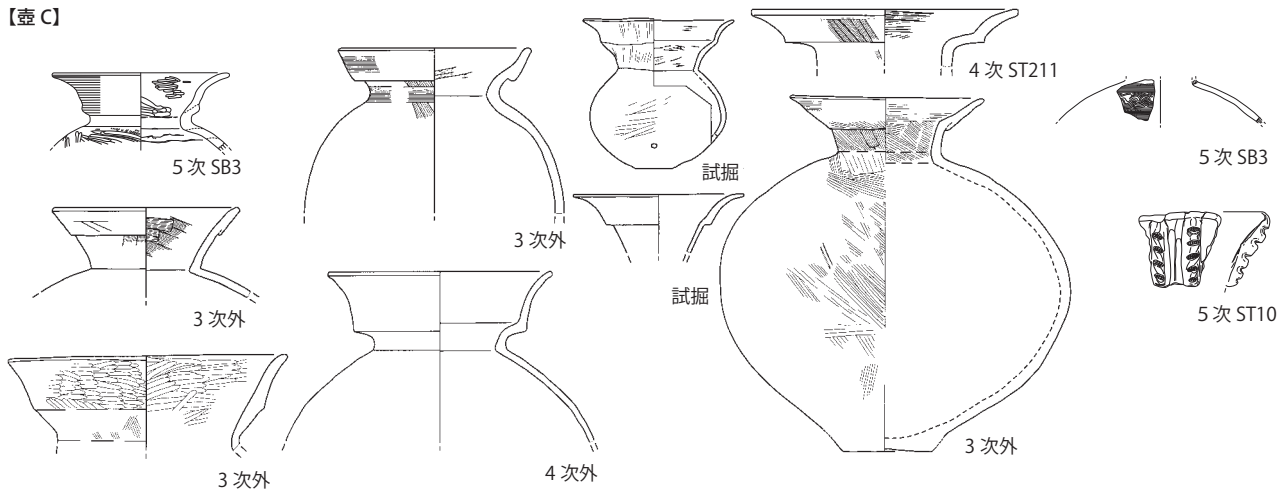
各器種の出土遺構と点数は、表10にまとめている。欠損していても判断可能なものはカウントしている。いくつかの器種器形について書き足すと、器台Aは、山形県域全体の出土点数は多くないものの、特定の遺跡に集中的にみられる。そのひとつは鶴岡市の畑田遺跡、もうひとつが本遺跡である。第5次調査SB3建物や、第3次調査遺構外出土資料にみられるものは、いわゆる装飾器台である。装飾器台とは、本来、弥生末時代終末の北陸において特徴的に出土する器台を指すものであるが、この影響を受けて簡素化されたものが古墳時代前期の東日本において隆盛する。SB3建物出土のものは器台A1とした。器壁が薄く、口縁部が有段になるのが特徴的なものである。これに対して器台A2とした3次調査遺構外出土の2点は、受部下端が突出するものとしなないものがみられるが、両者とも器壁が厚く調整や胎土の質感は類似する。器台A3とした第3次調査ST19竪穴建物出土のものは受部下端が突出するだけの簡素なもので、関東地方では結合器台と呼称されることが多い。本遺跡に近い天童市の高嶺南遺跡ST211竪穴建物から完形のものが出土している。

高坏Aは、廻間遺跡の高坏A₄型に類似するものである（赤塚1990）。典型例といえるものは山形県域には少なく、第5次調査SB3建物から出土したほぼ完形の資料は貴重な事例である。脚部下半を欠損し、坏部が半球形のものではあるが、第3次調査ST49竪穴建物からの資料もここに含めておく。高坏Bは、おおむね口径

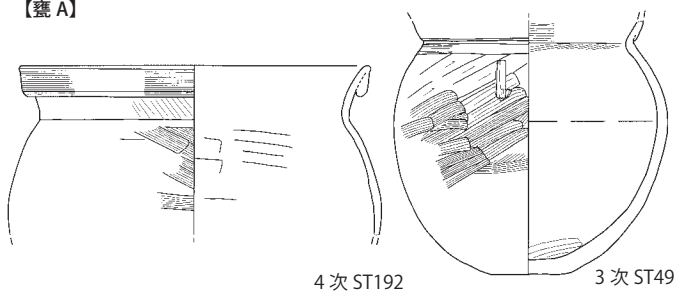


第 31 図 川前 2 遺跡出土遺物器種分類 1 (S=1/6)

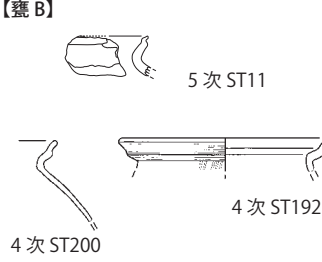
【壺 C】



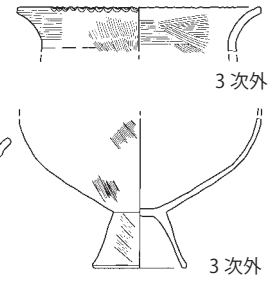
【甕 A】



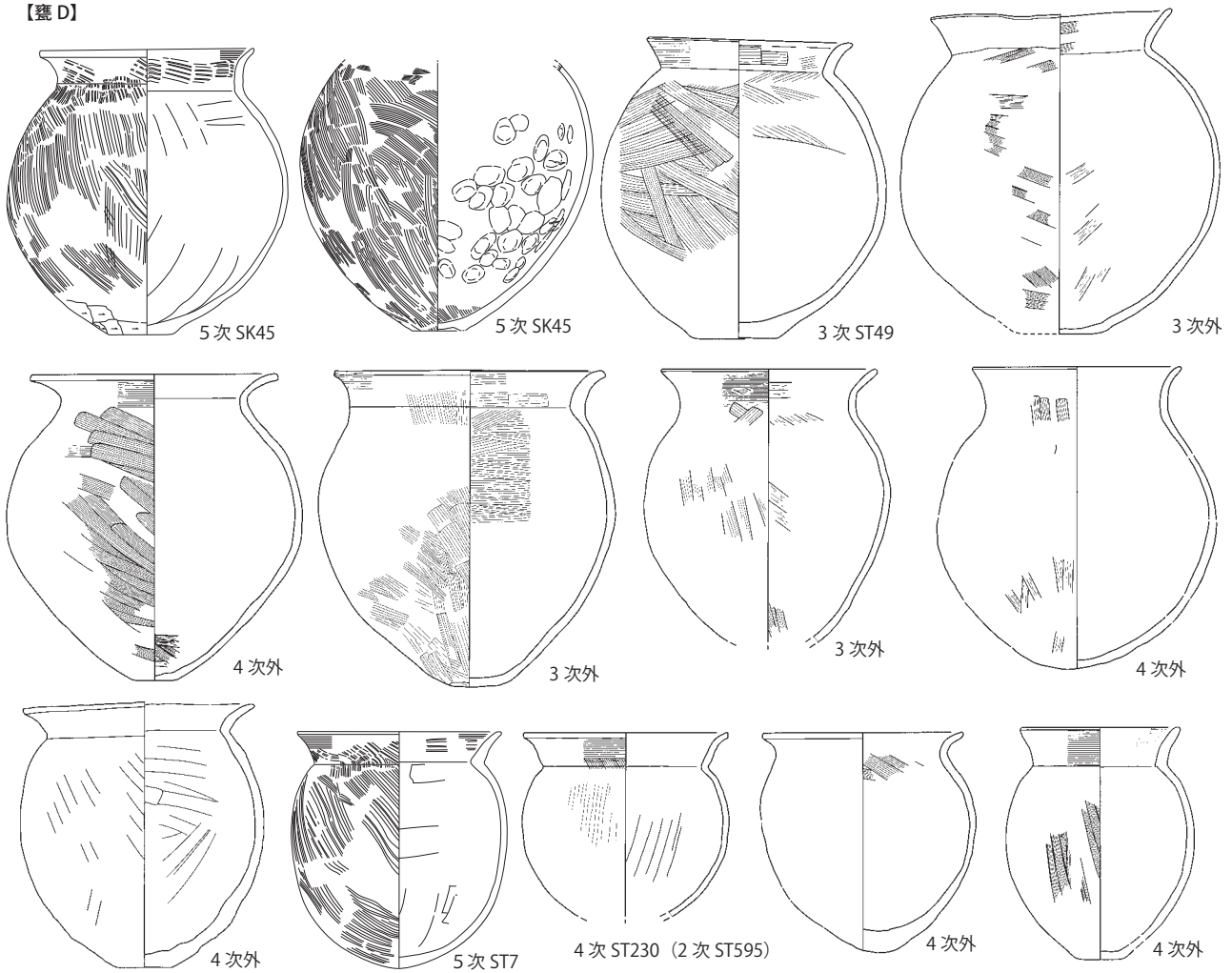
【甕 B】



【甕 C】



【甕 D】



第 32 図 川前 2 遺跡出土遺物器種分類 2 (S=1/6)

が140mm以下の小型のものである。第3次調査の遺構外出土資料にみられる。脚部裾が大きく広がる高坏Cは、宮城県域の青山分類では坏部有段のものとそうでないものとで細分されるが、山形県域の遺跡からの出土点数は限られる上、有段のものは本遺跡を含め確認されていない。県域で同タイプの高坏とされるものの多くは破片資料からの類推であり、全体が復元できるものはほとんどない。第3次調査で出土したものは、遺構外出土とはいえ全体が復元可能な貴重な事例である。高坏Eは、棒状脚部のいわゆる畿内系の高坏である。第3次調査では多くみられるが、第5次調査では古代のST4 竪穴建物に混入したもののみである。

鉢には様々な器形があり、一点物といえるようなものも少なくない。複数点みられるものや、周辺地域に同形のもので確認できるなど、典型的なものだけを抽出している。

小型鉢Aは、深身になるようなものは除いたもので、平底扁平なものを想定する。図示した第3次調査ST18 竪穴建物のほか、底部のみだが精製で平底の第5次調査SK45 土坑出土の資料もこれに含まれる可能性がある。小型鉢Bは、小型丸底鉢（壺）とされるもので、典型的なものに限らずここに含めている。第3次・第4次調査に複数みられるが、第5次調査ではみられない。小型鉢Dは、第3次調査の遺構外の遺物集中区から多数出土している。口縁部が複合口縁となるものが多いが、出土地点によって形状が異なる。

鉢Aは、甕との区別が困難になるものもあるが、相対的に口径に対して器高の低いものをふくめる。頸部でくびれて胴部が大きく張るものと、胴部は張らずに丸底か小さい底部に向けて収斂するものがある。鉢Bは、典型例として第4次調査遺構外出土のものがあり、やや小型化するものが同調査ST192 竪穴建物にもみられる。

壺Aは、小型から大型のものまであり、口縁部も長いもの短いものがみられる。欠損品であっても球形の胴部や直線的に伸びる長い口縁部などをもってそれと判断している。壺Bは、口縁が垂直に立ち上がり外反するものではあるが、バリエーションがみられる。壺Cは試掘トレンチから出土した胴部に穿孔をもつものや、破片資料のため全形は不明だが、有段口縁を成すと考えられる東海系加飾壺の胴部片と、棒状浮文をもつ大型の口

縁部片もここに加えておく。

甕Aは、第3次・4次調査の遺構出土品からみられる。遺構外出土のものには含まれていない。甕Dは、ハケメ調整を主体とし、丸底と小さい平底がみられる。頸部のくびれ方には様々なパターンがみられる。

時間軸の検討

これまでの本遺跡の調査において、遺構単位で組成の揃うものはほとんどなく、欠損品も多い。状態の良い出土遺物の多くは第3次・4次調査の遺構外出土のものである。本遺跡単独で新旧関係を整理することは困難であるため、山形盆地の古墳時代前期の資料をまとめた植松暁彦氏の編年（植松2005、2016）を中心に、宮城県域の青山博樹氏（青山2010）、新潟県域の滝沢規朗氏（滝沢2011・2012）を参考にしながら、時間軸を整理しよう。とはいえ、本遺跡の資料では基本的な組成を欠くため、何段階もの細分は難しい。よってここでは古墳時代前期を前葉・中葉・後葉の3段階に区分する。当該期の東日本の併行関係を整理した新潟シンポ編年に基づき（日本考古学協会新潟大会実行委員会1993）、概ね前期前葉は7・8期に、中葉は8・9期、後葉は9～11期に対応するものである。第1～5次までの川前2遺跡の調査をみると、相対的に第1～4次調査に前期後葉のものが多く、第5次調査には前期前葉のものが多く、これは第5次調査の方が遺構の検出面が低いこととも関係しよう。

古墳時代前期前葉

前期前葉の資料は、第5次調査SB3 建物のもものが挙げられる。ここから出土する有段口縁状の器台A1は、4章でも触れたように、新潟県胎内市の西川内南遺跡SK1002 土坑の出土品に類似したものがある。同遺跡の報告書でII期とされ、新潟シンポ7期に相当するものとされる（新潟県教育委員会2005）。このタイプの器台は当該期の新潟県域の器台をまとめた滝沢氏の説く「中島廻りタイプ」に相当するもので、新潟方面で特徴的にみられるものである（滝沢2005）。多少の時期差はあるものとしても、本遺跡の資料はほぼ同時期と考えられよう。加えて同遺構からは、いわゆる東海系の高坏の出土もみられることから、先の装飾器台と併せて前期前葉と考えるのに、これまでの編年観と矛盾しない。甕類をみると、少ない出土量と残存率のため困難であり、そこ

まで古手に見えないが、幅をもって前期前葉と捉えるには十分な資料であろう。

そのほか、単独での時期判断は難しいものの、第3次調査の遺構外出土品のなかに、脚部裾が坏部口径より大きく開くタイプの高坏Cが2点みられる。1点は脚部裾を欠くが、脚が大きく開くことが予想されるもので、もう1点は図示した全体が復元可能なものである。同タイプの高坏の出土は山形県域には極めて少なく、破片資料に限られることが多いなかで、遺構外出土とはいえ完形の資料は貴重な事例である。北陸地方では前期中葉までみられるが、東北地方の編年では前期前葉までに姿を消すとされる（青山前掲など）。近隣での出土状況を踏まえ、この時期のものと考えておく。

有孔鉢Aは、第4次調査の遺構外出土の「く」字口縁をもつ有孔鉢である。山形盆地で多くはみられない。宮城県域の青山編年では、同タイプのものは、この時期までに姿を消すとされることから同様に、前期前葉の指標と考えられる。

古墳時代前期中葉

これらに次ぐ古墳時代前期中葉の資料は、本遺跡からは得られていない高坏Dを指標とし、高坏Eへと転換する過渡期的な様相を示す一群を想定する。いくつかの鉢類はこの時期に出現し、前期後葉まで存続する。

第3次調査のST49 竪穴建物からは、脚部のみの残存であるが高坏Bと判断できるものと、脚部下半を欠くものの、高坏Aと考えられるものがみられる。小型の高坏Bは9期まで残存するとされる（青山前掲）。高坏Aは古手に置かれることが多いものの、ST49 竪穴建物出土の高坏Aは、坏部が半球形のものであり、上述のSB3 建物出土のものとは異なる。これに共伴するものを確認すると、甕Aがある。これは口縁部上半を欠くものの、残存部に肥厚が確認できる。複合口縁となるこの甕Aが山形盆地でどのように展開しているのかは推測しきれないが、多くみられるものではない。甕Aの口縁部は第4次調査ST192 竪穴建物からも出土している。この甕Aを滝沢分類の甕D類に相当するものと考えれば、7期併行までのものとされるが、全体の器形は異なるように思える。また、ST192 竪穴建物では小型丸底鉢を大型化した鉢Bと共伴する。この鉢Bは青山分類の鉢Kに相当し、その出現は9期からとされる。

これらのことを勘案し、ST49 や ST192 の資料は前期中葉を考えたい。

遺構外出土のものでこの時期に置けるものを探すと、第3次調査遺構外出土の器台A2は、東日本で多くみられるタイプで古墳時代前期を通じて確認できるため、単独出土での位置づけは難しい。ただし、前述の第5次調査SB3 建物出土の器台A1とは形態や質感が異なること、後述する第3次調査ST19 竪穴建物では前期後葉を示す土器群に器台A3が伴うこと、近隣で同タイプの器台の出土の多い新潟県域ではこれらが中葉（9期）までにはなくなるとされることなどを勘案してこれらを前期中葉に置きたい。

ほか小型鉢Cは、青山分類の鉢I、滝沢分類の鉢BⅡに相当しよう。前期前葉～中葉まで存続するとされる。

鉢Cとしたものは、有段鉢あるいは屈曲口縁鉢などと称される器形のもので、本遺跡出土のものは第3次調査の遺構外出土品1点のみである。底部を欠くものながら、畿内あるいはその影響を受けた関東地方からの波及したと考えられる器形のものであり、当該期に位置づけられよう。

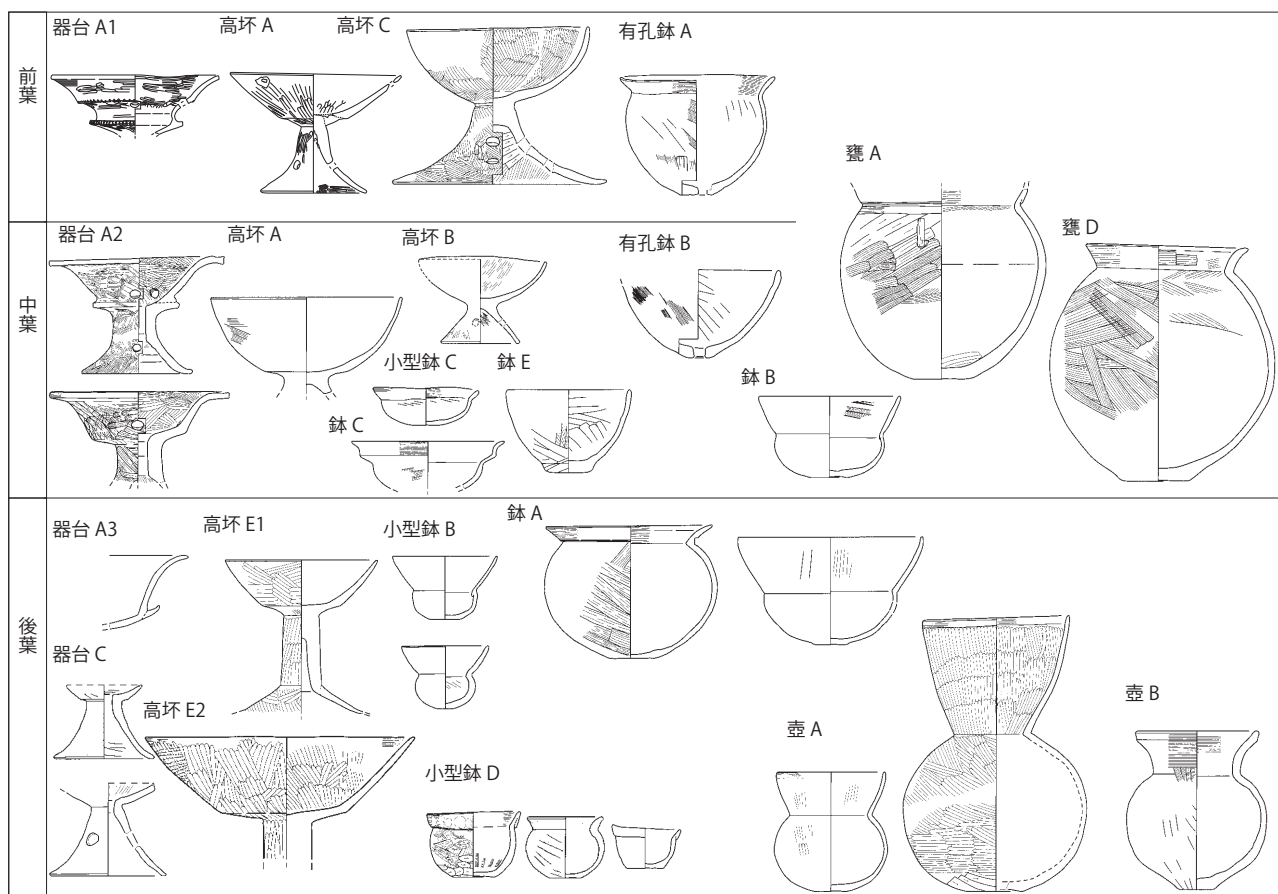
有孔鉢をみると、有孔鉢Bとした素口縁丸底の、いわゆる北陸系とされるものが2点あり、第3次調査の遺構外と、底部のみのものであるが、第2次調査のST622 竪穴建物にみられる。周辺地域と同様に山形盆地でも前期後葉には複合口縁の有孔鉢にかかわることが確認できるため、これらを前期中葉のものとして判断する。

古墳時代前期後葉

高坏Eの出現をもって分けられる一群である。前段階から継続する鉢類などは、調整や形態の簡略化や崩れが指摘されているが、後葉まで残存するものが多いため、各器種単独で両者を分けるのは難しい。

高坏Eは、第3次調査ST19 竪穴建物、同調査ST94 竪穴建物と遺構外出土にもみられる。ST19 竪穴建物からは脚部中空のE1と、中実のE2が共伴する。同遺構は、ほかにも器台A3や直口壺Aが共伴し、前期後葉の良好なセットが得られている。

また、遺物のみでは決め手に欠くものの、前節で述べた高橋南遺跡ST211 竪穴建物の貯蔵穴と類似したものを検出する第4次調査のST186・ST200・ST229 竪穴建物は、時期的にも近似すると考えられる。よって高坏



第 33 図 川前 2 遺跡編年図 (S=1/8)

表 10 遺構別組成表

	器台			高坏						小型鉢				鉢						有孔鉢		壺			甕				
	A	B	C	A	B	C	E1	E2	F	A	B	C	D	A	B	C	D	E	F	A	B	A	B	C	A	B	C	D	
2次 ST622																				1			1					2	
2次 ST628																							1						1
3次 ST16													1																
3次 ST18										1																			
3次 ST19	1							1	1													2							
3次 ST49				1	1																				1			1	
3次 ST94								1																					
3次 ST161													2	3										1					
4次 ST186											1											1							
4次 ST190			1																									1	
4次 ST192															1			2					2		1	1		1	
4次 ST193																								1					
4次 ST200												1											1		1			1	
4次 ST211			1																					3				1	
4次 ST229			2																			1						1	
4次 ST230																			1					3				5	
5次 SB3	1			1																			2						
5次 ST4 (外)								1														1						1	
5次 ST7																						1	1					2	
5次 ST10																								1					
5次 ST11																										1			
5次 ST17																												1	
5次 SK36			1																				1						
5次 SK45			1											1									1					4	
3次遺構外	2	2	4		1	2		2	1		3	1	18	5		1	1	1	1	1	1	12	3	4		3	15		
4次遺構外			1						2		3	3	9	1	1				1	1	1	5	3				21		
合計	4	2	11	2	2	2	2	4	3	1	7	1	25	18	2	1	3	2	2	1	2	24	9	19	2	3	3	58	

Eを主体とする高檜南遺跡 ST211 と上記の竪穴建物は前期後葉のものとする。

そのほか、遺構外出土のものをみると、小型鉢 Bには、第4次調査で出土しているものに、球形の胴部をもち、口径に対して器高の高いものがみられる。これは10期に置かれる滝沢分類の壺 G I 2 に類似することから、同時期の資料と考えたい。

また、第3次調査で遺構外から小型鉢 D を中心に小型の土器が集中して出土する地区がある。同調査の報告でも語られるように、これは宮城県大崎市（旧古川市）の留沼遺跡と出土状況、遺物ともに類似する（古川市教育委員会 1999）。よって、これらの資料は留沼遺跡と同時期の10期相当と考える。

これらの出土遺物から遺構の時期をまとめると、以下のように時期区分できる。

前期前葉…第5次調査 SB3 建物

前期中葉…第2次調査 ST622 竪穴建物。

第3次調査 ST49 竪穴建物。

第4次調査 ST192 竪穴建物。

前期後葉…第3次調査 ST19・94・161 竪穴建物。

第4次調査 ST186・200・229 竪穴建物。

2 SB3 建物の判断について

ここでは今回の調査で二重の溝が方形に巡る遺構 SB3 を、建物と判断した理由について述べよう。3章でも触れたように、本遺構の調査では溝で区画された内側に竪穴の掘り込みや柱穴、あるいは土坑などは検出されず、周溝状の遺構のみの検出である。このような場合、遺構の性格をどのように判断すべきだろうか。

山形県域で古墳時代に帰属する遺構で、溝が円形また方形に巡る場合、建物の外周溝か、方形・円形周溝墓、あるいはマウンドの削平された古墳などの可能性が考えられる。前者は建物の区画としてのものであり、後者は墳墓としてのものである。後者のうち、それが周溝墓か古墳の周溝かの違いは、同じ墳墓として大きな意味をもたないと考えられることはできても、建物区画とは根本的な性格の相違である。

1960年代に方形周溝墓が認識されると、以降の資料の爆発的増加に対して、関東地方では同様の遺構のほとんどを一律に「方形周溝墓」として捉えてきた。それら

の中に建物の外周溝とすべきものが相当数含まれていることは、1990年代後半に及川氏らによって指摘されるようになり、検討が続けられている（及川 1998）。一方、北陸・新潟地方では、1979年の段階で高橋保氏が新潟県柏崎市の下谷地遺跡の報告で「周溝を持つ住居跡」を提唱した（新潟県教育委員会 1979）。同遺跡では平面形の類似する両者を方形周溝墓と「周溝を持つ住居跡」に分け、後者は防湿のために掘られた外周溝と判断されている。以降、北陸・新潟地方では早くから方形周溝墓のほかに、建物の外周溝の場合もあり得るとの認識が進み、資料の集積が進んでいる。以降、この外周溝をもつ建物は、「周溝を有する建物」や「周溝持建物」などとも呼称されている。本書では検索の便宜性を考慮し、現在のところ最も普及している名称である「周溝をもつ建物」を用いる。

山形県域では、1986年に刊行された米沢市の大清水遺跡で HY7 竪穴建物の周囲に土坑や溝状遺構が途切れながら圍繞する状況が検出されている（米沢市教育委員会 1986）。同遺跡では方形周溝墓も検出されており、両者は区分されているが、北陸・新潟地方への言及はない。周溝をもつ建物として北陸側との繋がりを意識した上で確認されたのは、1995年刊行の鶴岡市の畑田遺跡における ST103 竪穴建物ら3棟が確認されたものを嚆矢とする（山形埋文 1995）。以後、山形市の梅野木前1遺跡（山形埋文 2007）、米沢市の鎌倉上遺跡（山形埋文 2012）などで同様の遺構は認識されている。これらはいずれも周溝内側に竪穴建物が検出されたもので、方形周溝墓とは区別されている。

一方、県域での方形周溝墓は、米沢市を中心に1970年代後半の調査から認識が進み、1988年刊行の比丘尼平遺跡の報告書には、市内の方形周溝墓が集成されている。以降資料は増加し、2010年段階で三浦氏が集成と考察を著している（三浦 2010）。

このように山形県域では、周溝をもつ建物と方形周溝墓の両者があることについての認識は、関東地方よりも早くから進んでいたといえる。ただし、両者を区分する方法については、特に明言されることはなく、周溝区画内側に竪穴建物があれば外周溝として、ないものはすべて墓として解釈されているように思える。では、今回の調査で検出した SB3 も、周溝内側に竪穴や柱穴が検出

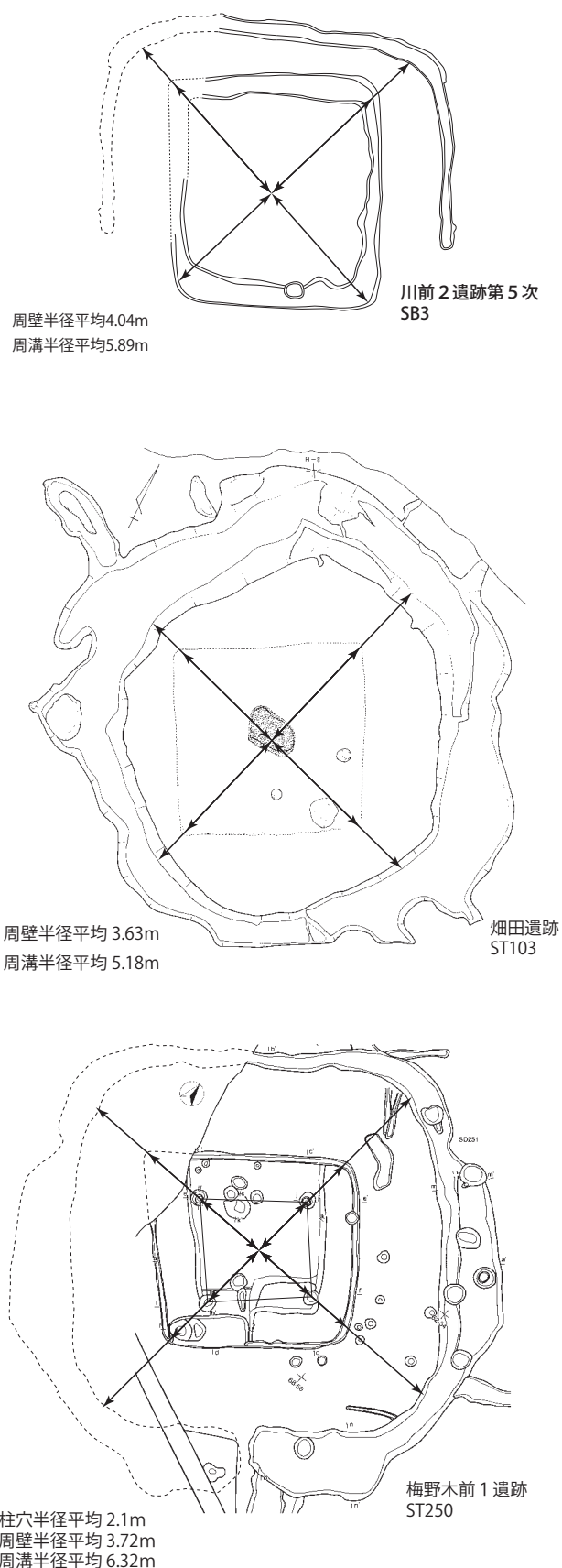
されないことから、方形周溝墓と判断できるだろうか。

山形県域で方形周溝墓として明確な事例は、寒河江市の高瀬山遺跡（1期）で検出した一群が挙げられる（山形埋文 2004a）。直線的な周溝が方形や隅丸方形に圍繞し、その区画の内側に主体部と目される方形や長方形の土坑をもつ。主体部の土坑からは人骨と琥珀玉が出土する事例もみられ、墓としての位置付けを決定的なものとする。これらは中位段丘の端部に立地しており、隣接して現存する高瀬山古墳とともに墓域を形成している。一方で遺跡内にみられる古墳時代の竪穴建物群は低位段丘に展開しており、明確に立地が分けられていたことがうかがえる。方形周溝墓の規模は外周端部幅で 10 m 以下、溝幅も 1 m 以下のものが多い。

これを今回の調査で検出した SB3 と比べると、周溝の平面形や規模については直線的な 4 辺をもち、細く深いなど共通するところが多い。その一方、周溝をもつ建物として明確な事例である先述の鶴岡市の畑田遺跡 ST103 竪穴建物などと比べると、溝は浅くて広く、全体形は不整形な円形を呈するため、これらとは別物のように思える。

しかし、SB3 が方形周溝墓であるならば、二重の周溝をもつという事例を探さねばならない。あるいは内側の SB3ED1 溝と外側の SB3ED2 溝は別物で、入れ子状に重複しているとも考えられるかもしれない。方形周溝墓は、1 辺を重複させて連結するように次のものをつくる事例は多くみられるが、入れ子状の事例は少ない。埼玉県戸田市の鍛冶谷・新田口遺跡では 100 基を超える「方形周溝墓」が激しく重複しており、これには入れ子状のものも含まれている。これに対して加納氏は関東の当該期に墓を壊すような文化的・社会的変動は考えにくいとして、ほかの遺構を誤認しているのではないかと、早い段階で問題を指摘している（加納 1992）。同遺跡を分析する福田氏も墓と建物とで区分する場合、入れ子状の重複は、それが建物のものであることの傍証とも考えられるとしている（福田 2014）。

当該期の周溝をもつ建物としての研究では、長瀬氏が周溝状の遺構を方形周溝墓と周溝内部に建物跡を伴う「周溝持建物」に分け、更に建物の痕跡が確認されず、ただ周溝のみ検出されるものを「周溝遺構」に分けている。そのうえで、周溝持建物の一群と周溝遺構が近



S=200

第 34 図 周溝をもつ建物計測図

似することを指摘し、建物痕跡が検出されない周溝遺構の内部施設は竪穴建物の可能性が高いとまとめる（長瀬2003）。全国の周溝をもつ建物の比較検討を進める岡本氏によれば、周溝の内側下端で測る周溝半径と、竪穴内の壁周溝外側下端で測る周壁半径、建物内の支柱穴で測る柱穴半径が、3:2:1になると説く。そしてこの状況が全国的にみられることから、特定の系譜ではなく共通の上屋構造を構築するための必須条件であったと説く（岡本2006）。

SB3に柱穴はみられないが、外側のED2溝を周溝、内側のED1溝を建物の壁周溝と仮定してみよう。そして岡本氏の説く比率をみると、どのような結果となるだろうか。調査区外に伸びる部分を対称形に展開するものとして復元する。また周溝が「コ」字形のため、周溝半径が2か所でしか測れないなどの問題があるが、周溝半径は5.59m、周壁半径は4.04mとなる。周壁半径を2とすると、周溝半径は2.9となり、岡本氏の分析と近

似した値を示すことがわかる。山形県域でみられるほかの周溝をもつ建物で同様の半径比をみると、畑田遺跡ST103竪穴建物で周壁半径2とすると、周溝半径は2.9となる。支柱穴が明確な梅野木前1遺跡ST250竪穴建物では柱穴半径を1とすると、周壁半径1.8、周溝半径3となる。このような結果から、畑田遺跡や梅野木前1遺跡のものとSB3は、平面的には類似しなくとも、建物の構造的な類似を説くことができよう。

山形県域で検出されている周溝をもつ建物が、幅広で浅い周溝や、土坑状に途切れたりするものに限定されているのは、内部に建物痕跡の残らない周溝遺構をすべて「方形周溝墓」と理解してきたからにほかならない。これは関東地方の研究史とも重なる問題であろう。今回の調査成果は、山形県域においても低地に展開し、同時代の竪穴建物群と近接しているような「方形周溝墓」は、今一度読み直す必要があることを示唆するものである。

引用・参考文献

- 青山博樹 2010 「古墳時代前期の土器編年—仙台平野とその周辺—」『北杜—辻秀人先生還暦記念論集—』
- 赤塚次郎 1990 『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター第10集
- 赤塚次郎 1995 「壺を加飾する」『考古学フォーラム』7
- 植松暁彦 2005 「山形県の弥生後期～古墳時代前期の様相」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
- 植松暁彦 2016 「山形県の様相」『東生』第5号
- 岡本淳一郎 2006 「周溝をもつ建物の分類と系譜」『下老子笹川遺跡（第5分冊）』富山県文化振興財団発掘調査報告第31集
- 及川良彦 1998 「関東地方の低地遺跡の再検討—弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡」を中心に—」『青山考古』第15号
- 加納俊介 1992 「方形周溝墓研究の再出発」『東海大学校地内遺跡調査団報告』3 東海大学校地内遺跡調査団
- 滝沢規朗 2005 「新潟県における古墳出現前後に盛行する装飾器台・結合土器について」『新潟考古』第16号
- 滝沢規朗 2011 「阿賀北における古墳時代前期の土器について（上）」『三面川流域の考古学』第9号
- 滝沢規朗 2012 「阿賀北における古墳時代前期の土器について（下）」『三面川流域の考古学』第10号
- 長瀬 出 2003 「南関東に地方における「周溝をもつ建物」の検討」『法政考古』第30集
- 新潟県教育委員会 1979 『下谷地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第19集
- 新潟県教育委員会 2005 『西川内北遺跡・西川内南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第146集
- 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993 『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』
- 福田 聖 2014 『低地遺跡からみた関東地方における古墳時代への変革』六一書房
- 古川市教育委員会 1999 『留沼遺跡』宮城県古川市文化財調査報告書第25集
- 三浦浩人 2010 「山形県内の方形周溝墓（低墳丘古墳）及び類似例遺跡の集成と考察」『さあべい』26号
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 1995 『畑田遺跡・中野遺跡』山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第22集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2002 『山形元屋敷遺跡』山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第109集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2004a 『高瀬山遺跡（1期）』山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第121集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2004b 『高嶺南遺跡・菖蒲江1遺跡・菖蒲江2遺跡』山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第132集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2007 『梅野木前1遺跡』山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第160集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2011 『川前2遺跡 第1・2次調査』山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第193集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2012a 『鎌倉上遺跡』山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第201集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2012b 『川前2遺跡 第3・4次調査』山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第204集
- 米沢市教育委員会 1986 『米沢市万世町桑山団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ集』米沢市埋蔵文化財調査報告書第17集
- 米沢市教育委員会 1988 『比丘尼平遺跡』米沢市埋蔵文化財調査報告書第21集

写真図版



川前2遺跡は、1.6 km北流して最上川と合流する須川左岸に位置している。須川河川改修によって遺跡の一部が掘削される川前2遺跡には、須川とともに生きてであろう人々の営みが残されている。



調査区全景（南から）



調査区全景（北から）



SB3 完掘状況 (西から)



ED1 断面 b-b' (南から)



ED2 断面 b-b' (東から)



ED1 断面 c-c' (南から)



ED2 断面 c-c' (南から)



ED1 断面 e-e' (西から)



SB3 西側拡張断面 (東から)



ED1 5 出土状況 (南東から)



SB3 9 出土状況 (北から)



ED1 13 出土状況 (南から)



ED1 15 出土状況 (南から)



SB3 完掘状況 (北西から)



SB3 完掘状況 (南西から)



ST4 完掘状況（東から）



ST4 40 出土状況（東から）



ST4 35 出土状況（東から）



ST4 36 出土状況（東から）



ST4 23 出土状況（南から）



ST5 完掘状況（東から）



ST5 断面（東から）



ST5 47 出土状況、拡張前の西壁（東から）



ST5 47 出土状況（東から）



ST5 50 出土状況（東から）



ST6・ST7 完掘状況（東から）



ST7 56 出土状況（東から）



ST7 56 出土状況（南東から）



ST8 117 出土状況（南から）



ST8 93 出土状況（西から）



ST12 完掘状況（北西から）



ST12 検出状況（東から）



ST12 69 出土状況（東から）



ST12 65 出土状況（東から）



ST12 焼土含む、貼床層（東から）



ST17 検出状況（北から）



ST17 焼土 EL1 検出状況（東から）



ST17 71 出土状況（東から）



SK36 完掘状況（西から）



SK36 断面（北から）



SK36 72 出土状況（東から）



SK37 完掘状況（南東から）



SK37 断面（南東から）



SK44 断面 (南から)



SK44 炭化物検出状況 (南から)



SK45 完掘状況 (南東から)



SK45 断面 (南東から)



SK45 遺物出土状況 (東から)



SK45 86 出土状況 (東から)



SK47 完掘状況 (北から)



SK49 北側焼土状況 (南から)



SP32 出土状況 (北から)



SP34 断面 (南から)



SP38 断面 (北から)



SP39 断面 (北から)



SP40 断面 (南から)



SP41 断面 (北から)



SP42 断面 (北から)



SP43 断面 (西から)



SP48 完掘状況 (北から)



SP18 断面 (南から)



SP19 断面 (東から)



SP21 断面 (北から)



ST10・ST11・SD9 完掘 (上が北西)



ST4 および周辺 SP 群完掘状況（上が西）



SB3 完掘状況（上が西）



調査区西壁 No.4 杭付近基本層序（東から）



調査区西壁 No.4 杭付近基本層序（東から）



国土交通省との現地打ち合わせ 平成30年4月13日



関係機関との事前打ち合わせ 平成30年5月15日



現地確認 平成30年5月15日



トレンチ調査 平成30年6月22日



表土除去 平成30年6月20日



遺構検出 平成30年6月22日



SB3 検出状況 平成30年7月3日



SB3 遺構精査 平成30年7月5日



重機による掘り下げ 平成30年8月22日



須川増水状況 平成30年8月28日



断面図作成状況 平成30年9月7日



現地説明会 平成30年10月6日



写真測量 平成30年10月12日



阿子島功氏による指導 平成30年10月16日



SB3 遺構精査業況 平成30年10月17日



調査区埋め戻し 平成30年10月29日



遺物復元作業 令和元年9月



遺構図確認作業 令和元年11月



トレース作業 令和2年11月



拓本作業 令和3年2月



原稿執筆 令和3年2月



写真図版編集作業 令和3年10月



報告書掲載番号ネーミング作業 令和3年10月



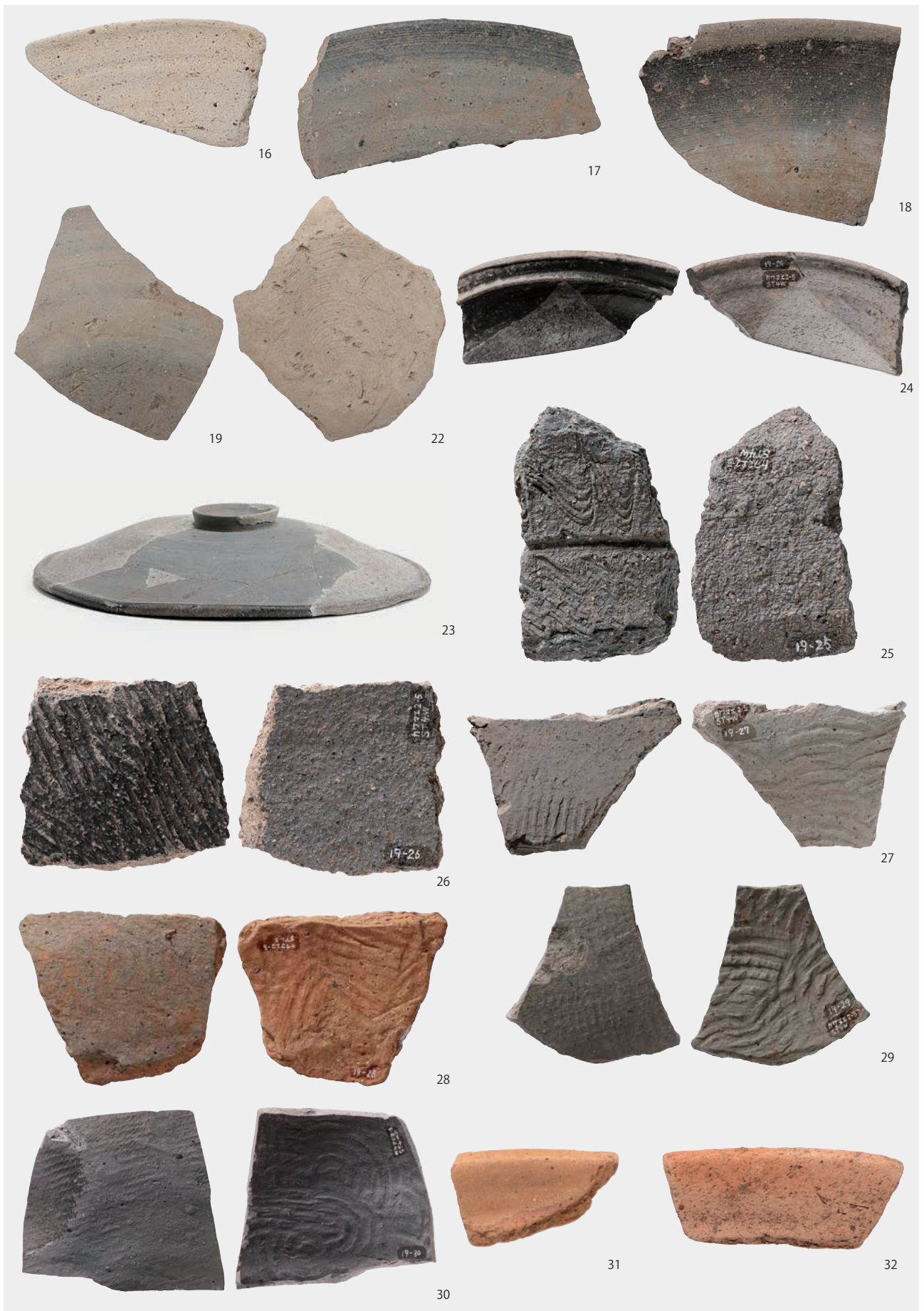
川前2遺跡第5次調査区周辺現況 令和3年11月



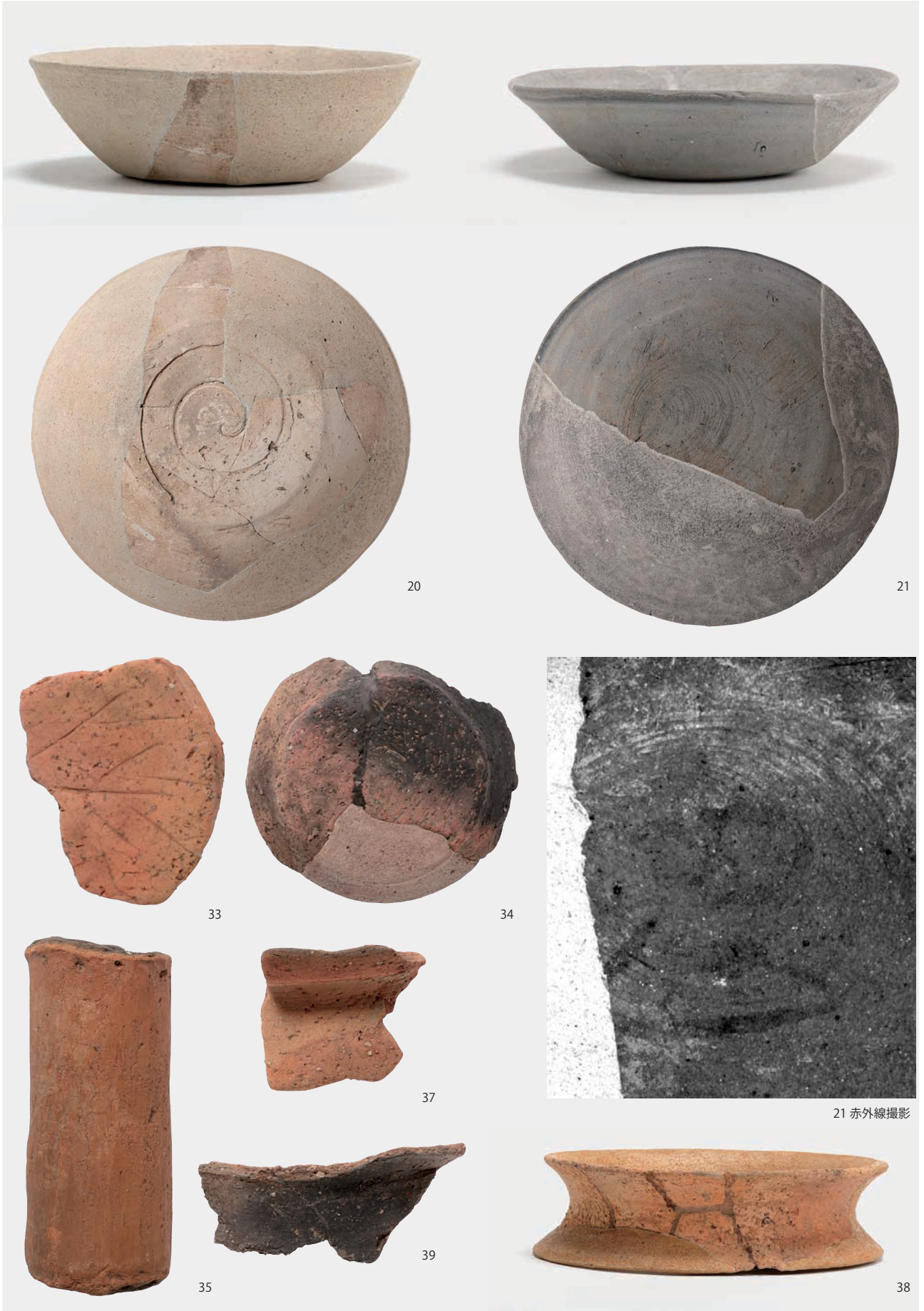
SB3 建物出土遺物



SB3 建物出土遺物



ST4 豎穴建物出土遺物



ST4 豎穴建物出土遺物



ST4・ST5 豎穴建物出土遺物



ST7・ST10・ST11・ST17 豎穴建物出土遺物



ST12 豎穴建物出土遺物



SK45
SK36・SK45 土坑出土遺物



84



85



87



86



88

SK45 土坑出土遺物



SK49 土坑、SP32・SP33・SP42 ピット、遺構外出土遺物



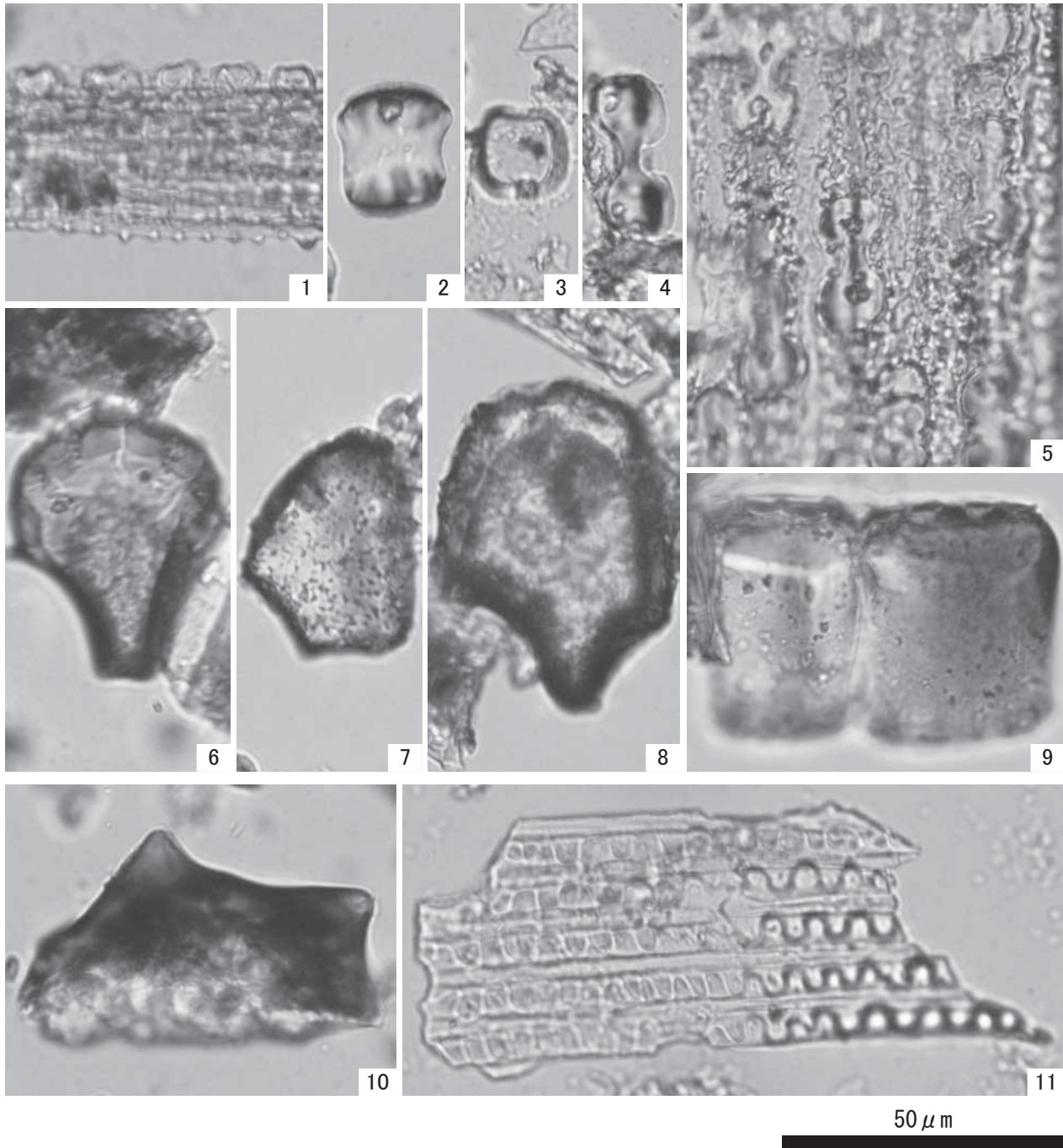
遺構外出土遺物



113

遺構外出土遺物

写真図版 29



- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1. イネ属短細胞列(ST12P5;13) | 2. クマザサ属短細胞珪酸体(SD1;1) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体(SK44;5) | 4. ススキ属短細胞珪酸体(SD1;2) |
| 5. ススキ属短細胞列(ST12P5;13) | 6. イネ属機動細胞珪酸体(ST12P4;12) |
| 7. クマザサ属機動細胞珪酸体(SD1;1) | 8. ヨシ属機動細胞珪酸体(SD1;1) |
| 9. ススキ属機動細胞列(ST12P5;13) | 10. イネ属穎珪酸体(ST12P6;14) |
| 11. 不明組織片(ST12P6;14) | |

報告書抄録

ふりがな	かわまえにいせきだいがじはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	川前2遺跡第5次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第244集							
編著者名	天本昌希・高桑弘美(他は凡例に記載)							
編集機関	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-3246 山形県上山市中山字壁屋敷5608番地 TEL 023-672-5301							
発行年月日	2022年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
かわまえにいせき 川前2遺跡	やまがたけん 山形県 やまがたし 山形市 おおあさなかのめ 大字中野目 あざあかさか 字赤坂ほか	6201	244	38° 19' 41.34"	140° 18' 22.90"	20180606 } 20181102	2,000	須川河川 改修事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
かわまえにいせき 川前2遺跡	集落跡	弥生時代		弥生土器(中期後半)		(文化財認定箱数: 10)		
		古墳時代	周溝をもつ建物 1 竪穴建物 5 土坑 ピット	土師器 石製品				
		奈良・平安時代	竪穴建物 3 土坑 ピット	土師器 須恵器				
要約	<p>須川河川沿いに営まれた集落で、今回で5回目の調査となる。古墳時代前期の集落と奈良・平安時代の集落である。古墳時代の周溝をもつ建物からは、日本海側からの影響をうかがわせる装飾器台と、いわゆる東海系の高坏が出土している。</p>							

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 244 集

川前 2 遺跡第 5 次発掘調査報告書

2022 年 3 月 31 日発行

発行 公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒 999 - 3246 山形県上市市中山字壁屋敷 5608 番地
電話 023-672-5301

印刷 田宮印刷株式会社
〒 990 - 2251 山形県山形市立谷川 3 丁目 1410-1
電話 023-686-6111

この PDF データは下記の報告書を底本として作成しました。

閲覧を目的としていますので、詳細な写真や図面が必要な場合は、底本を参照して下さい。

底本は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター、山形県内の市町村教育委員会、図書館、各都道府県の埋蔵文化財センター、考古学を教える大学、国立国会図書館等に所蔵されています。

所蔵状況や利用方法は、直接各施設にお問い合わせ下さい。

書名：川前 2 遺跡第 5 次発掘調査報告書

発行：公益財団法人山形県埋蔵文化財センター

〒 999-3246

山形県上山市中山字壁屋敷 5608 番地

電話 :023-672-5301

URL:<http://www.yamagatamaibun.or.jp/>

mail:yac@yamagatamaibun.or.jp

電子版作成日：2022 年 3 月 31 日